

わたしたちは

自我を本人だと思っていました。

けれどもそうではなかったのです。

自我は「世の中」でした。

驚くべき真相へご案内します。

あなたは本人であってください。

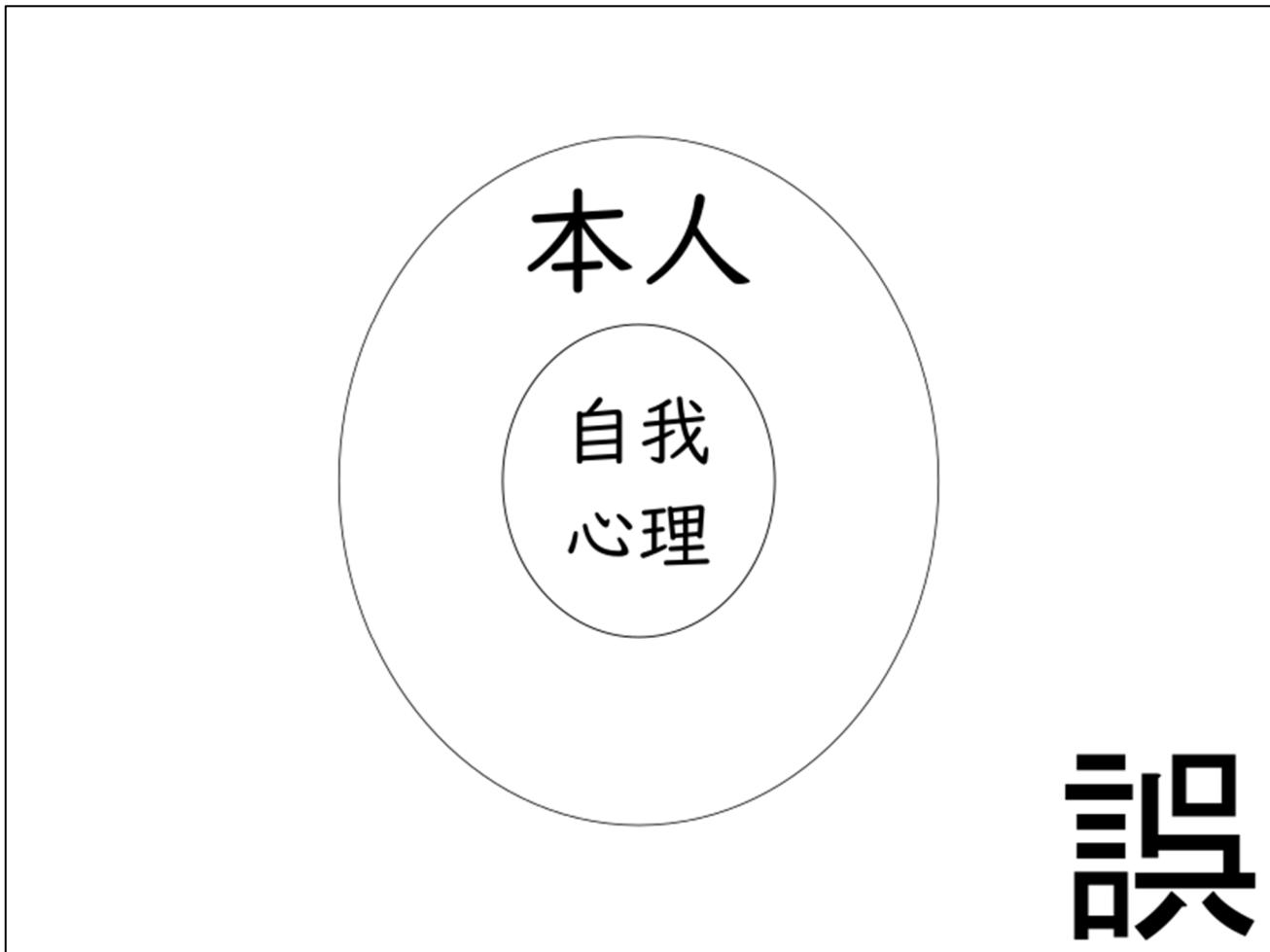
九折空也

- 【図1】わたしたちの思い込んでいた誤解
- 【図2】自我は世の中にあり、本人は別のところにある
- 【図3】世の中に「元型」の心理群がある
- 【図4】「世の中」のイメージと情動
- 【図5】「周辺的」という意味の誤解
- 【図6】「周辺的」という正しい意味
- 【図7】われわれの現実的な誤解と混乱
- 【図8】なぜ「本人」が出会わないかの真相
- 【図9】「世の中」が強くなると、本人は消失する
- 【図10】かつては「世の中」がそこまで強くなかった
- 【図11】「本人」を問われたときの不能性
- 【図12】人と自我の営為差分
- 【図13】世の中は「心理的」であり、「本人」は不在
- 【図14】自我インフレーション
- 【図15】作品的欲求不満ヒステリー
- 【図16】「ネタ」にして混ぜ返す
- 【図17】情動ではない「もの」
- 【図18】本人は「もの」、自我は「分解」
- 【図19】分解によって「もの」は不可逆に失失する
- 【図20】本人は「話」、自我は「主張」
- 【図21】聖俗、「触れられないもの」
- 【図22】「聖なる気持ち」は存在しない
- 【図23】われわれがしている「聖への誤解」
- 【図24】正しい聖俗の構造
- 【図25】誤った聖俗の構造
- 【図26】聖俗による魂のヒステリー
- 【図27】聖俗による魂の自己実現
- 【図28】やかんという「もの」に重さはない
- 【図29】「本人」は肉体である
- 【図30】聖なる気持ちで「しんどい」から逃れようとする
- 【図31】力関係の信仰
- 【図32】誰かの「本人」に肉体が救われるケース
- 【図33】淨・不淨についての誤解
- 【図34】正しい淨
- 【図35】肉体労働と具体的運動
- 【図36】ブラック
- 【図37】セルフ・ブラック
- 【図38】引きこもっていくわれわれ
- 【図39】誰かの本人に「出会い」方法
- 【図40】肉体労働の対価としての金銭
- 《おわりに》
- 【基礎問題1.】
- 【基礎問題2.】
- 【応用問題1.】
- 【応用問題2.】
- 【応用問題3.】
- 【応用問題4.】
- 【応用問題5.】
- 【応用問題6.】
- 【応用問題7.】
- 【応用問題8.】
- 【??】

あなたは  
「本人」で  
あって  
ください



【図1】わたしたちの思い込んでいた誤解

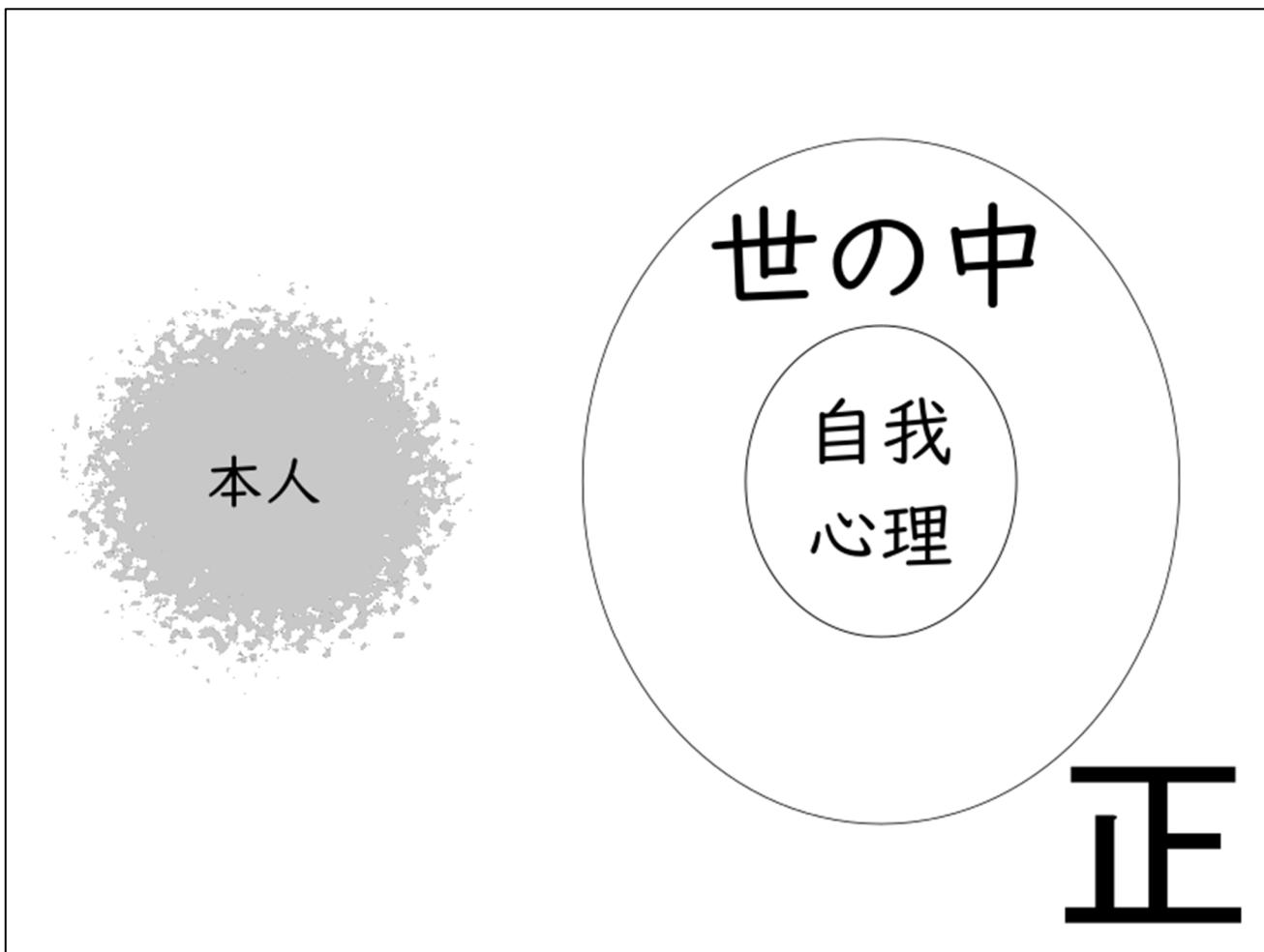


わたしたちは「本人」の中に、自分の心理や自我があると思い込んでいました。

けれどもこれは誤解だったのです。

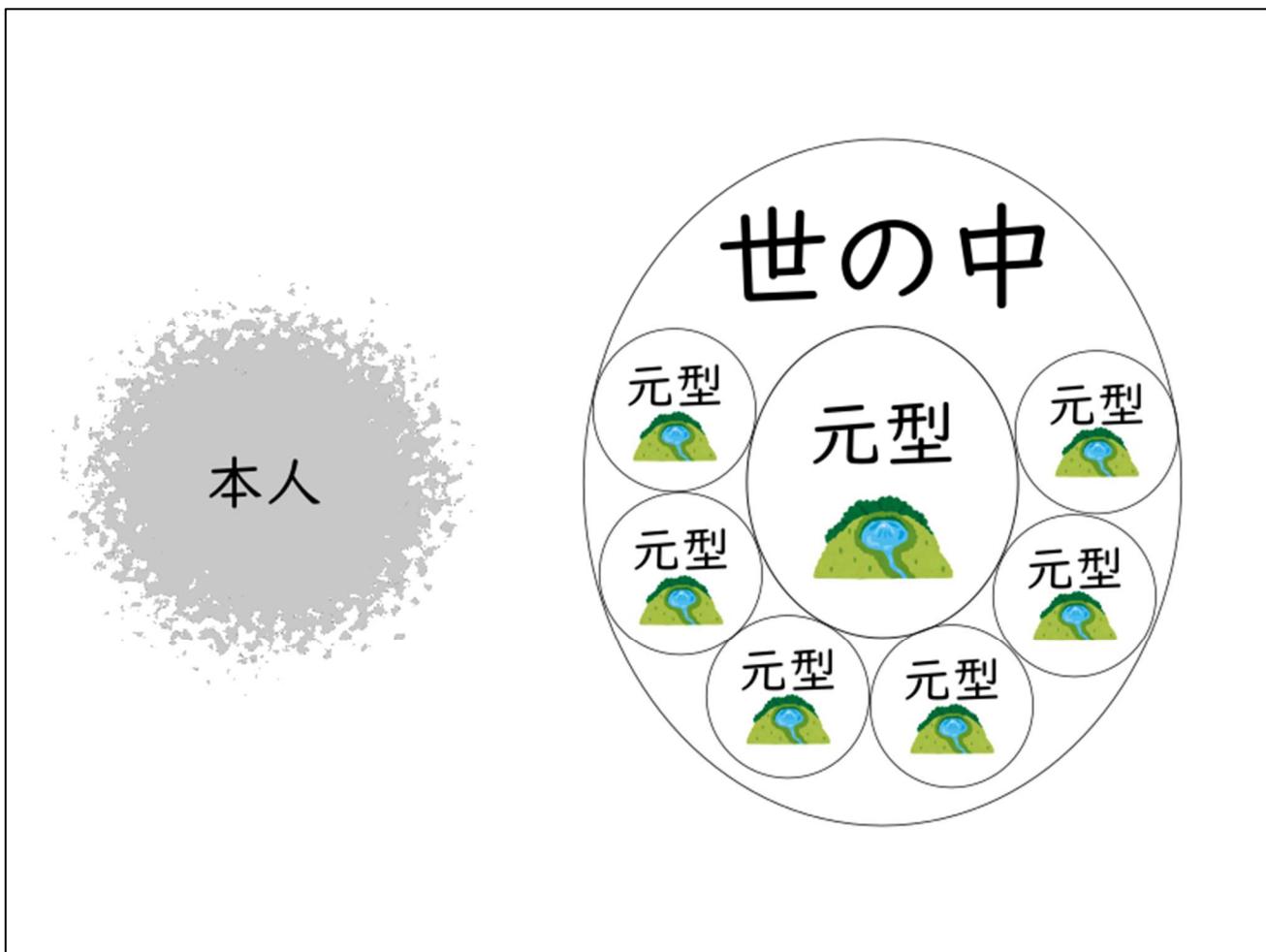
本当は、自我はどこにあるのでしょうか、「本人」はどこにいるのでしょうか。

【図2】自我は世の中にあり、本人は別のところにある



驚いたことにこれが真相です。自我は世の中に発生しています。本人は世の中とは別のところに存在しています。

### 【図3】世の中に「元型」の心理群がある



世の中は「心理」というメカニズムから形成されています。そのメカニズムの源泉は「元型」と呼ばれています。心理学者ユングの唱えた説です。

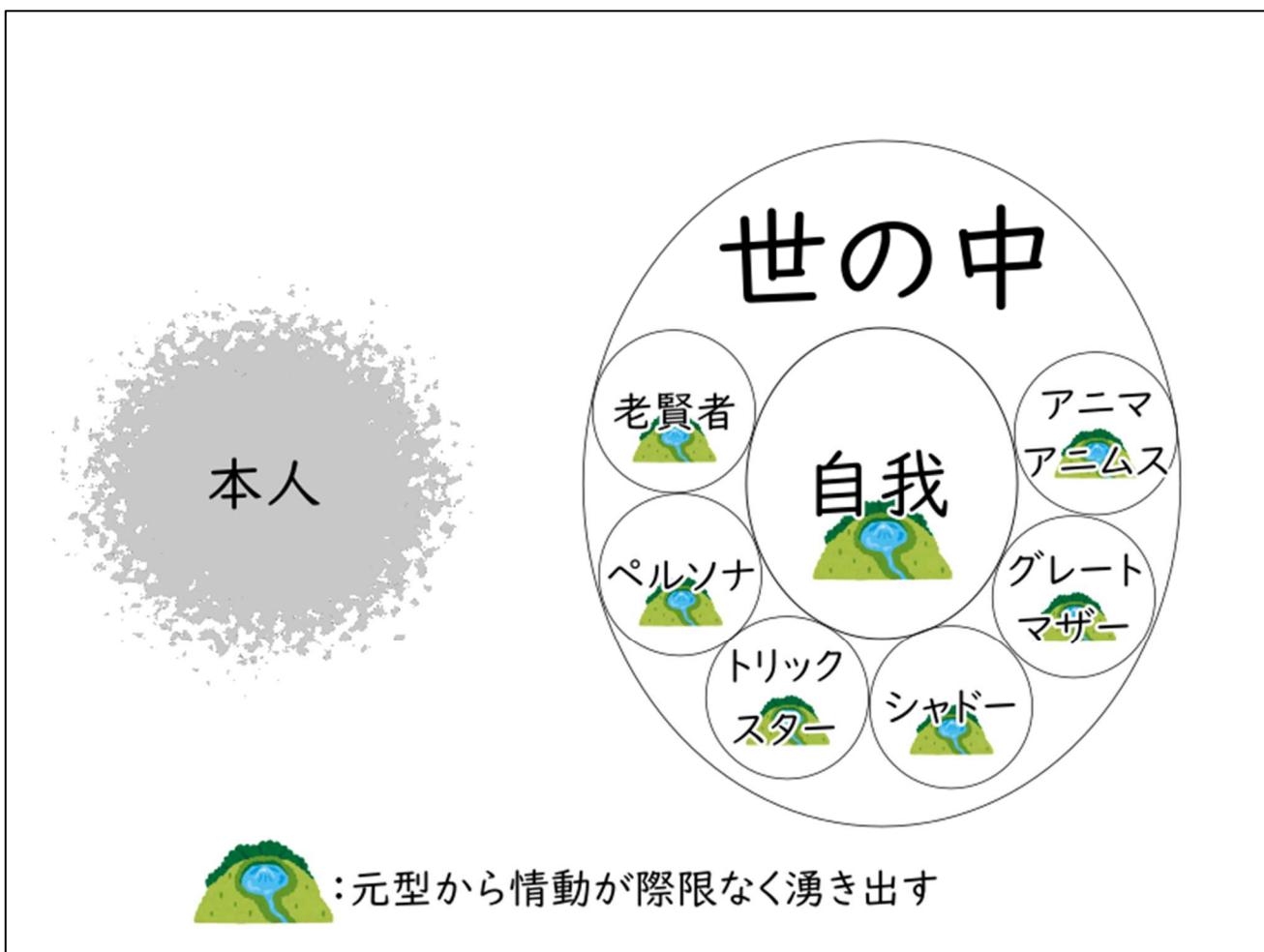
元型はイメージですが、イメージ「だけ」のものではありません。必ず、強い情動を伴います。情動が際限なく「湧き出す」ことを示すのに湧き水のイラストを添えました。

情動の湧き出しを伴っていなければそれは心理とは呼ばれません。

そして「自我」もまた元型のひとつなのです。自我は、われわれが意識できる唯一の元型です。

自我まで含めた元型群、そこから湧き出す情動・心理群によって、われわれの世の中は形成されています。

#### 【図4】「世の中」のイメージと情動



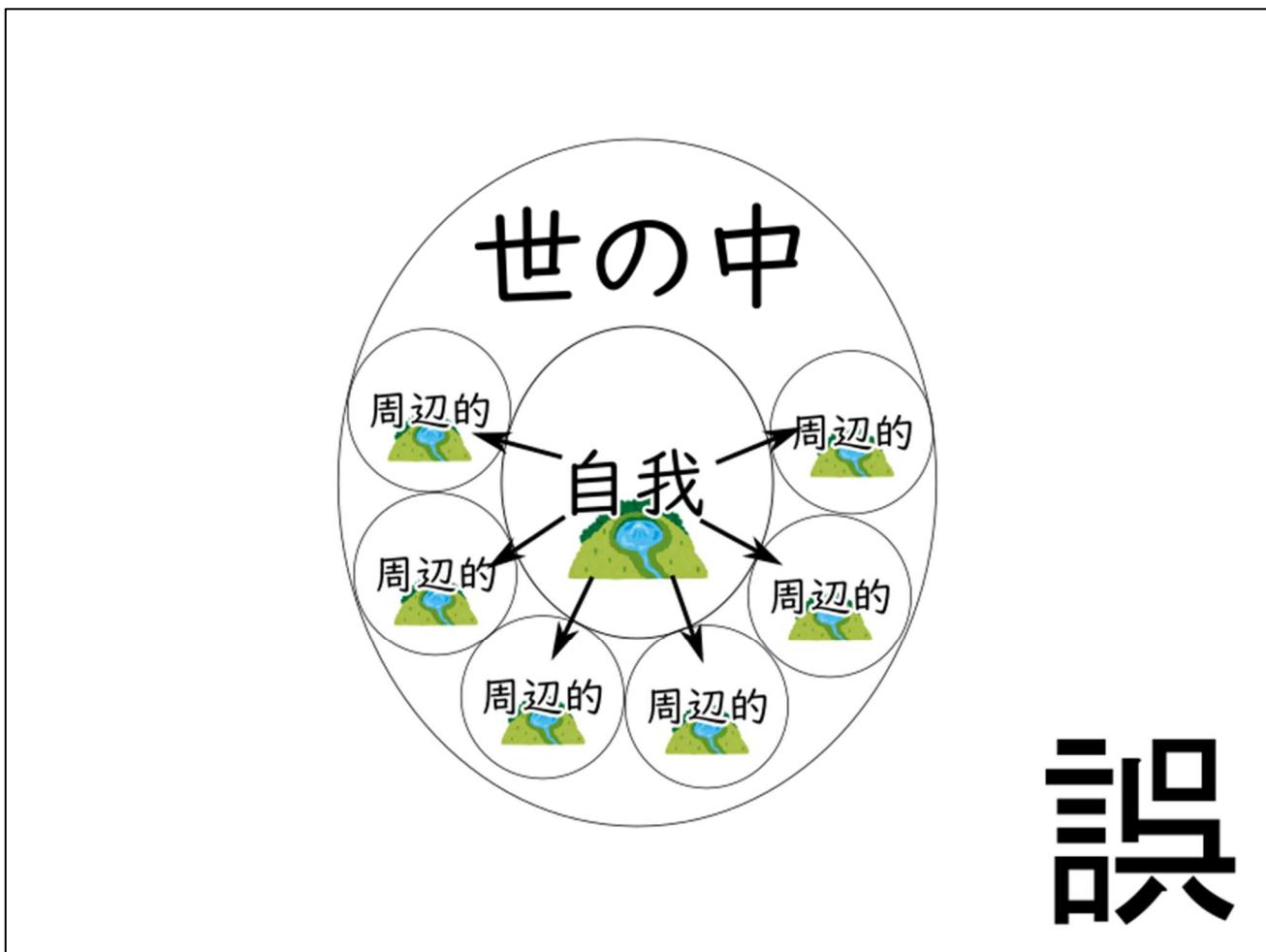
- 老賢者 : 叡智に到達している老人、というイメージと情動。
- グレートマザー : 母なるものに包み込まれる、そこへ取り込まれてゆく、というイメージと情動。
- 自我 : 「わたし」という意識、自意識。「自分」にかかわる情動。差別や比率の情動。  
(われわれは唯一、自我だけはイメージでなく直接それを捉えることができます)
- シャドー : 裏のわたし。自我とは正反対の、闇にひそむわたしの片割れというイメージと情動。
- アニマ・アニムス : 理想・永遠の異性。性的に果てしない結合。そのイメージと情動。
- トリックスター : 道化。世の中を引っ搔き回す存在。そのイメージと情動。
- ペルソナ : 仮面。自分の「役」になりきろうとするイメージ、およびそのことへの情動。
- 子供（図省略） : 永遠の少年、永遠の少女、無垢と神秘的庇護のイメージ、およびそのことへの情動。

これらの元型群（イメージと情動の源泉）は、はっきりとは定義できないものですが、上記のものが存在するというのが一般的な定説です。その他「英雄」などが元型と言われることもあります。

図4は、われわれがまさにこうした「世の中」にいるということを示しています。

「世の中」の真ん中に、われわれの「意識」、自我が存在しているように思えて、われわれはこれを自分の「本人」だと誤解し続けてきたのです。

【図5】「周辺的」という意味の誤解

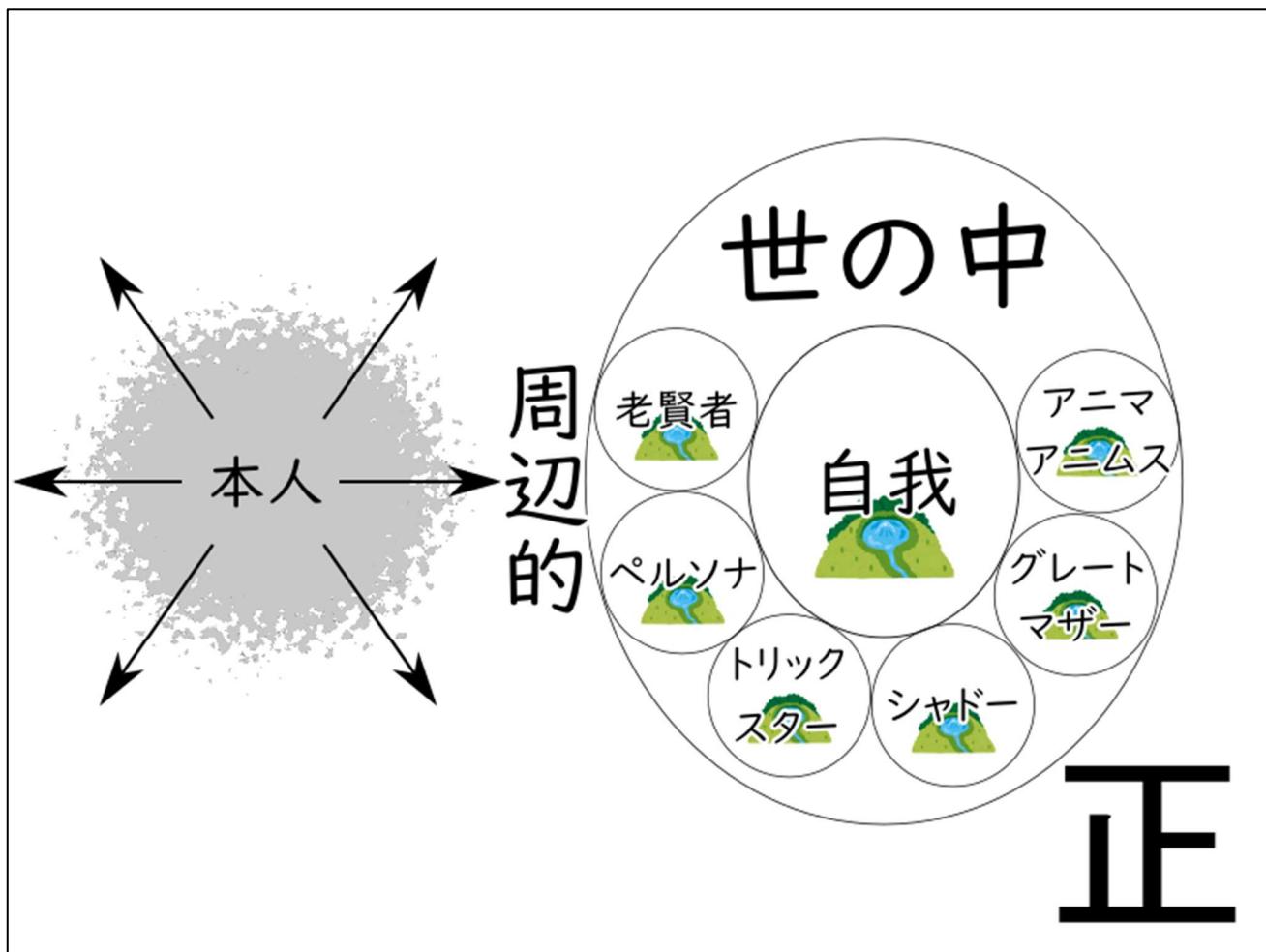


ユングは周辺的無意識という説を唱えました。周辺的無意識の中に、情動の源泉たる「元型」がいくつか存在すると見抜いたのです。

それで一般的には、自我の「周辺」にある元型群がそれにあたると捉えられてきました。ですがこれは誤解でした。どうもユング当人もこの誤解の中にあったように感じられます。

われわれの日常的な感覚だと、自我が中央にあるという気がじつにします。それで、中央の自我に対して「周辺的」にその他の元型群があるのだと誤解したのです。

【図6】「周辺的」という正しい意味



正しくは、「本人」に対して世の中・元型群が周辺的なのであり、自我という元型も「本人」に対して周辺的に存在します。

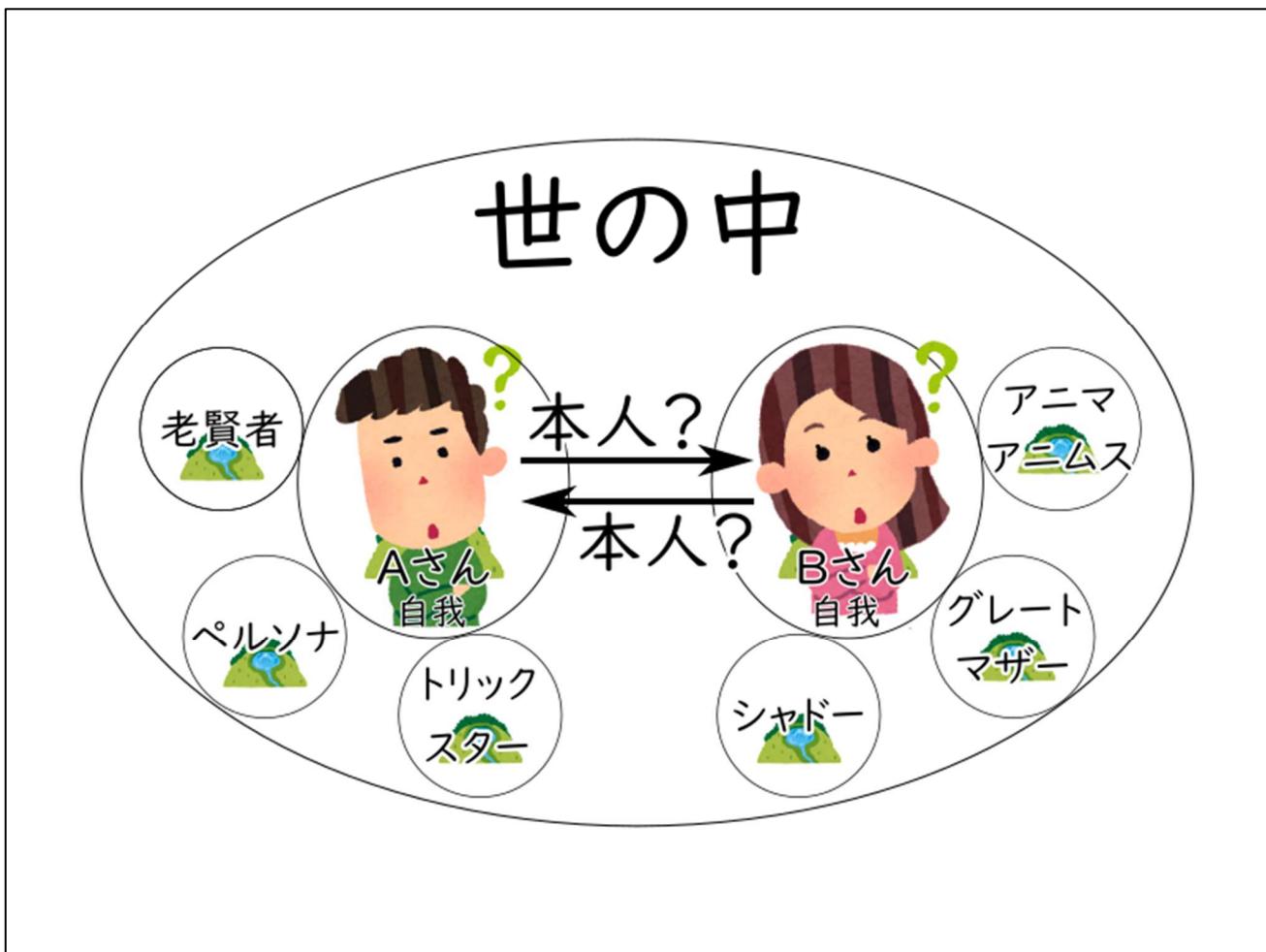
自我はそれじたいが強い情動を起こすということを、われわれは経験から直接知っています。その情動は自己愛だったり選民意識だったり自己憐憫だったり自意識過剰だったりしますが、こうした情動が際限なく湧きうるのは、自我が周辺的な元型のひとつだということを意味しています。

一方、本人は「もの」なので、本人という「もの」からは情動は湧き出しません。よって「本人」は情動ではなく、「世の中」の外側に存在しています。

「周辺的」というのは、その本人から見て元型群が周辺的だという意味です。

お城には本丸があり、周辺に城下町があるように、人は「本人」の周辺に自我を含めた世の中・元型群があります。

## 【図7】われわれの現実的な誤解と混乱

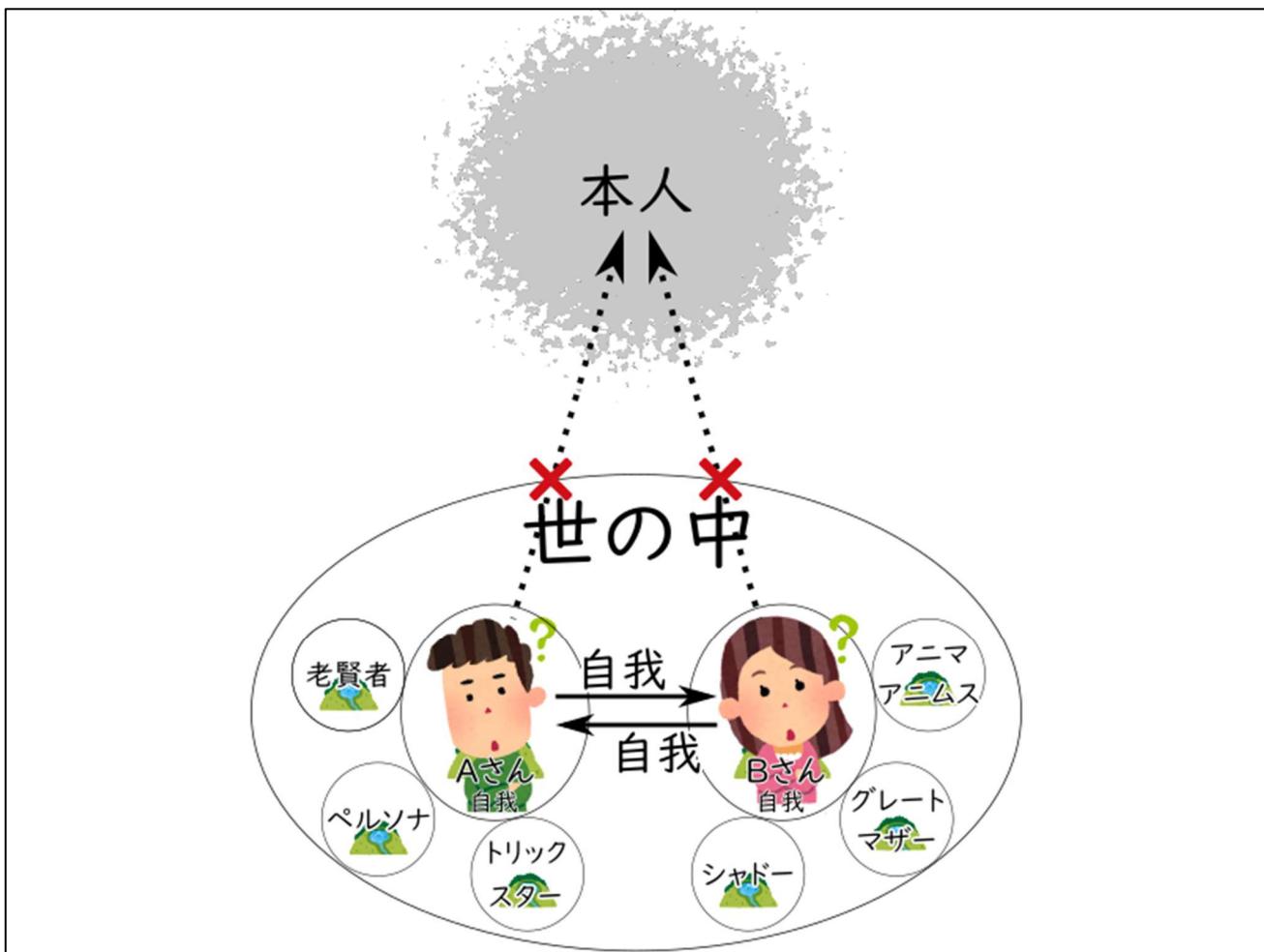


AさんとBさんが対面しているとします。AさんとBさんはそれぞれ「本人」同士で向き合っているつもりであり、「本人」同士で接触しているつもりでいます。

これはわれわれの日常・常識における「人とのやりとり」の図式であって、われわれはこのことに疑問も違和感も覚えません。けれどもいっぽうで、なぜかお互いの「本人」に出会ったという感じは受けないという事実も知っています。

現代においてはこのように、互いに自我でやりとりしながら、いつまでたっても「本人」には出会うことがないため、空漠としたさびしさが続くばかりになっています。一時的には楽しくても、直後にはやはり「本人」には出会っていないため、むなしさとさびしさが押し寄せてきます。

## 【図8】なぜ「本人」が出会わないかの真相



なぜ「本人」に出会った感触がしないのでしょうか、それは真相を明かせば単純なことです。

AさんもBさんも、それぞれが「本人」にアクセスしていないですから、AさんBさんが相互に本人として出会うということはありません。

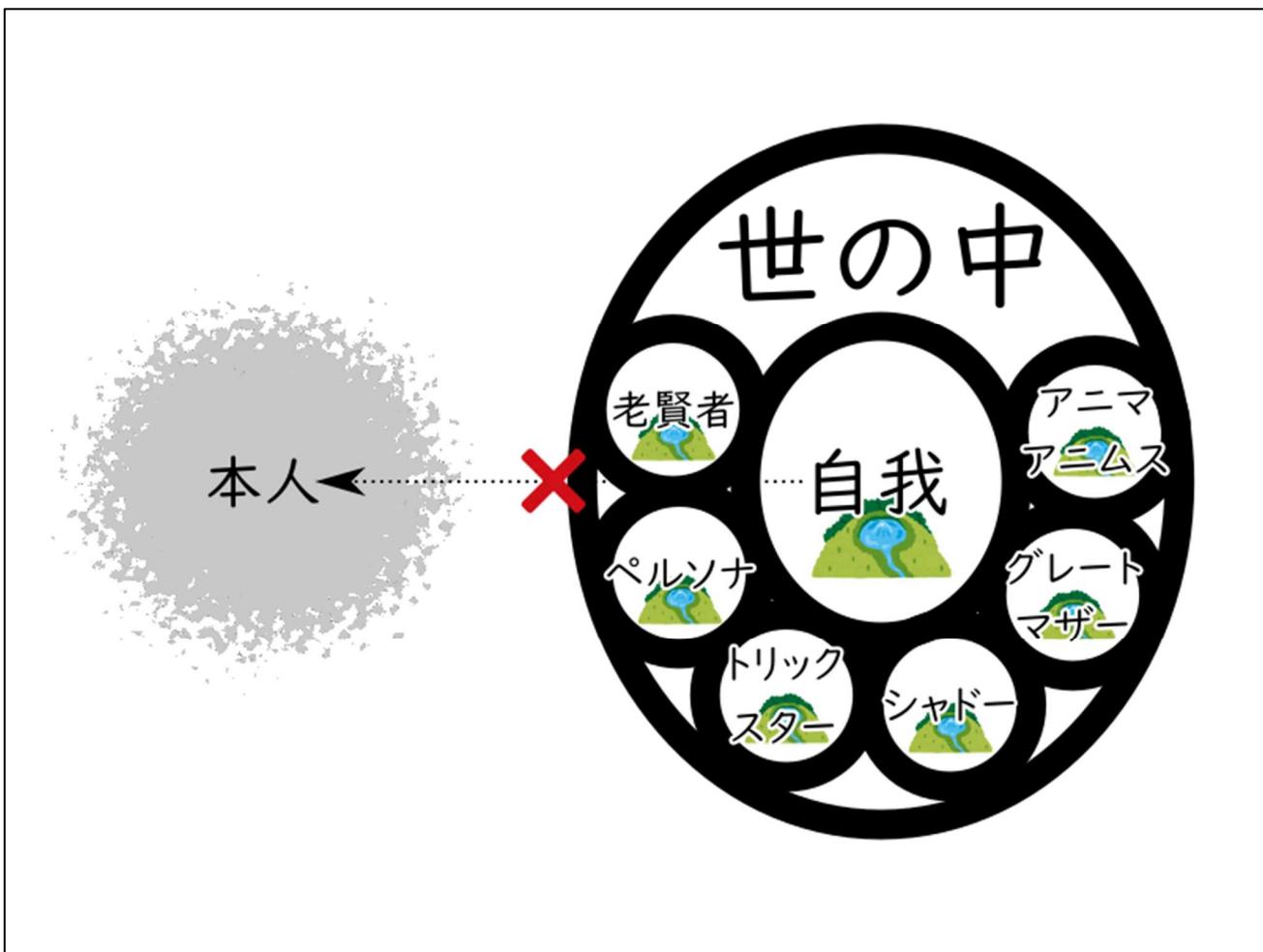
AさんもBさんも、世の中の「自我」が自分であって、その外側に自我とは異なる「本人」という事象があるということはまったく知らないし考えもしないという状態です。

AさんとBさんはしばしば、情動によって自我同士で熱烈にやりとりをすることもありますが、それにしてもそのやりとりはすべて「本人」のものではなく周辺的なものにとどまります。

仮にそのやりとりが相互に攻撃的だった場合、その最中は熱中していても、後日には「何の実りもないことで、不毛な消耗をしてしまった」とむなしく思うものです。

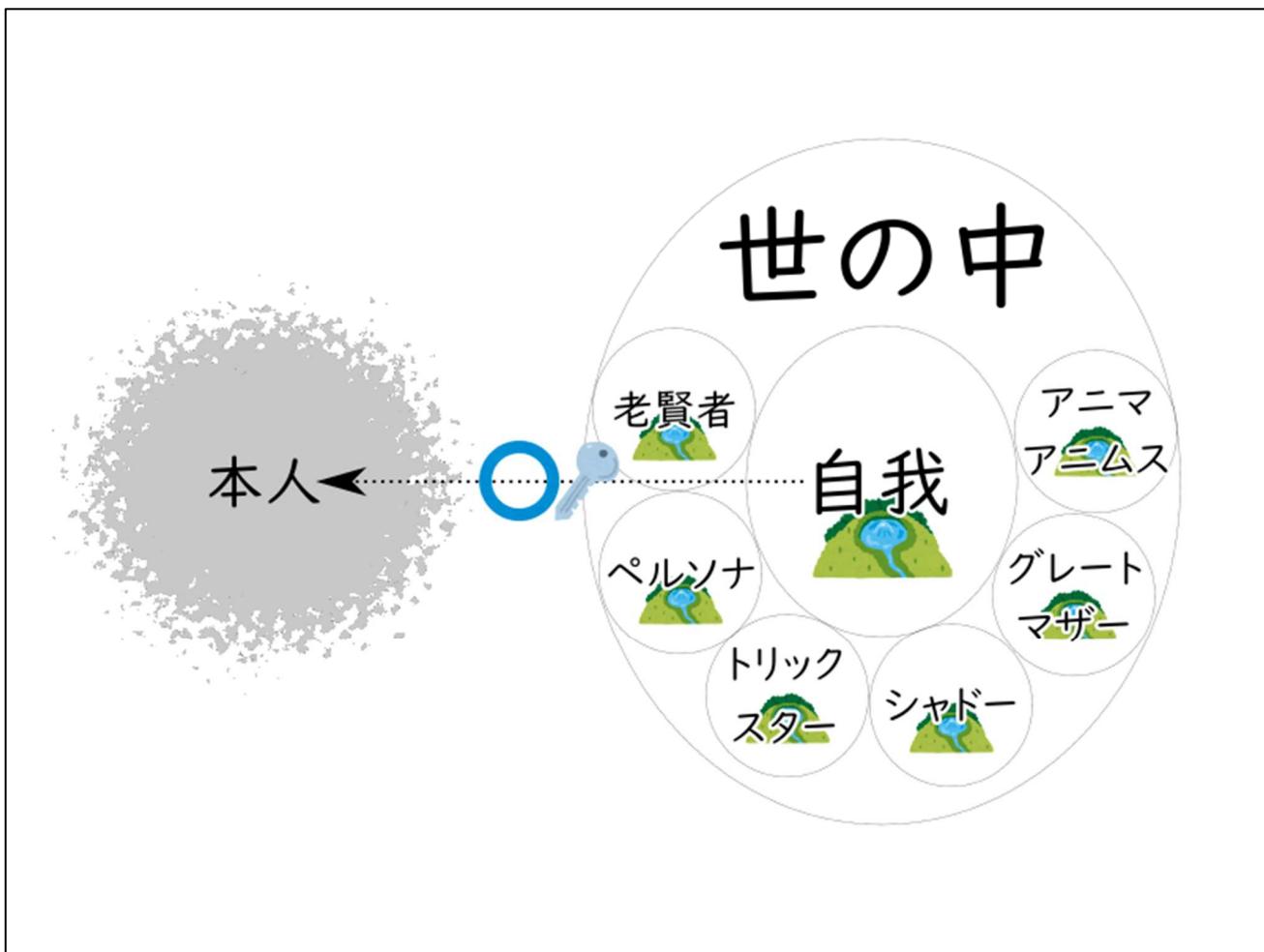
あるいは、そのやりとりが相互に恋愛的だった場合、その最中は熱中していても、熱が冷めてくるとしだいにむなしく思うようになり、実りよりも消耗を感じて嫌気がさしてくるようになるものです。

【図9】「世の中」が強くなると、本人は消失する



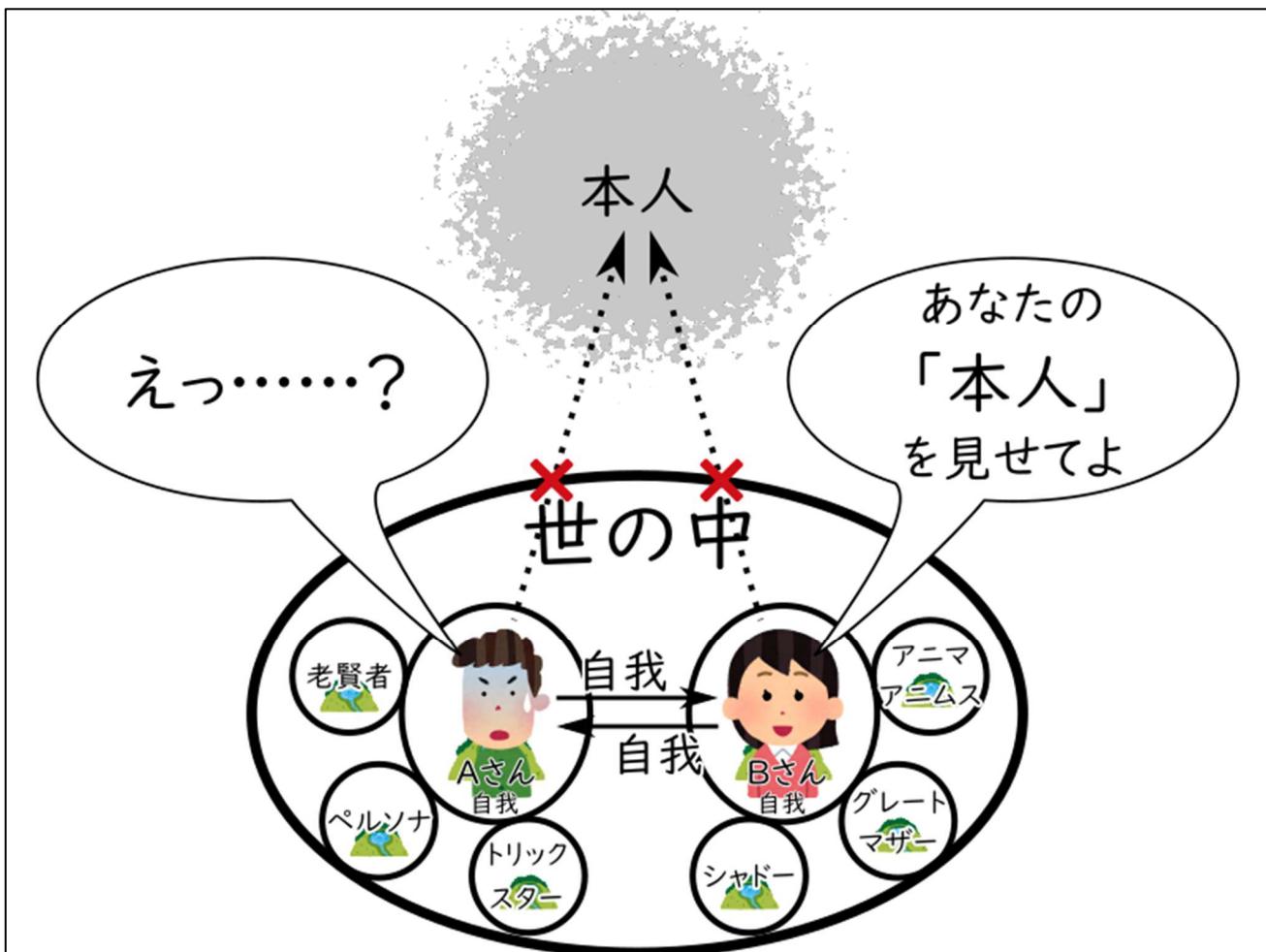
「世の中」は元型群であり、情動群、心理群です。それらのすべてが「強く」なると、世の中で「自我」も強くなりますが、強くなればなるほど、「本人」へのアクセスは断たれていきます。

## 【図10】かつては「世の中」がそこまで強くなかった



「世の中」とは何かといえば、とりあえずSNSをはじめとした炎上や、さまざまなポリティカルコレクトネスにかかる騒動でも思い出してもらえればそれでかまいません。それが「世の中」です。かつては、人々が駅前に自転車を放置していてもとやかく言われることがなく、路上で喫煙していてもとやかく言われることがありませんでした。それは他人に迷惑をかけないという一点のみの善悪でいうと善ではなかったのでしょうが、事実あまりとやかくは言われなかったのでした。それはかつて「世の中」がここまで強くなかったということです。そのぶん、人々の自我はここまで強くなく、それぞれが「本人」にアクセスすることに可能性がありました。（もちろんそのぶん、無法がまかりとおる理不尽もあちこちで横行してはいたのです）

【図11】「本人」を問われたときの不能性



Bさんにとって、Aさんの「本人」と出会っていないのであれば、その交友は無意味なことです。それでBさんはAさんに、Aさんの「本人」を見せてくれるように要求します。しかしAさんは強くなつた「世の中」に自我を閉じ込められており、Aさん自身も自分の「本人」にアクセスができません。よってAさんは引き続き、心理的な自分・情動的な自分、つまり「自我」を本人だと主張し、「これが僕だよ?」とアピールするよりありません。それがBさんにとってどこまでも、やはりAさんの「本人」ではないと感じられ、違和感・むなしさを覚え続けます。

われわれはいくつかの営為において「本人性」を問われます。恋あいや青春、セックスや考え方、生きることそのもの、芸術や作品においては、「本人」のそれであることがすべてになります。比較競争のたぐいならば「結果」の比率をもってその実たるを主張することができますが、そうでない「もの」は本人性がすべてになります。

たとえば図の場合、Bさんが歌が上手だったとして、それがBさん「本人」の歌と声でないならば、それが上手ということに芸術的な価値はありません。世の中での比較評価は受けますが、それでBさんという本人の存在に触れられるわけではないのです。たとえば高学歴の学校に行ったからといって必ずしも学生生活という青春があるとは限りません、青春を得るのは比較ではなく「本人」という「もの」だからです。

**【図12】本人と自我の営為差分**

テーマ	本人	(本人の動力)	自我	(自我の動力)
叡智、考え方	叡智という「もの」 考え方という「もの」	主体性	叡智キャラ、考え方キャラ	老賢者情動
帰属、母なるもの	自分の出自という「もの」	主体性	親孝行キャラ、「母校」「母体」「お母ちゃん」にグッとくる	グレートマザー情動 マザコン
わたし	わたしという「もの」	主体性	わたしの気持ち わたしという気持ち	自我情動
闇	「もの」を失っただけの虚偽（こけ）	主体性	わたしの裏側の気持ち わたしを壊す興奮	シャドー情動
セックス	セックスという「もの」、男女という「もの」	主体性	エロキャラ、エロ興奮 アイドル、推し、萌えいわゆる特殊性癖	アニマ情動 アニムス情動
ふざける	ユーモアという「もの」、ウイットという「もの」	主体性	独特キャラ 人と違うわたし 常識と違うわたし	トリックスター情動
役割を果たす	役割という「もの」	主体性	正義キャラ 無敵ふう、完璧ふう	ペルソナ情動

同一のテーマにかかわって、本人と自我は挙動が異なります。

本人はすべて心理的ではない「主体性」によって、それぞれテーマそれじたいの「もの」へと向かいます。いっぽう自我は、心理的な動力によって周辺的なキャラ挙動を起こします。このキャラ挙動は当然ながら情動的です。

このキャラ挙動によって「世の中」が形成されています。また心理的な動力は、それぞれ周辺的元型から湧く情動を源泉にしています。

この一覧表を実体的に表現すると次の図13のようになります。

### 【図13】世の中は「心理的」であり、「本人」は不在



先の図12のうち自我の営為をイラスト化して表示するとこのようになります。われわれの世の中はじつにこのようです。

「世の中」が心理的に存在しているということ、および、自我も「世の中」の元型のひとつにすぎないということがわかると思います。

われわれはこの世の中で自我が中央的にあると錯覚しているだけです。それがわれわれの「心理」の仕組みであり、その心理という仕組みが「世の中」を創り出しているのでもあります。

そしてこの見慣れた「世の中」には、差し当たり「本人」はないのです。われわれはこの自我を含めた「周辺的」な世の中だけを見慣れており、いまや「本人」ということはよくわからなくなっています。

## 【図14】自我インフレーション



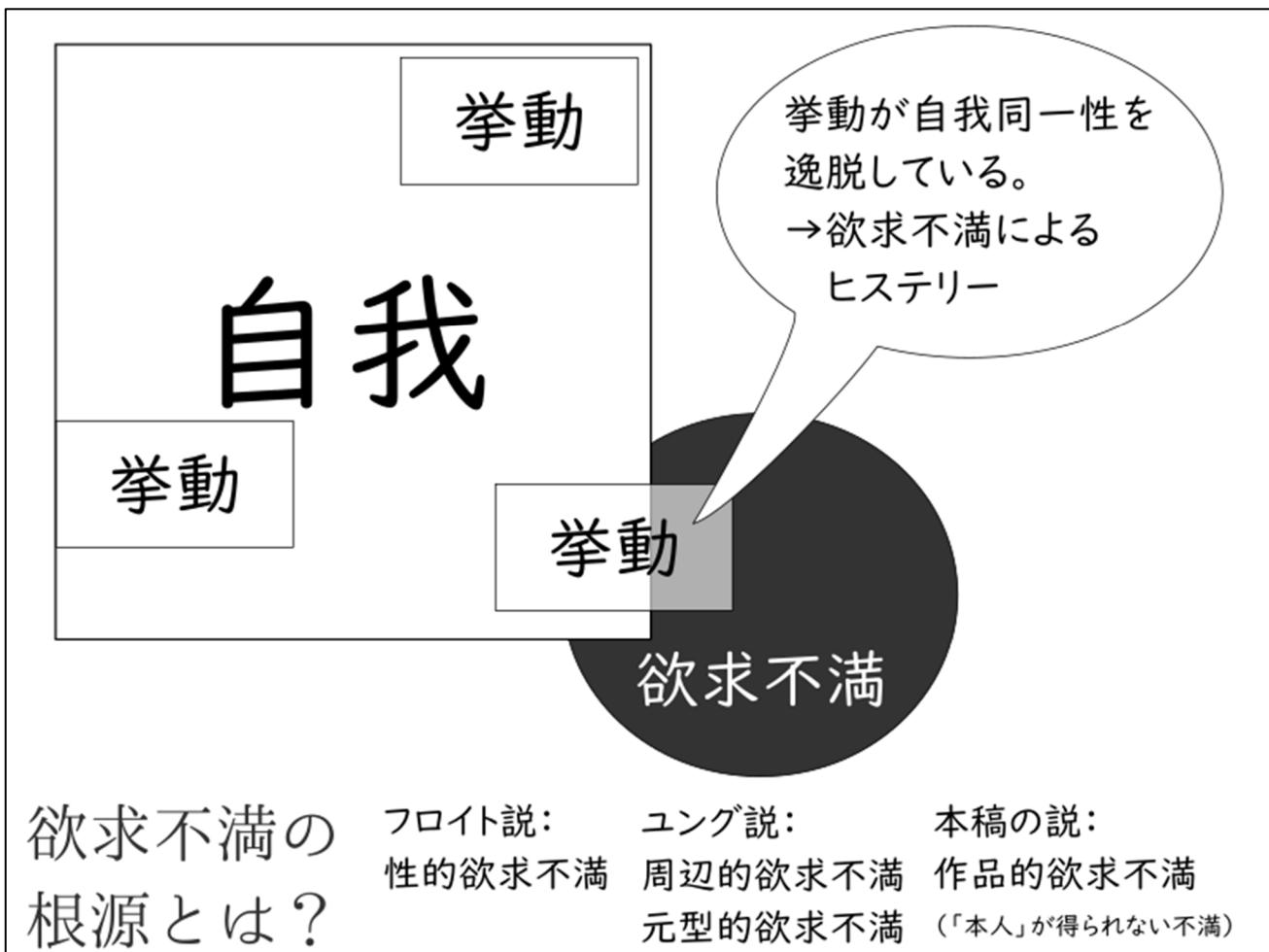
「自我インフレーション」は心理学で知られている用語です。

それぞれの元型は自我に影響を及ぼしています。それでも通常、それぞれの原型は独立して区分を確保しているものですが、ときにその区分を失い、自我が他の元型と融合してしまうという現象が起こります。すると、自我の中に際限のない「湧き水」がふたつあることになりますので、際限のない自我の膨張が起ります。これを自我インフレーションと呼びます。

たとえば「永遠の異性」たるアニマの元型と自我が融合してしまうと、女性が自分のことを「無敵で性的な価値が無限にある存在」と思うようになったり、また男性の側が、アイドルを見ているうちファン心理が暴走し、「彼女を守ってやれるのは僕だけなんだ」と思い込んでストーカー化したりします。

われわれは現在「本人」を見失っている状況にあります。世の中の「自我」がわれわれの本人ではないという感覚から、そうではない「本当の自分」を探り続けるうち、「自我」の正常な区分が決壊して自我インフレーションを起こすことがあります。たとえば自我が老賢者と融合してしまうと、自分だけ悟りを開いた叡智の存在のように思い込んだりします。もちろん他人からはまったくそのようには見えないし思えないで当人の妄想ですが、当人は自我が融合してしまっているので正常な判断ができません。いわゆる「自分探し」の心境で、「こんなの本当の自分じゃない」と自分を追い詰めていくうち、自我が決壊して他の元型と融合てしまい、自我が膨張します。このとき、やはり元型は「情動の源泉」なので、とても強い情動に支配されており、それによってますます冷静な判断はできなくなっています。

【図15】作品的欲求不満とヒステリー



現代の心理学ではヒステリーという言い方は避けられるようになりました。けれどもここではわかりやすくするためにヒステリーという語を改めて用います。

ヒステリーとは「欲求不満によって現れる、自我同一性が損なわれた拳動」のことです。現代では神経症という言い方のほうがわかりやすいかもしれません。どうしても人にマウントを取ってしまう人や、えんえん手を洗い続ける潔癖症の人、つい人にやつあたりして自尊心を回復することをやめられない人など、当人としても「なぜやめられないのか不明だ」と思えるほどの拳動に憑りつかれることができます。何かしらの強い情動によってその行為に駆り立てられ、当人はもう合理的に制御することができません。当人の行為が当人の本意を逸脱して、しかもやめることができなくなっていますので、これは自我同一性からの逸脱と言えます。これらのことは総じて「欲求不満によるヒステリー」と説明されるのでした。すべてのヒステリーは（抑圧された）欲求不満に原因帰属できる、というのがフロイトの説です。では欲求不満とは何でしょうか。フロイトの場合、その欲求不満の根源はすべて「性的欲求不満」にたどりつくとされています。いっぽう、その説にはいささか無理があるとして、そのほかにも心理の要素はあるはずだとして、ユングは周辺的無意識や元型論を唱えました。ですので、もしユングの説を欲求不満という言い方に当てはめるなら、ユングは「周辺的欲求不満」説を唱えていたと言えます（あるいは元型的欲求不満と呼んでもよいでしょう）。

そこからさらに本稿では、性的欲求不満でもなければ周辺的欲求不満でもない、「本人」にかかる欲求

不満が存在するということを唱えます。そして、その「本人」にかかる欲求不満が、他の欲求不満をしのいで最大のもの、さらに最も根源的なものだと唱えたく思います。

性的満足が得られないのでもない、元型的満足が得られないのでもない、「本人」そのものが得られないという欲求不満です。特に自分の作品・作品的なことにかかわって、そこに自分の「本人」が見当たらぬということが、情動さえ通じない悪夢のようにのしかかってきます。そのことを本稿では「作品的欲求不満」と呼びます。

自我同一性という言い方でいえば、当人の挙動が自我の意図するところとぴったり合っていたとすれば、心理学的にはヒステリーは発生しないはずです。けれども本稿において考えるところ、当人の挙動が自我にぴったり合っていても、そこには「本人」は見当たらないのですから、ますます欲求不満は募ります。そうして、心理的ではないヒステリー、いわば魂のヒステリーが起こるのです。心理的には何の欲求不満も見当たらないのに、それでもヒステリーが起こるのですから恐ろしいことです。作家・芥川龍之介は、「漠然とした不安」を理由にして自死したというエピソードが有名です。

本稿が唱える「作品的欲求不満」においては、「本人」が得られないということの苦しさから、代償的に性的欲求不満や周辺的欲求不満が生じているにすぎないと考えます。もし当人が自らの作品（作品性に及ぶもの）の中に「本人」を得ることができたら、性的欲求不満や周辺的欲求不満からのヒステリーは消失します。

一般的な体験によく知られているとおり、ヒステリーという現象は、当人のみならず周囲にむしろ強い精神的ストレスを及ぼします。ヒステリーが「伝染する」と言いたくなるような現象を、これまで多くの人は体験してきているはずです。

現代においてわれわれは、誰もが「本人」を失っていますから、非常に強い「作品的欲求不満」の環境下にあり、互いにヒステリーを起こしあっていると言えます。それで互いに強い精神的ストレスを及ぼし合うことになり、相互に親しく付き合っていられないという実態が現れています。いま多くの人が、会社の同僚と飲み会に行くより、独りでジムに行って運動をしてみたいと望みますし、新婚旅行でさえ当地ではそれぞれ別行動をするということが珍しくありません。「ずっと一緒にいると気が狂いそうになる」というわれわれの実態があるのです。

われわれは、自分が「本人」を失っているということになかなか向き合えません。早晚、自分で向き合いきるしかないことだとしても、それまではさまざまごまかしやヒステリーが際限なく続くというのが事実です。われわれはじっさいそんなに強くなく、そうしたちっぽけな存在なのでしょうから、そうと認め知り、お互にたくさんのことと耐え忍んで進んでいくより仕方ありません。

このことについてわれわれが向けるべき態度はきっと、ただちに何もかもに向き合いきって見せるぞと勇んで吠え立てることではなく、かといって汚らしく茶化して侮辱することでもなく、ただこのことを「やめない」と、しつこく齧りつき続けるということ、そのことを見せつけ続けるということなのだと思います。原理的に、欲求不満に向き合いきることができれば、そこに抑圧はありませんからヒステリーは発生しません。ヒステリーを解決するのは、欲求不満の「充足」ではなく、欲求不満の中に立ち続ける自我同一性の受容なのです。

## 【図16】「ネタ」にして混ぜ返す



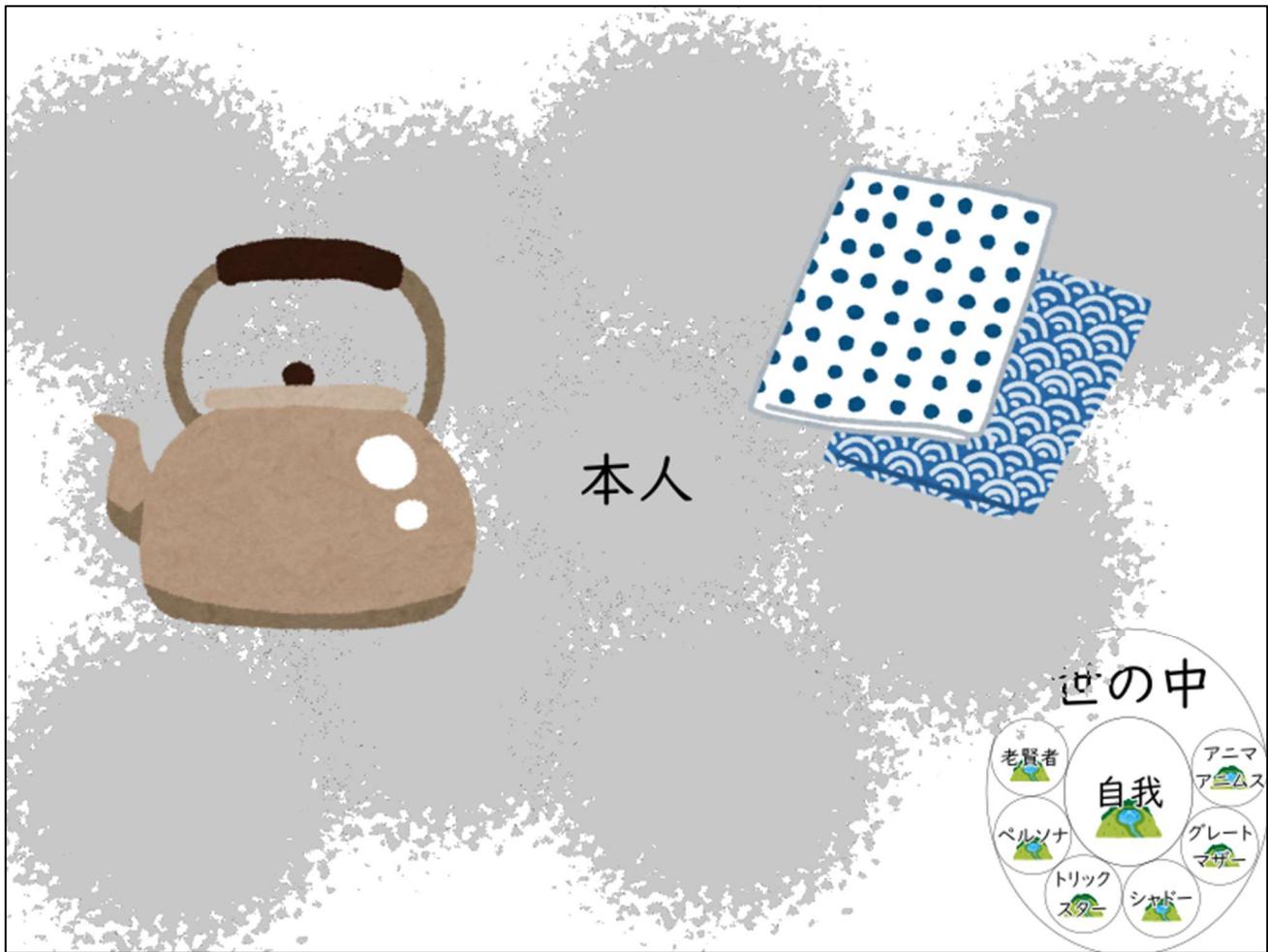
「本人」を問われることは厳しいことです。そして、「本人」を問われて「本人」が拳動できないのはとても苦しいことです。

この、自らの「本人」が得られないという、根源的かつ最大の欲求不満を本稿では作品的欲求不満と呼びます。この欲求不満は根源的であるぶん、その抑圧から生じるヒステリーもとても強いものになります。そこでわれわれは、この強度のヒステリーが発露しそうなずっと手前、その予感の段階で、この主題に対しては「茶化す」「ネタにして混ぜ返す」ことで応じることが多くなります。それは文化的な対応でもあり、直観的・本能的な対応もあります。たとえばあなたに突然、愛の詩文を書いてください、と依頼したとしましょう。それは詩文でしかも主題が愛ですから、一瞬、あなたは「本人」を問われた感触がします。けれども結果的には、あなたはこの依頼に対して、愛の詩文を「書いて“みた”笑」という調子で応えるのが最大のこととなりそうです。あなたはその書いた詩文を、自分にとっての「作品」の、ずっと手前のもの、一種の「ネタ」だよという位置づけで捉えることになると思います。

これはヒステリーの激発を避けるための安全装置のようなものが心理機構としてはたらいているということです。これを無理に取り外そうとすることは、心理的負担を過大にして危険なため、われわれは基本的にこの装置のはたらきを穏健なものとして認めなくてはなりません。

ただし、あまりにもどこまでも、その「茶化す」「ネタにして混ぜ返す」ということばかりが繰り返されると、そのことは一般的に「回避性人格」と呼ばれるものに近づいていってしまいます。

## 【図17】情動ではない「もの」



「世の中」は情動で創られています。「本人」は世の中にはありませんので、「本人」は情動ではありません。

情動ではないのだとしたら、本人は何なのでしょうか。本人は「もの」です。

「もの」とは何でしょうか。わかりやすく、「やかん」と「手ぬぐい」を配置してみました。われわれは「やかん」「手ぬぐい」に情動を持つことができません。

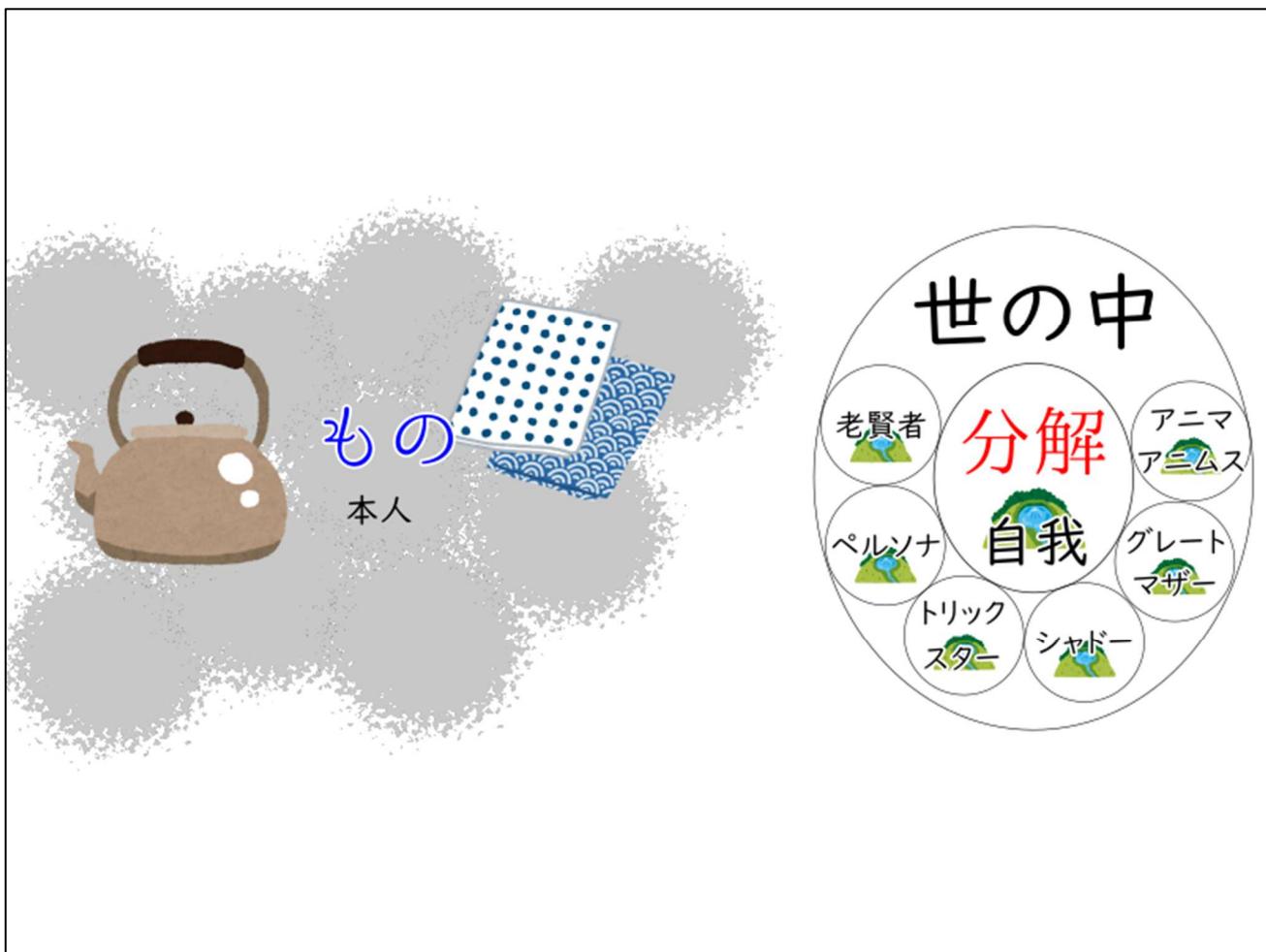
驚いたことに、われわれの「本人」という事象は、この「やかん」「手ぬぐい」と同じところにあります。

それらは「もの」であって、情動の事象ではありません。

もし「老賢者のやかん」とか「永遠の異性の手ぬぐい」とか言えば、それには情動を持つことができます。といって、情動の源泉はやはり「やかん」「手ぬぐい」ではありません。老賢者と永遠の異性のほうです。われわれはふつう、「自分・わたし」ということに情動を持つことができます。ですから、そこでわれわれが「自分・わたし」と思っているのは、世の中にある、周辺的元型のひとつである「自我」なのです。

「本人」は「もの」であって、情動の事象ではありません。けれどもこのことは、われわれの一般的な感覚に大きく反しているので、われわれはこのことをあまりにもよく捉えられないのです。

## 【図18】本人は「もの」、自我は「分解」



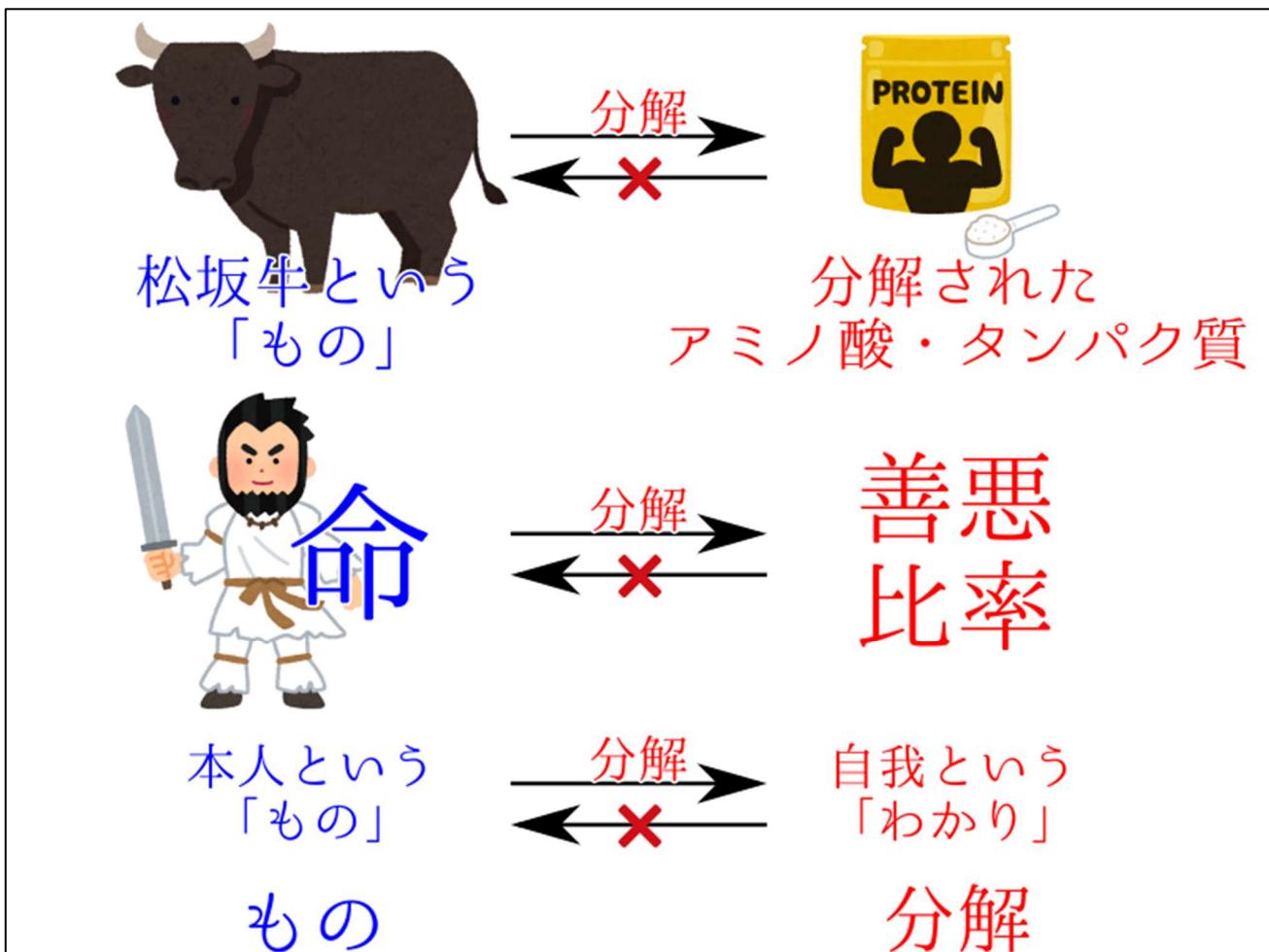
われわれは「世の中」のことを、「わかるわあ」と情動をこめて言います。誰かの自我の気持ちに向けては「わかるわあ」と言いたくなりますし、老賢者の智慧と諦観にも「わかるわあ」と言いたくなります。母なるものへ帰るというのが「わかるわあ」という人もいるでしょうし、永遠の異性への憧憬も「わかるわあ」という人があり、自分の闇の人格なんてものにも「わかるわあ」という人があるでしょう。

「わかる」という語は、「分かる」もしくは「解る」と書きます。よって、「世の中」における自我元型の機能は「分解」です。われわれの「自我」とは、識別・分解・tell A from B という機能じたいのことを指しています。われわれの自我は分解した要素で比較・比率を取るという機能を持っています。

いっぽう「やかん」や「手ぬぐい」に対しては、「わかるわあ」とは言いません。やかんが電気ポットとは違うという「分類」については“分かり”ますが、やかんそのものは「わかる」という対象ではありません。「やかん」「手ぬぐい」は「もの」であって forms です。情動の対象ではないので自我の対象にはなりません、よって「分かる・解る」の対象にもなりません。「やかんと手ぬぐいの比較・比率」も存在しません。

「自我」の機能は「分解・わかる」、「本人」の機能は「もの」・forms です。それで、万事がわれわれにとって相克する二重の対象たりうるということです。たとえば「青春」というひとつの語でも、青春という概念が自我によって「わかるわあ」と情動分解の対象にされることもありますし、もうひとつには、青春ということば・forms が本人によって「もの」にされる対象にされることもありうるということです。

## 【図19】分解によって「もの」は不可逆に失命する



特等の松坂牛を酵素で分解したら、その肉はアミノ酸やタンパク質になるでしょう。どうせ食べてしまえば胃腸で分解されて消化されるのです。だからあなたは、「自分が食べるのは、分解されたアミノ酸やタンパク質でいいよ」ということになるかというと、きっとそうはならないと思います。あなたはせっかくなので、松坂牛という「もの」をそのまま食べたいと望むに違いありません。

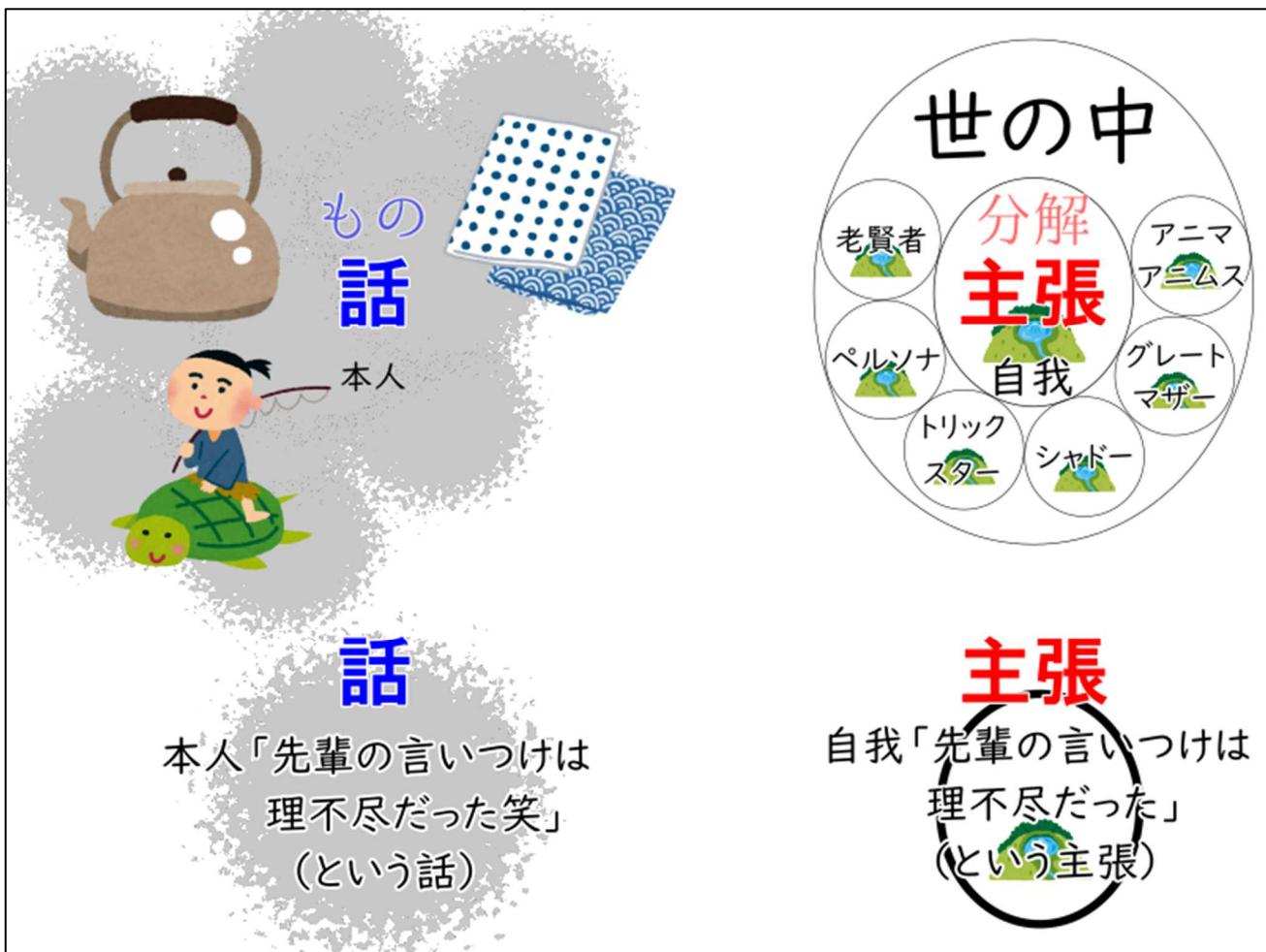
分解されたアミノ酸やタンパク質を、どのように組み立てたとしても、それはふたたび松坂牛という「もの」には戻らないでしょう。酵素で分解すればその内容成分は変わっていないのに奇妙なことです。それは「分解」というプロセスで、もとの「もの」にあった「命」が失われているからです。たとえばあなたが恋人からもらった金の指輪を、炉に入れて融解して、まったく同じ形に成型したとして、あなたはそこに何も失わていないとは認めがたいでしょう。分解の過程でもとあった「もの」の命は失われているのです。だからもう一度同じように組み立てても、もとの命あった「もの」には戻りません。

われわれの自我の「分解する」という能力は、同時に「失命させる」という能力もあります。われわれは、分かる代わりにその「もの」の命を失わせるのです。

ここにAさんがいたとして、あなたの自我はAさんを「善人」と理解したとします。それによって、あなたはAさん「本人」と出会うことを失い、ただ情動をこめてAさんの自我を理解する人になります。

自我にはなぜこのような機能があるのでしょうか。聖書の伝説では「善惡の知識の実を食べたから」と伝承されています。エデンに樹はふたつあり、人は「命の樹」の果実は食べていないという伝承です。

【図20】本人は「話」、自我は「主張」



「世の中」では、人の主張を理解しなくてはなりません。主張の品質と理解の品質によってわれわれの民主主義は成り立っています。まともな主張とまともな理解を失うことは、ただの「自我と世の中」の品質低下であり、そのことはまったくわれわれの「本人」への到達を意味しません。

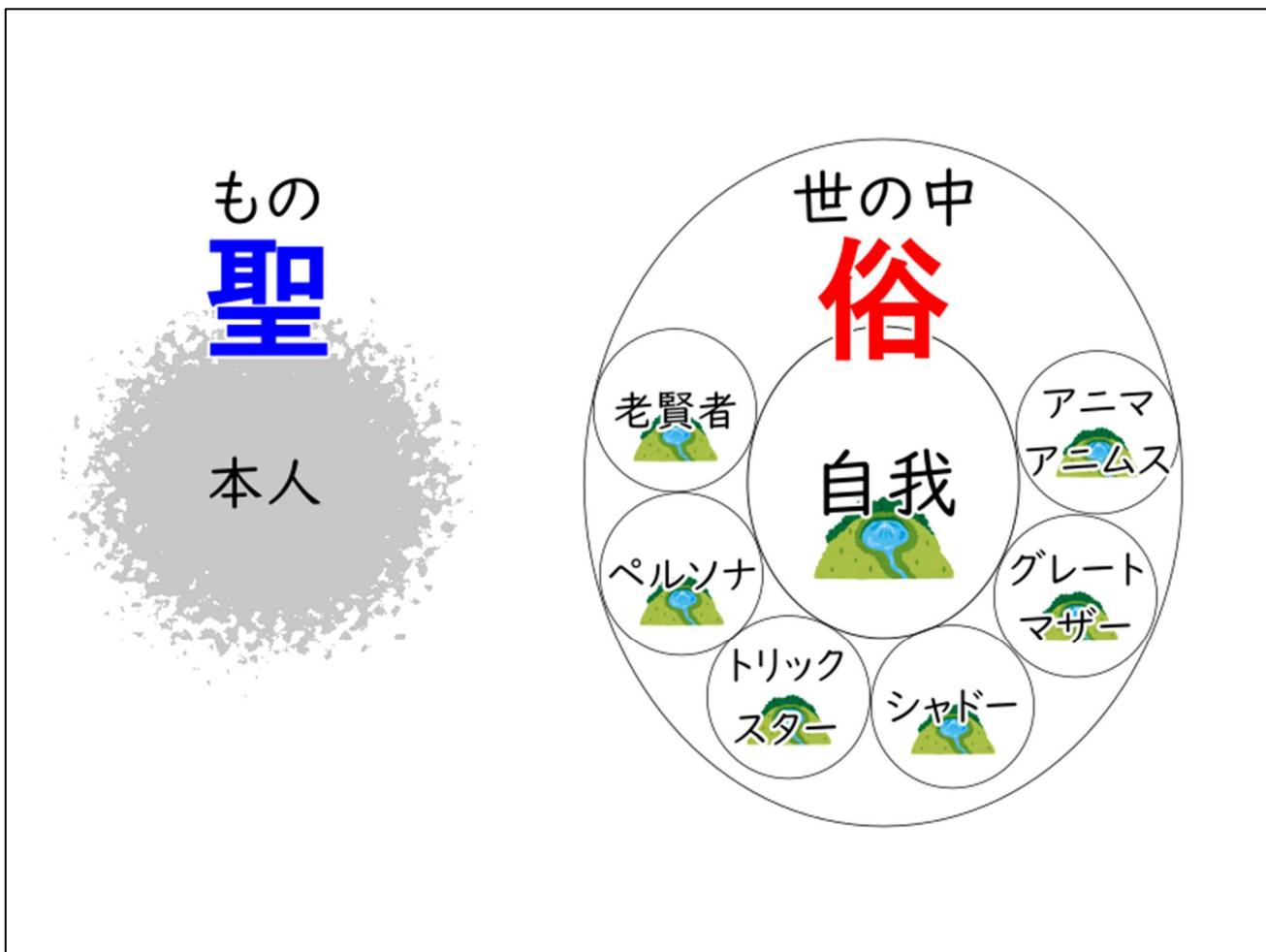
いっぽうで「話」はどうでしょうか。「話」は理解の対象ではありません。「話」は「もの」であって受け取りの対象です。浦島太郎という「本人」が、亀を助けて竜宮城へ行った。その話を受け取るだけのものであって、ここに浦島太郎にあてこすった動物愛護の主張があるわけではありません。

ここ数年、われわれの世の中では「論破」のようなものが流行しています。これはわれわれが「本人」を失い、同時に一切の「話」を喪失したことの反映です。自我は情動ですから、主張のやりあいも論破のやりあいも際限のない情動の湧き出しと衝突になるということが、すでにわれわれの体験や目撃から知られているでしょう。そしてわれわれは、その中でけっきょく誰の「本人」にも出会いませんし、何の「話」も受け取りません。

仮にここでわたしが、「かつて、先輩の言いつけは理不尽なものだった笑」と話したとしましょう。それはただの「本人の話」なのですが、「本人」へのアクセスを失ったわれわれは、その「話」を受け取ることができず、「話」に対して何かしらの「情動と主張」で応えることしかできなくなっています。

「本人」を失った苦しさとむなしさがヒステリーとして噴出し、情動をまき散らしてぶつかりあってい、そのことがわれわれの日常の風景になってしましました。

## 【図21】聖俗、「触れられないもの」



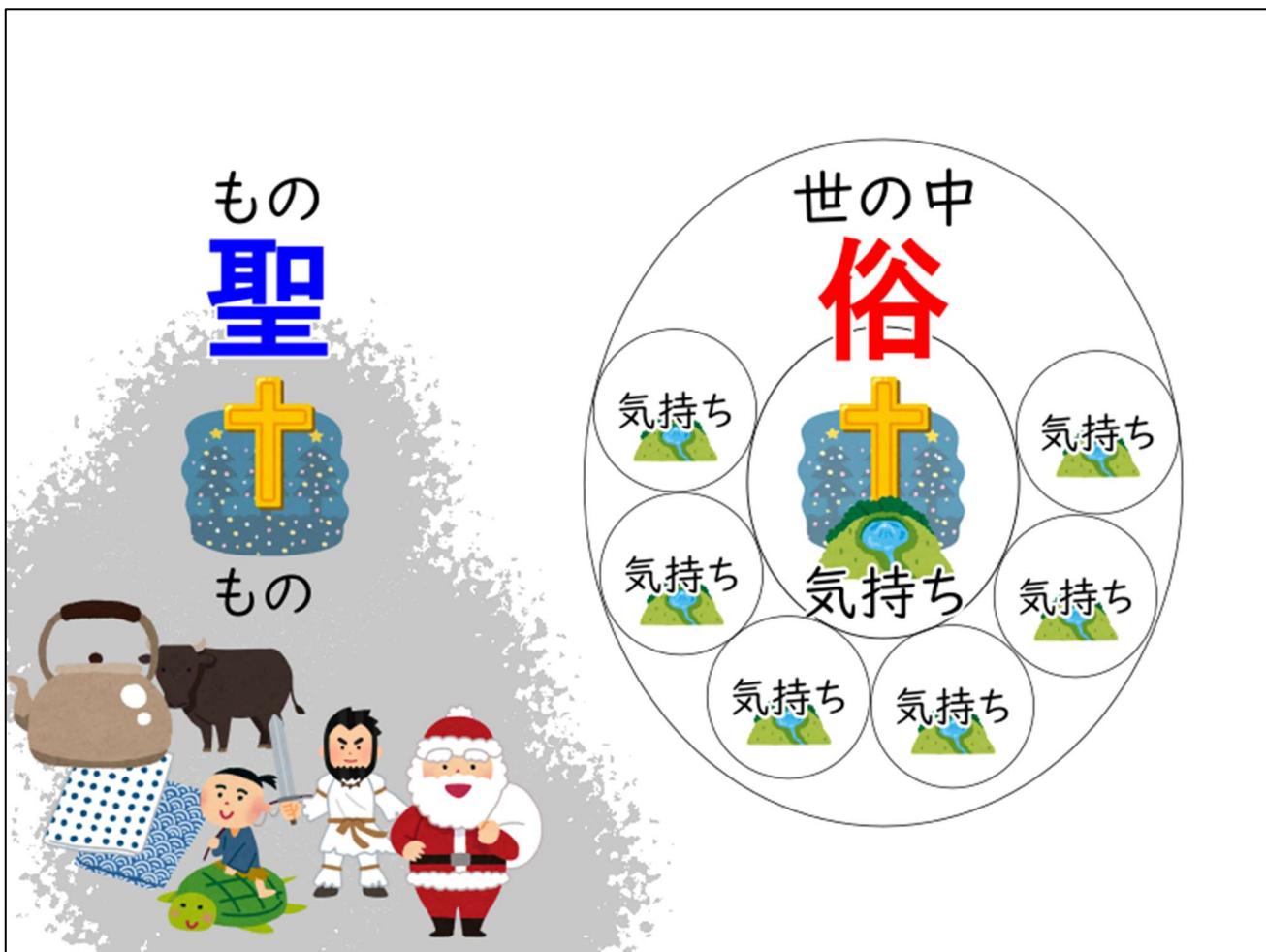
地上のわれわれが天空のものに触れるることはできないでしょう。天空のものに触れたつもりでも、それは地上から触れられたのですから、天空のものではなく地上のものだったのです。

この「触れられないもの」の関係性を「聖俗」と表現します。俗は聖に触れられませんし、俗が触れることができるのであれば、それはやはり聖のつもりの俗でしかなかったのです。

俗とは何でしょうか、それはわれわれの「世の中」に決まっています。いかにも「世の中」ということを表現するのにわれわれは「俗だなあ」と言います。もし「世の中」が聖なるものであればわれわれは天国に住んでいることになるでしょうが、今のところ残念ながらそうではありません。

「世の中」が俗であるなら、その外側にある「もの」が聖です。「世の中」からそれに触れる事はできません。よって、自我は一切聖なる「もの」に触れる事はできませんが、「本人」はそれに出会うことができます。「本人」もそれじたい聖なる「もの」だからです。

## 【図22】「聖なる気持ち」は存在しない



元型はすべて「情動の源泉」です。情動ということは「気持ち」ということです。

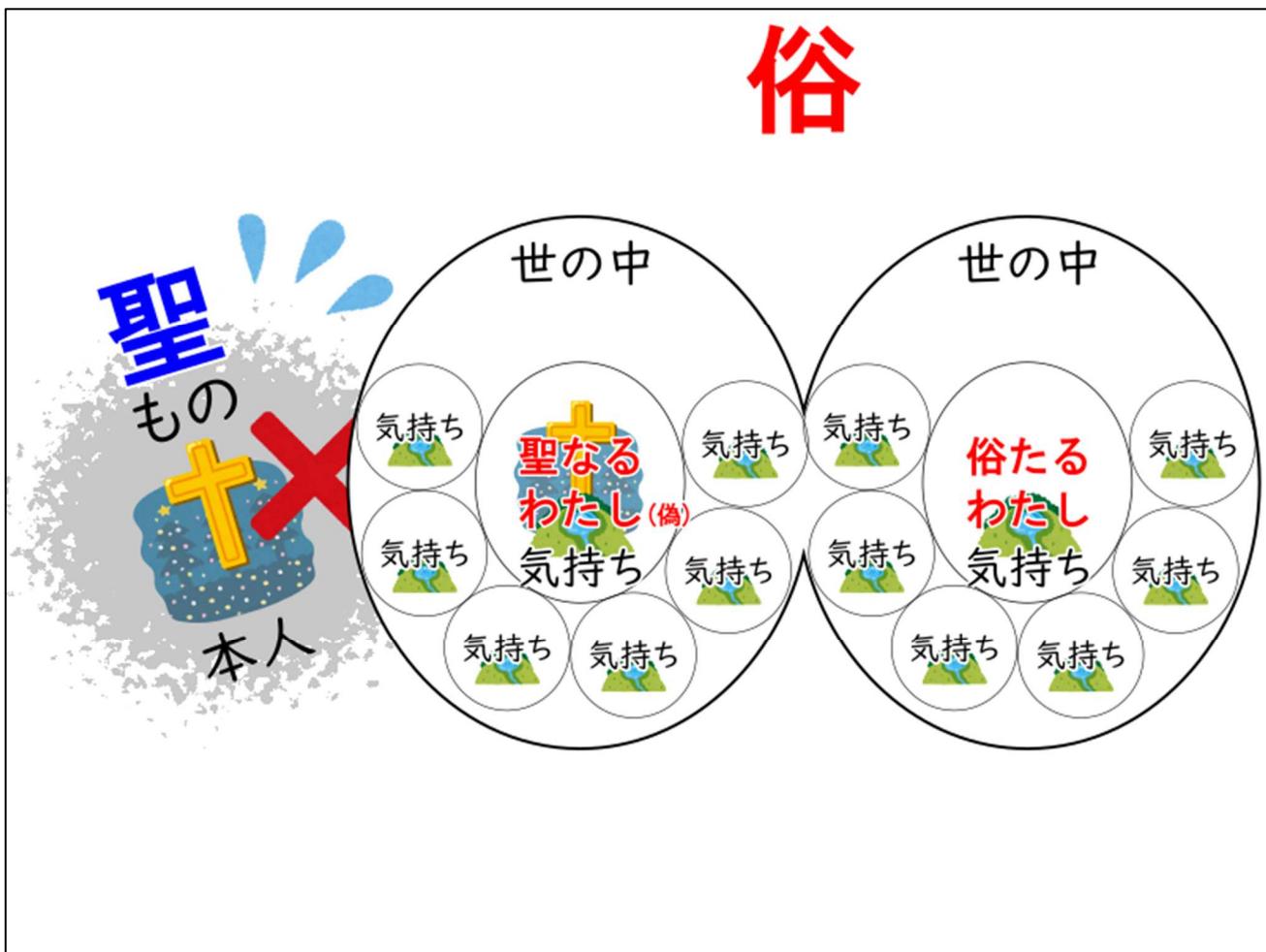
たとえばクリスマスという「もの」があったとします。「もの」は「やかん」「手ぬぐい」と同じですから、それじたいは情動の対象になりません。「分かる・解る」という対象にもなりません。

いっぽうで「世の中」は「情動」ですから、世の中でクリスマスは「気持ち」の対象になります。クリスマスに向けられた気持ち。そこにはいかにもといいうイメージが付随しますから、それは一見すると「聖なる気持ち」のように思えてきます。けれどもそれは単純に誤解です、「気持ち」は「世の中」の事象であって聖なる「もの」の事象ではありません。

気持ちは「世の中」で、「世の中」は俗なのですから、「聖なる気持ち」というものは存在していません。浦島太郎に聖なる気持ちを向けたがる「わたし」という人は少ないでしょうが、クリスマスに聖なる気持ちを向けたがる「わたし」という人は多いでしょう。ですが、浦島太郎という「もの」が存在しないというのに、サンタクロースという「もの」のほうは存在すると言いたがるのはいかにも辠縫が合いません。われわれは、「自我」の気持ちしだい・「世の中」の気持ちしだいで、それを「聖なる気持ち」なのだと言い張るという恣意的なことをしているのです。

われわれは現在、この誤解した「聖なる気持ち」というもので、ありとあらゆる「もの」、聖なる「もの」、本人という「もの」を、破壊し尽くし、失い尽くしているところです。「聖なる夜」という俗の気持ちが触手を伸ばして触れた先、そこに掴んだのはやはり俗の夜でしかないのでした。

【図23】われわれがしている「聖への誤解」



われわれは「世の中」を生きながら、「俗たるわたし」を周囲には見せつけ、その裏でじつは「とっておき」の「聖なるわたし」を隠し持っています。

たとえば、「俗たるわたし」にとってクリスマスというようなものは、年中行事にすぎず、いちいち思い入れをもって浸るようなことはしません。それでいてこっそり、裏では「とっておき」の「聖なるわたし」が、ひとりクリスマスに秘密の「聖なる気持ち」を向けています。ウフッと、自分では特別と思っている聖なる気持ちと、その聖なる表情をひとりクリスマスに向けています。

聞いているだけで気持ち悪いですね。この気持ち悪さによって、聖なる「もの」のすべてはわれわれの世界からログアウトしていました。その「聖なる気持ち」が、飾られた美少女からのものなら、われわれは騙されやすくもありますが……それにしてもやはり事象の本質は変わりません。

仮に聖なる「もの」の頂点として、世界そのものたるカミサマが存在したとして、正しく知られているとおり、カミサマは俗たるわれわれをあわれんで救済・祝福することに存在しています。聖なるわれわれをヨイショして救済・祝福することに存在してはいません。

もしわれわれが「聖なる気持ち」によって自ら俗から離脱できるというのであれば、カミサマはいちいちわれわれを救済・祝福する必要がないでしょう。「ご自分で出来るなら、ご自分でどうぞ」と言わせてします。そうしてわれわれが自ら拒絶した形で、われわれは救済・祝福を失うのです。

【図24】正しい聖俗の構造



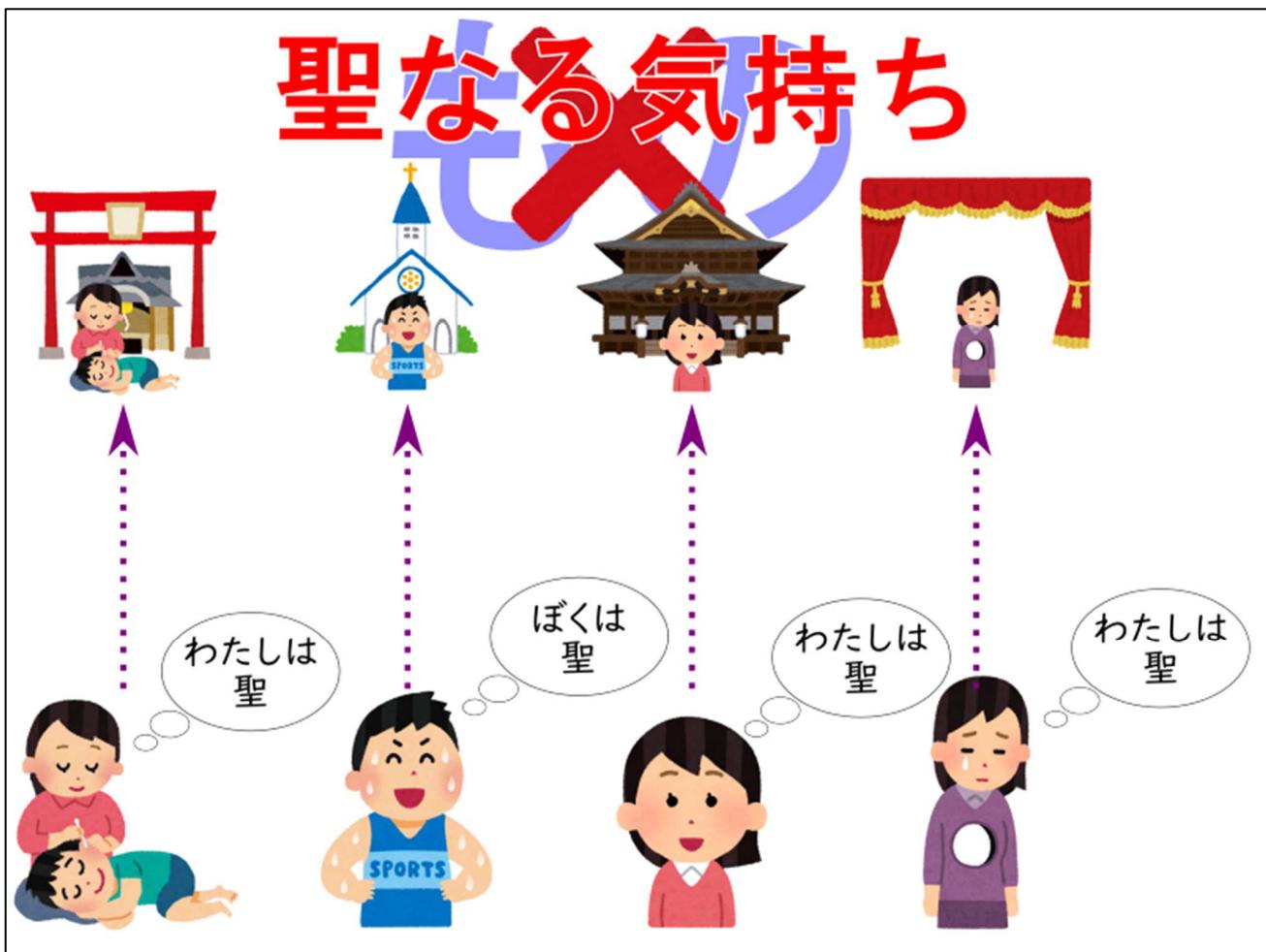
正しくは、俗は「ワイワイ」しているものです。そのワイワイしたものを、聖なる「もの」が見守っています。

「世の中」のわれわれが聖なる「もの」ではないのです。

こうして聖俗が正しい構造に保たれる場合 (=われわれの自我は聖なる「もの」に触れられないと悟る場合)、この聖俗には「命」が発生します。そのときはじめて、われわれの聖にも意味があり、われわれの俗にも意味があることになります。

(※必ずしも宗教施設・芸術施設が聖なる「もの」とは限りません。むしろその逆の場合が多いですが、ここではわかりやすさのためにシンボルとして使用しています)

【図25】誤った聖俗の構造



聖俗の誤った構造においては、それぞれが「聖なるわたし」という気持ちを隠し持っています。気持ちは「世の中」ですから「もの」ではありません。この単純な誤解によってわれわれは聖なる「もの」を失ってゆきます。

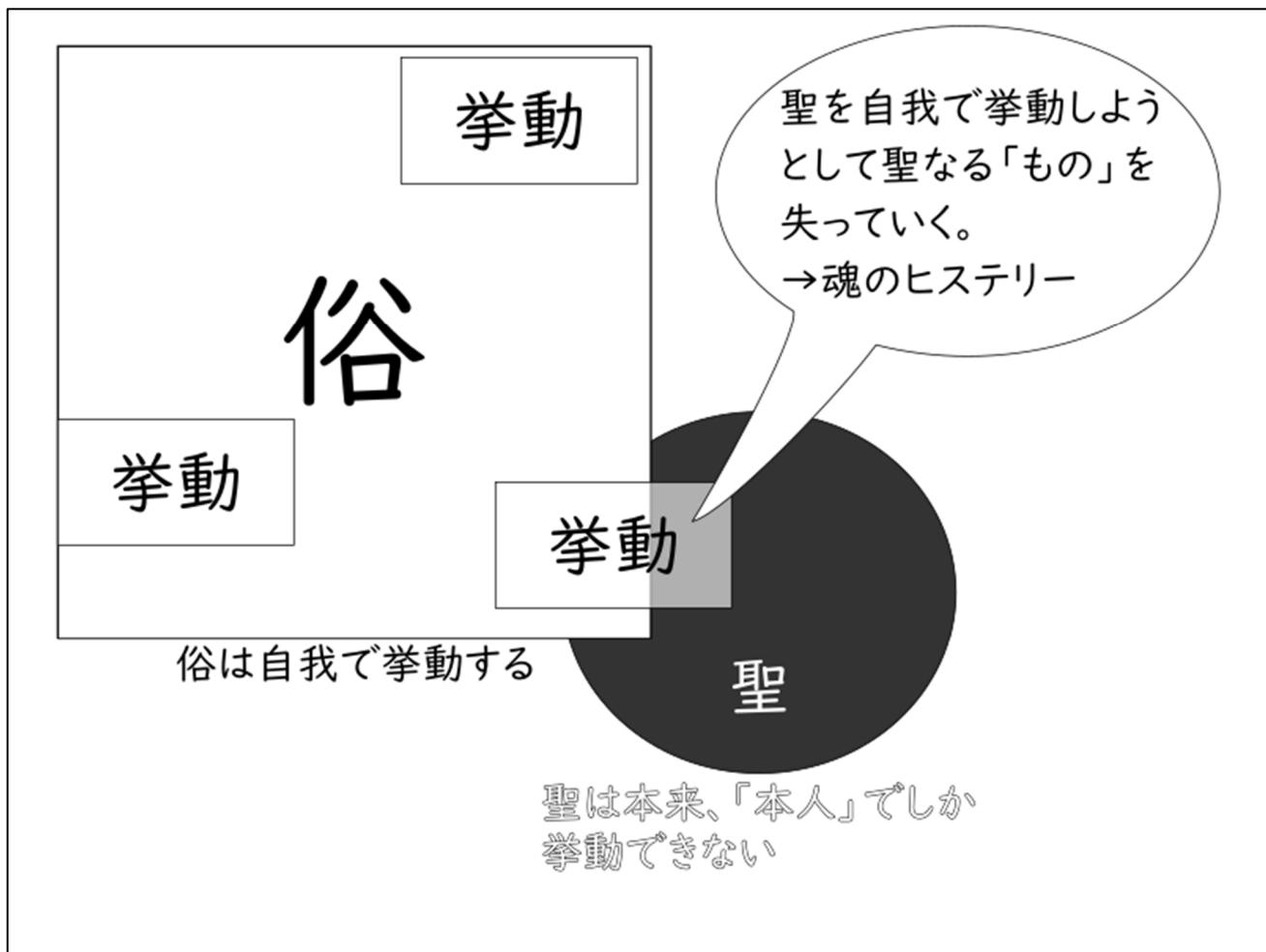
この誤った構造の中で、当人は自分「本人」がその聖なる「もの」にまみえたように思っています。このことを当人は「本当のわたし」「癒し」「元気をもらった」「浄化」「パワー（スポット）」「マインドフルネス」などと錯覚します。

しかしへいには当人の「気持ち」が聖なる「もの」を分解してしまったにすぎません。

「聖なるわたし」は、このように「気持ち」の現象であり、世の中・俗の現象にすぎませんが、当人の心理としては強い情動を伴い、ときに自我インフレーションも伴いますので、その最中は合理的な判断や節度が機能しにくくなります。（「聖なるわたし」という情動がついに“大爆発”することもあります）

「本人」という現象を失ったわれわれは、聖なる「もの」を探し回るあまり、いつしか自我を「聖なるわたし」と思い込まざるをえない、という状況にあるのでした。

【図26】聖俗による魂のヒステリー

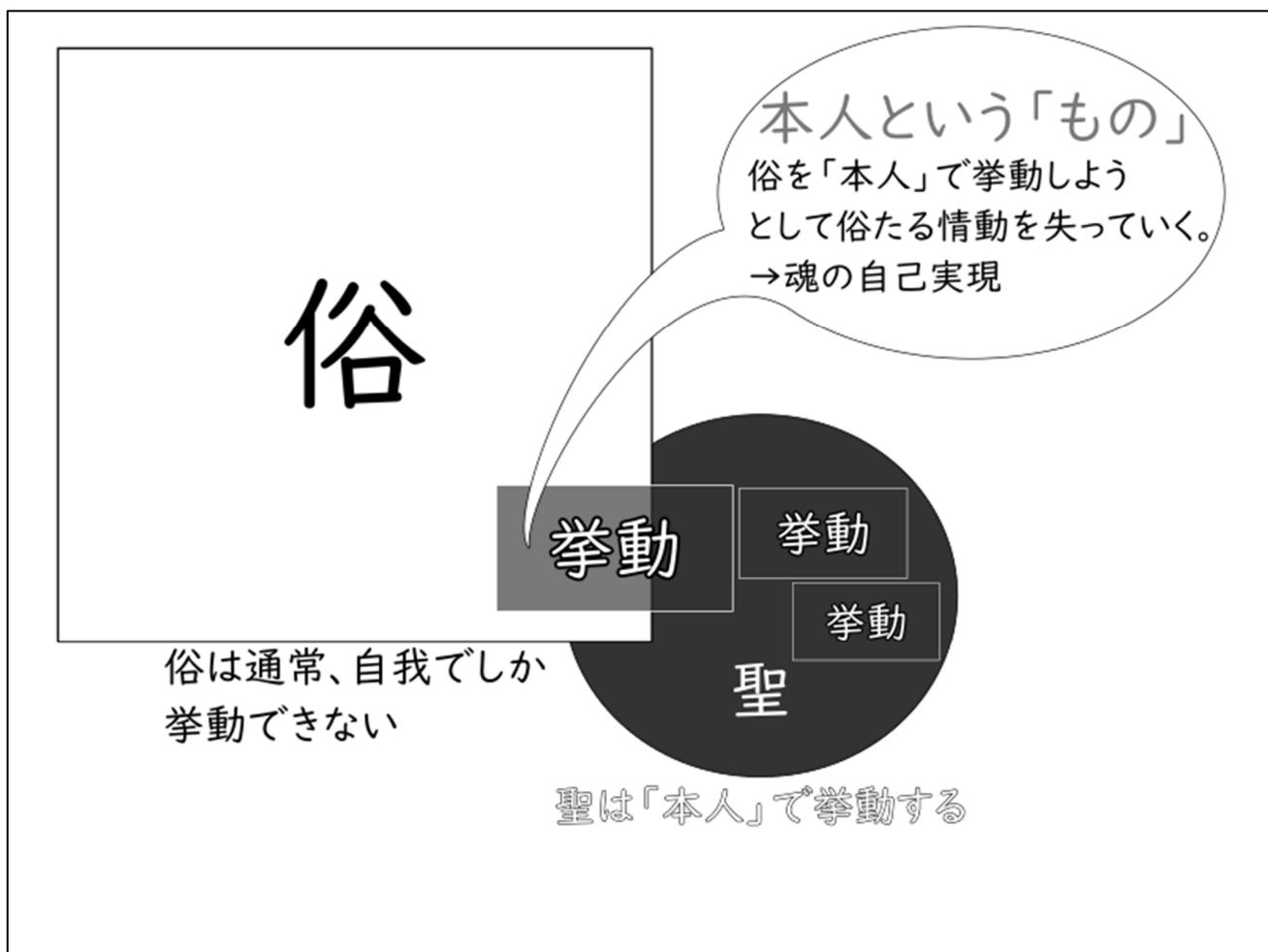


ヒステリーの原理は欲求不満です。欲求不満によって自我が同一性を損なって挙動することをヒステリーと呼びます。またその挙動が周囲に強い精神的ストレスを与えるということは、誰しも経験から直接知っていることだと思います。

図に基づいて「自我同一性の損傷」を言い換えるなら、われわれがこの図に目撃しているのは「俗我同一性の損傷」と言えるのではないでしょうか。「俗我」の同一性を失い、「聖なるわたし」がによっさり現出してしまっている。

「聖なるわたし」はつまり「わたしは俗じゃない！」と言い張っているということですから、俗我同一性の損傷が「聖なるわたし」症だということは理に適っているはずです。

## 【図27】聖俗による魂の自己実現



先ほどの図とは逆です。先ほどの図では、俗たる自我挙動が聖なる「もの」を侵略していました。

こちらの図では、聖なる本人挙動が俗たる自我を侵略しています。

先ほどの図では、自我挙動（聖なる気持ち・聖なるわたし）によって聖なる「もの」を失っていましたが、こちらの図では、本人挙動によって俗たる「自我」を失っていきます。

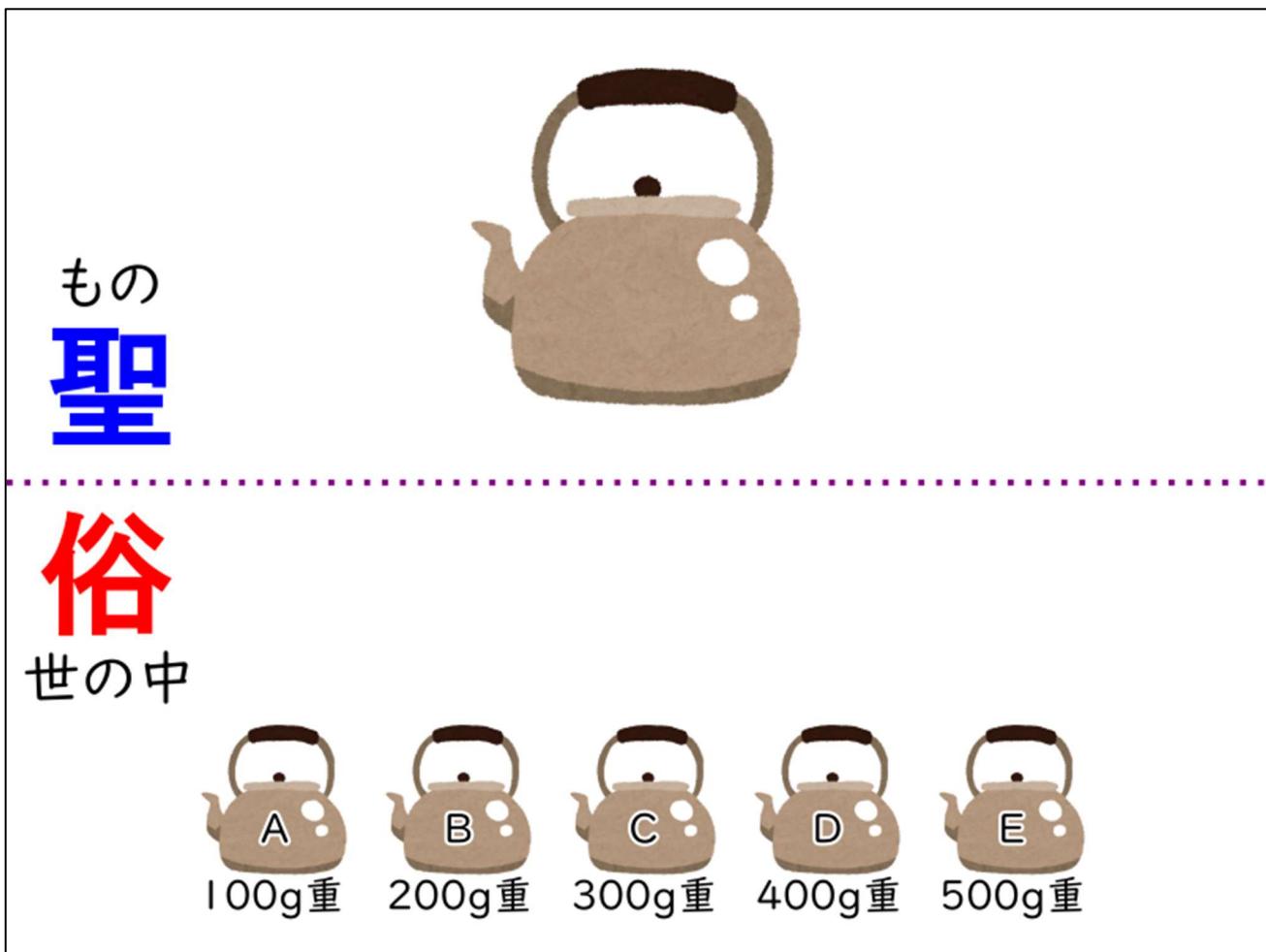
われわれの自我は「世の中」に生じているもので、「世の中」は元型を源泉とした情動から成り立っています。ところがここに侵略してくる本人挙動は、どのように点検しても情動が見当たらず、自我でもなければ世の中でもない挙動です。これは本人という「もの」の挙動であり、本人ですから「こころ」はあるのですが、世の中たる「情動」は見当たらないのです。

あなたが初めてこの「本人」の挙動を目の前に見たとき、あなたは「どういう原理で動いているのかわからない」という戸惑いを覚えるでしょう。それでいて、「わたしはあの人と会った」「わたしはあの人から何かを受け取った」という確信は覚えるのです。あなたの魂はそれを聖なる体験として覚えています。

あなたはそのとき、その人の聖なる「本人」に出会い、それを受け取ったことになりますが、それは同時に、あなたが「聖なる気持ち」「聖なるわたし」に逸脱していくかねない課題の始まりでもあります。

あなたは魂の希求として、「あの人のように自分も『本人』でありたい」と望むのですが、あなたが「本人」に到達する道筋は容易なものではなく、幾度となく逆方向のヒステリーに晒されなくてはならないでした。

## 【図28】やかんという「もの」に重さはない



「もの」に重さはありません。やかんという「もの」に重さはありません。

世の中では「やかん」にそれぞれ重さがありますが、それは相互に比較して比率を計るからこそ重さが存在しているのです。

「もの」としての「やかん」に重さをあてはめることはできません。何グラムとも言えますし、何グラムとも言えないでの、重さというパラメーターじたいが存在していないのです。

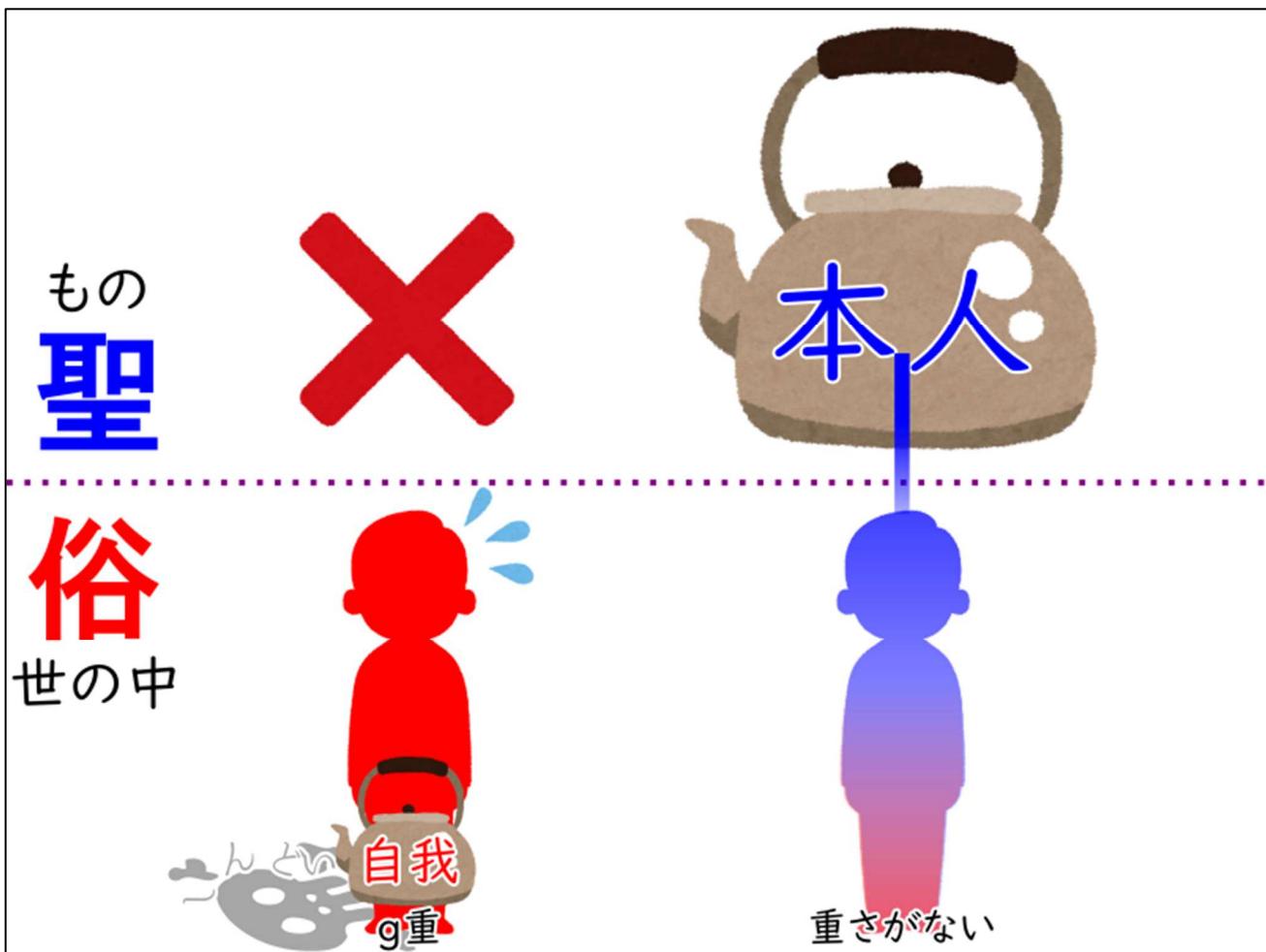
「もの」には重さが存在していませんので、「本人」にも重さは存在していません。

「もの」には重さが存在しないということは他にいくらでも例があります。たとえばあなたは呼吸という「もの」をしているべきですが、呼吸に重さはありません。演劇で知られる「ロミオとジュリエット」という「もの」じたいに重さはありませんし、ベートーヴェンの月光という「もの」にも重さはありません。ですからあなたの本人という「もの」にも重さはないのは当たり前のことです。

やかんという「もの」に重さはないということは、われわれの日常的な感覚からはとても意外なことに思えます。われわれの日常的な感覚が「世の中」「自我」であることのわかりやすい証左だと言えます。

わたしはここであなたに「話」をしているのですが、その「話」にも重さはありません。もしここに重さがあるなら、わたしは自我をもってあなたに「主張」を向けていることになります。これが「話」として受け取られているという場合、それは重さがないからこそ話という「もの」になっているのです。

【図29】「本人」は肉体である



誰でも「身体が重い」と感じたことがあると思います。心身の調子がよくないときは誰でもそうなります。いちおう理屈としては奇妙なことです、「身体が重い」といっても、きのうからそんなに体重が増えたわけではないのですから。

「もの」には重さがありません。「本人」も「もの」ですから、「本人」にも重さはありません。それで、「本人」から動く人は、その肉体と挙動に重さがないという特徴が現れます。

「身体が重い」という現象は、ときに深刻化します。精神を失調し、いわゆる心身症にまで至ると、本当に「身体が重い」ということから、まともに活動できなくなり、学校にも会社にも本当にに行けなくなることがあります。

「身体が重い」という現象は、深刻化すると、その最中に破滅的・強迫的・恐慌的に感じられることもあります。そのことはわれわれを自暴自棄にさせ、恐怖と不安に陥れ、ときには自死さえ考えさせます。それぐらい、「身体が重い」は深刻化したときには苦しいのです。まさに巨大な十字架を背負わされているかのように「身体が重い」。もはや何をどうすることもできず、絶望感と閉塞感に押しつぶされ、ひたすら自分の身体の重さに苦しみ続けなくてはならない、そういう実感に囚われて苦します。

少々のことなら、われわれは「気合」でなんとかできるように思います。「元気」と「やる気」と「気分転換」で、身体の重さを吹っ飛ばせるような気がします。けれどもそれが際限なく、何年も変わらず続くようでは、気力も体力もやがて限界を迎えます。一時的には気合で突破することが必要な局面が無数にあ

るでしょうが、それにしてもやはり「身体が重い」という問題は解決したわけではないのです。ここであわてて考えないでください。いま多くの人は、この「身体が重い」という強迫と恐怖に向けて、あわてて「体を動かす」ということで対処しようとしています。それで気が晴れるぶんにはけっこうですが、やはり根本の解決には進んでいません。

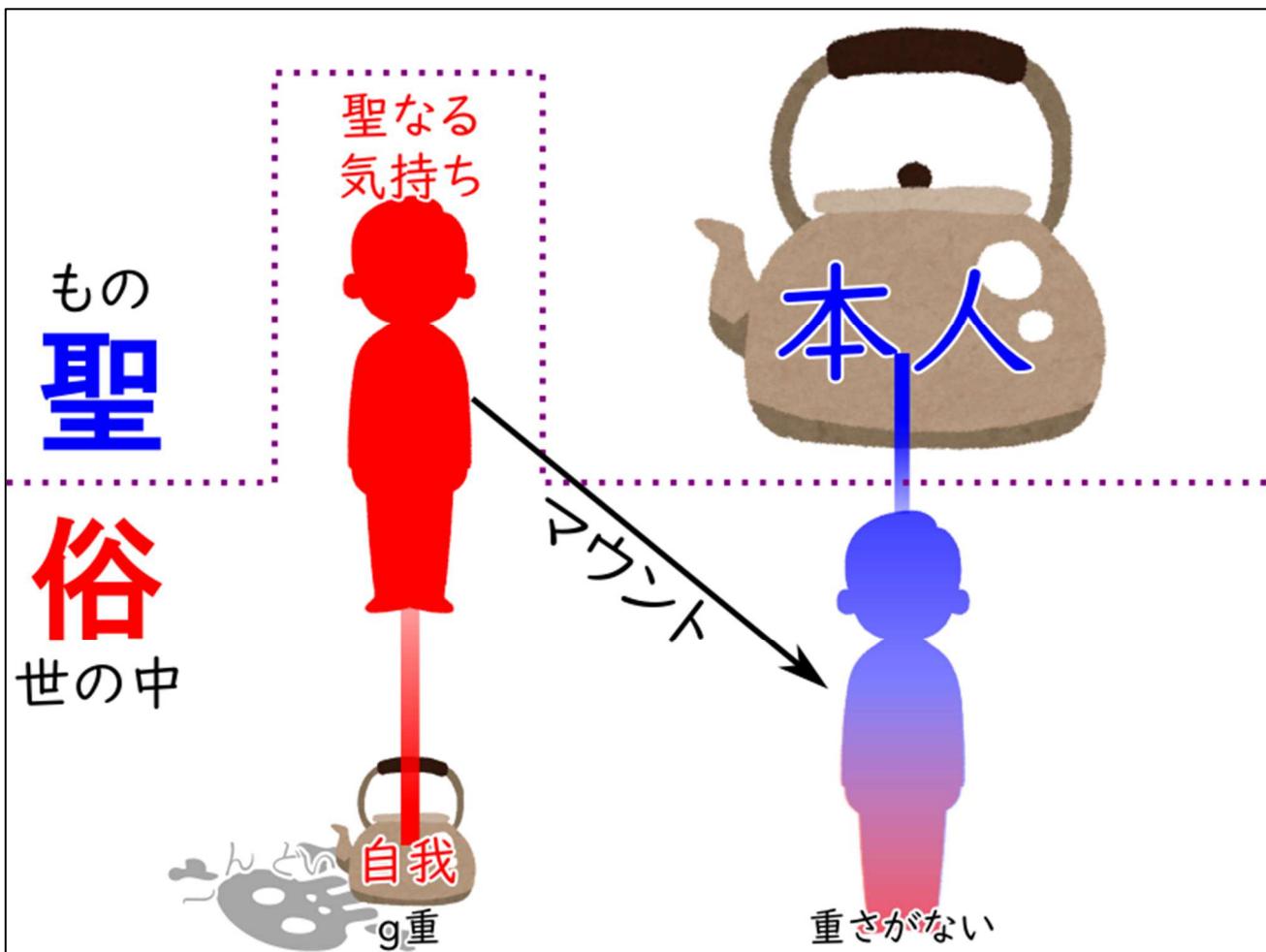
われわれの「本人」は、驚いたことに肉体なのです。「本人」が肉体に現われます。すると「本人」には重さがないのですから、「身体が重い」という問題は消失していきます。けれどもそれは「具体」とは性質が異なるのです。「具体的」にどうこうしても、「肉体的」にはどうこうなりません。

具体的に運動すれば「身体が重い」は一時的に軽減されるのですが、それはしばしば「肉体が本人である」ということに向き合わず逃避しているスタイルにもなります。「身体が重い」ということに筋力や心肺のパワーで対抗しようとするのは質量に力を対抗させるニュートン力学の発想であって、われわれの魂と肉体に向けてふさわしい発想ではありません。

すべてのことを「本人」がやれたらどれだけすばらしいことでしょう。本人は「もの」であって重さがないのですから、根本的な解決になります。解決できる上に、他でもない自分の「本人」を示し、自らそれに出会うことができます。

ただ、理屈はそうあっても、われわれはなおも周辺的な世の中、周辺的な自我、そこから湧いて出てくる「情動」を、「自分だ」と思っています。このこと思い込みをほぐすのは誰にとっても容易ではありません。

【図30】聖なる気持ちで「しんどい」から逃れようとする

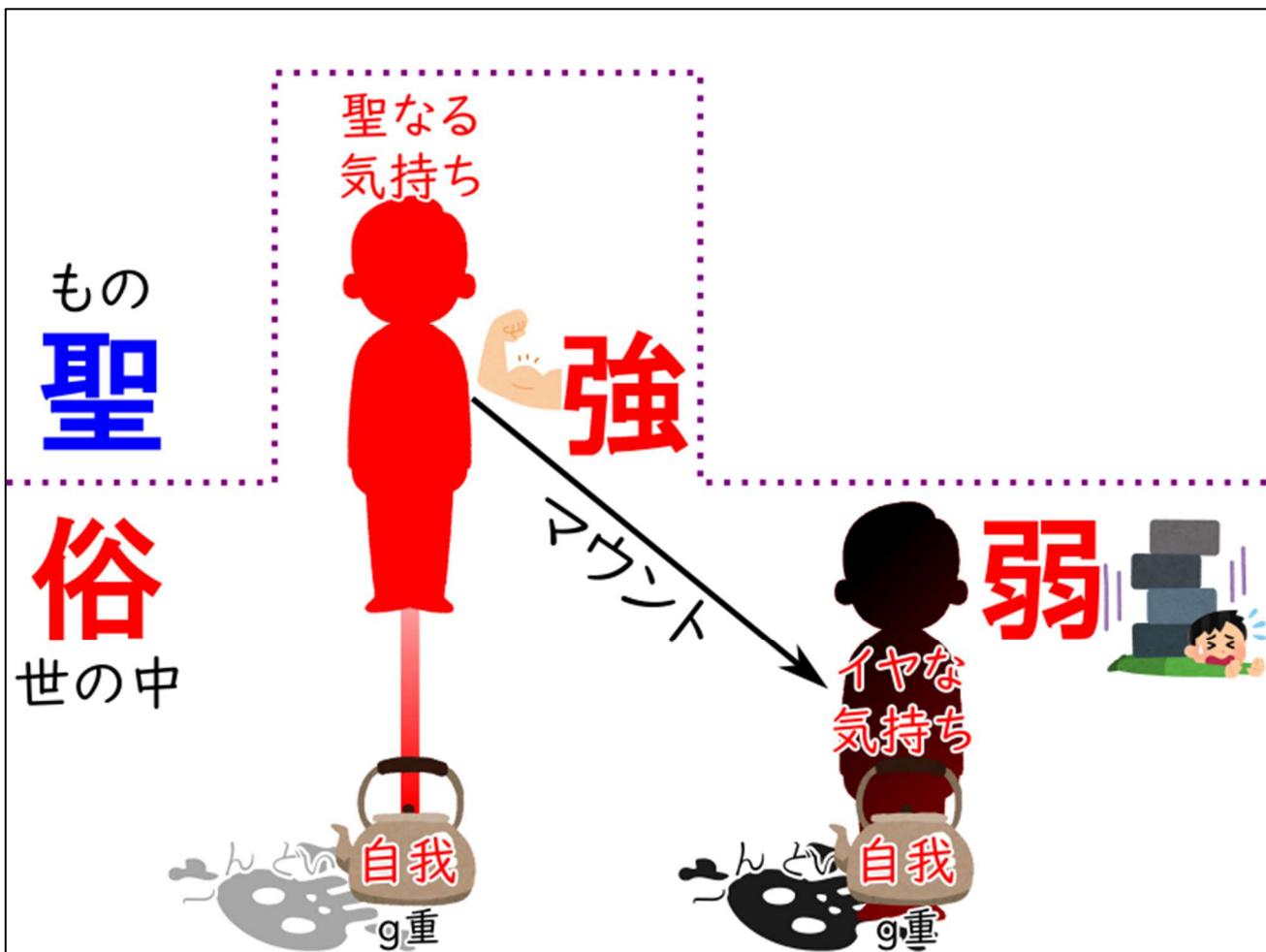


聖なる「もの」がない中では、われわれの身に深刻な「しんどい」が起こります。その威力はあまりに大きく、われわれはいつからかその威力に恐怖し、おびえ、恐慌するようになります。わかりやすさのために四回そのことを重ねて書いて表現しましょう、それは「しんどいしんどいしんどいしんどい」のです。もしわれわれの肉体が、そうして「しんどい」とか「身体が重い」とか、苦しい目に遭わないのであれば、われわれは聖だの俗だの、「もの」だの世の中だのを考える必要がないのです。けれどもこのことはシビアで容赦がありません。聖なる「もの」がなければ早晚われわれはこの「しんどい」に食い殺されます。どのようにニヒルぶってもこのことから逃げることはできません。

聖なる「もの」がなければ、本当に致命的に「しんどい」。しんどいしんどいしんどいしんどい。その威力と恐怖に打ちのめされてもうなにをどうすることもできなくなってしまいます。それでわれわれは、「せめてもの」というべきでしょうか、聖なる「もの」の代わりに「聖なる気持ち」を持とうとします。聖なる気持ちを持つことで、一時的に無理やりではありますが、身体の重さ・情動の重さ・「しんどい」から逃れられたような気になれます。われわれは単に自己陶酔への嗜好から「聖なる気持ち」を抱えがちなのではありません、せめてそれを持たないと自分が「しんどい」に食い殺されてしまう、それでやむを得ずには「聖なる気持ち」を自家で養殖しているようなところがあるのです。

「聖なる気持ち」に向けて自分が上昇していきます。一時的に身体の重さ・「しんどい」を離れることがでけて一息つけます。けれどもそのぶん、他の人に対しての心理的マウントをやめられなくなります。

【図31】力関係の信仰



もはや聖俗とは無関係なことも起こってきます。現実的にはこの形がいちばん多いかもしれません。

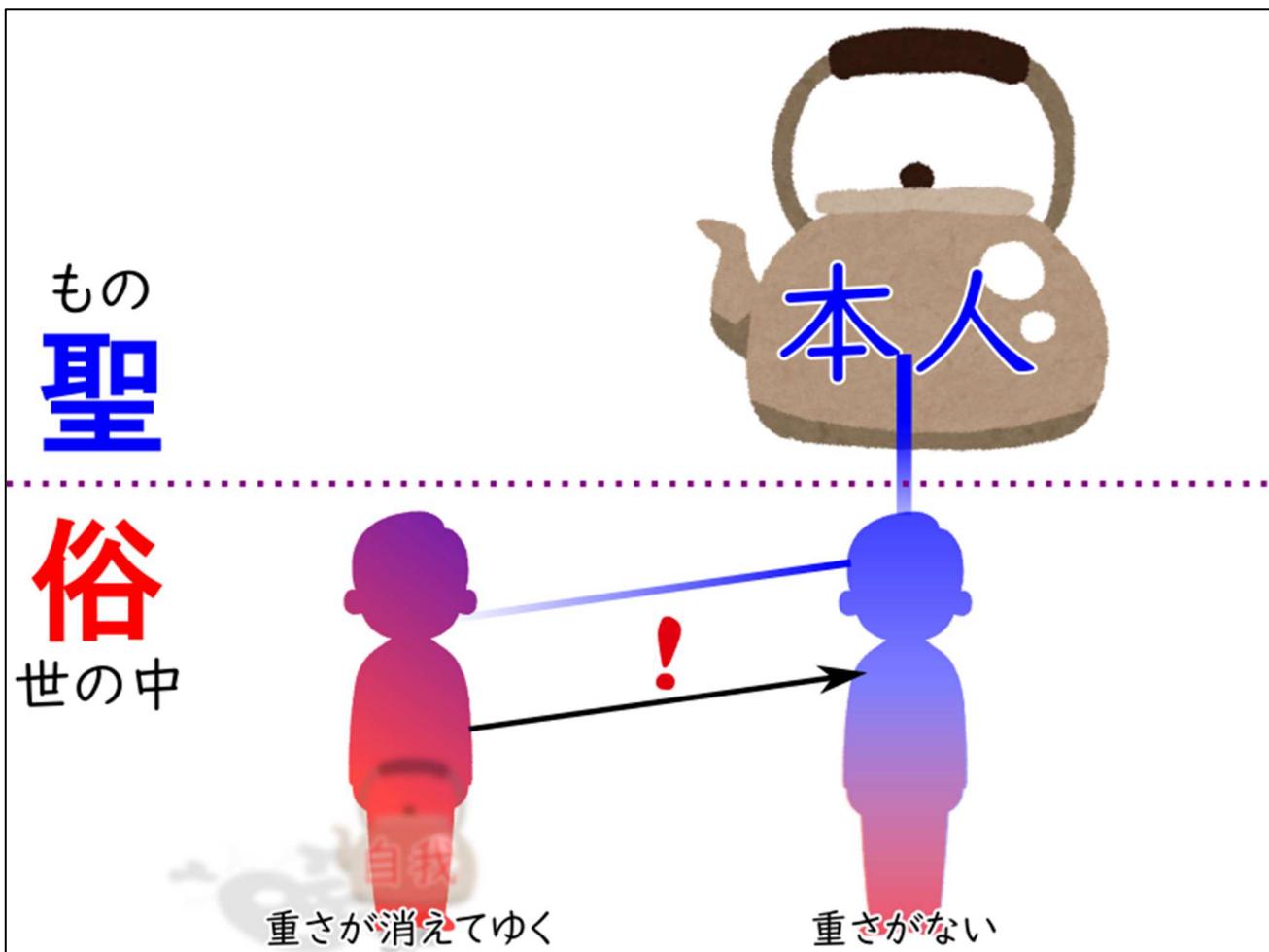
恐怖の「しんどい」から逃れるために、「聖なる気持ち」へ上昇しました。その結果マウントが自然発生するのですが、こんどはそのマウントが主題になってきます。

じっさいのマウントの上下は何によって決定するでしょうか。それは単純に力関係です。立場が上であつたり、能力が上であつたり、経済力、魅力、腕力、その他なにかの権力などの力関係によって、単純にマウントの上下関係は決定します。

この図の場合、もはや聖もへったくれもないですから、どっちが「しんどい」かというと、力が弱いほうが「しんどい」です。力が強いほうがマウント上位を取ることができ、マウント上位なら「聖なる気持ち」に上昇できるという、ただそれだけの、本末転倒の仕組みが成り立ってしまいます。

聖なる気持ちで上昇し、マウント上位を取ったときに味を占め、また力関係で敗れてマウント下位に貶められたときに苦渋を味わい、みじめな気持ちに落下する……それを繰り返しているうちに、この人は体験から、「けっきょく力関係がすべてだよね?」ということに気づき、そのことの信仰を深めていきます。力関係に対して信仰が入り込むので、この人にとっての力関係というのは常に「聖戦」のような切実さを帯びることになります。この人にとって、自分の立場や能力が上のときは天国にいるような気分の良さで、自分の立場や能力が下のときは地獄にいるような気分の悪さになります。

## 【図32】誰かの「本人」に肉体が救われるケース



必ずしもすべての人が、第一に自分の「本人」に接続を得るとは限りません。むしろほとんどの場合、人は誰かの「本人」に出会うことで、この聖なる「もの」の現象を体験するものです。

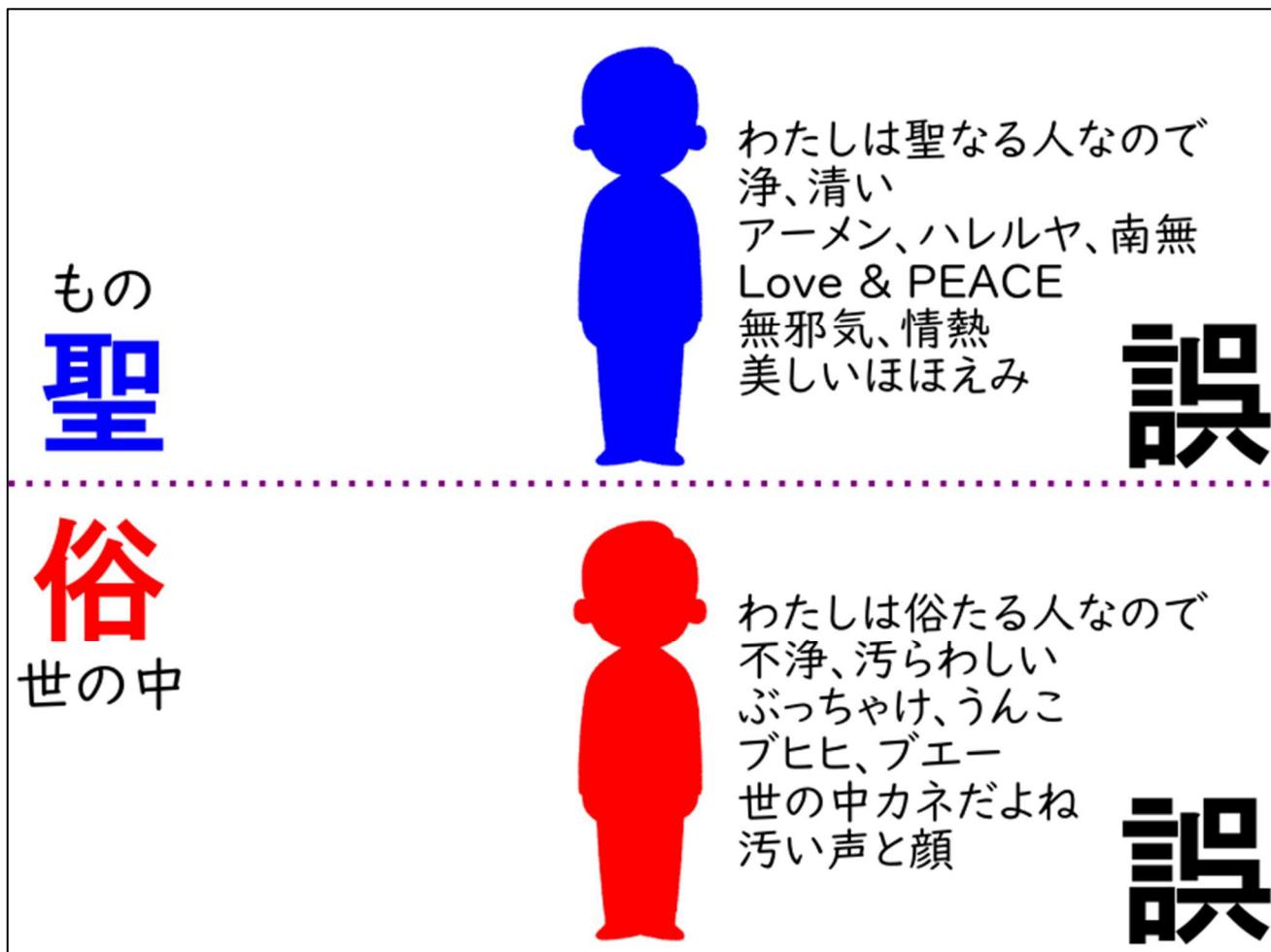
先ほどの図30で向けていた「マウント」の反対のものが向けられたとき、左の人は右の人の「本人」に出会い、その本人という「もの」のはたらきを分与されることがあります。このとき左の人は、聖なる「もの」の作用によって肉体の「しんどい」が消えていくことを体験します。

ときにこの体験は急激・極端に得られることもあり（右の人の「本人度」にもよります）、その場合、これまでの「しんどいしんどいしんどいしんどい」がいきなり消え去って、自分はいくらでも晴れ晴れと、輝かしく、疲れることなどなく、肉体労働を供することができるのだという驚きとよろこびに包まれるということがあります。

ただしその驚くべきよろこびも、左の人がふたたび「聖なる気持ち」を起こしたときに失われてゆきます。「もの」と「気持ち（世の中）」の区別がついていないので、左の人はふたたび図30の状態に戻ってしまうのが定番です。

誰かの「本人」に出会って、そのたび肉体の「しんどい」が消えていくということを体験し、それがふたたび自分の「気持ち」によって「しんどい」に戻っていくということを、何度も繰り返していくうちに、左の人は「本人」という聖なる「もの」の存在を知っていくようになります。ただししばしば、左の人が右の人にマウント攻撃を仕掛けすぎ、右の人の「本人」とはもう会えなくなるというケースもあります。

### 【図33】淨・不淨についての誤解



特に女性に多いようですが、聖俗の現象を、皮膚感覚で「淨・不淨」と感じる人があるようです。「清い・汚らわしい」と感じるのも同じですし、「きれい・腐っている」と感じる人もあるようです。

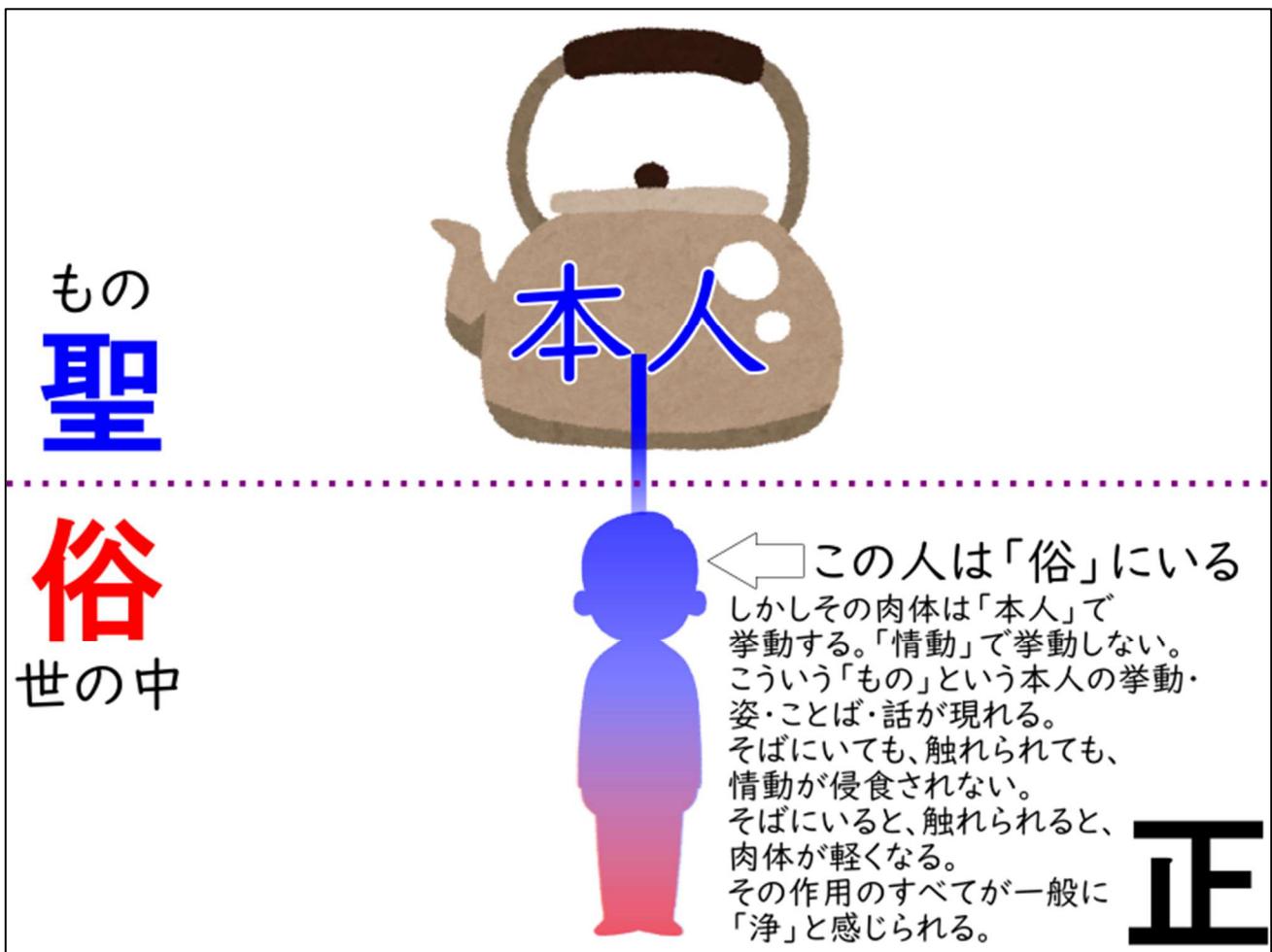
そうした皮膚感覚はそれじたいは正しいのですが、正しい感覚から正しい知識が得られるとも限りません。知っておくべきは、われわれが「淨」「清い」と感じる人は、何も「聖そのものの人」というわけではないということです。

完全に「聖」そのものの人がいれば、その人は清らかに決まっています。けれども、完全に「聖」そのものというのではなく人ではありません。神仏そのもの、あるいはそれと同格の存在であって、われわれに当てはめるのは現実的なことではありません。

女性は特に、皮膚感覚で「不淨」「汚らわしい」「きもい」と感じるものが苦手なことが多いようです。生理的に無理、という言い方をよくします。ただしそのことは、何も当人が「聖なる人」ということを意味しているわけではないのです。

また、わざと「俗たる自分」を汚らしく強調して、眞の汚らわしさから逃れようとする試みも無為なことです。聖が「淨」の正体ではないように、俗もまた「不淨」の正体でもないからです。どれだけ聖句を唱えても淨・不淨はごまかせないように、どれだけ汚い言葉を吐いても淨・不淨はごまかせません。

### 【図34】正しい淨



正しい「淨」の図を示しました。

注目すべき第一は、この人が「俗」にいるということです。「本人」という聖なる「もの」との接続を得ているのですが、当人は「俗」にいるのです。「聖」にいるのではありません、「聖」にいるのは神仏だけです。

この人は俗にいながら、その肉体が「本人」で挙動します。情動で挙動しません。

情動で挙動しないので、周囲の人、触れる人に対して情動への干渉がありません。ただその肉体が「本人」という「もの」を現します。

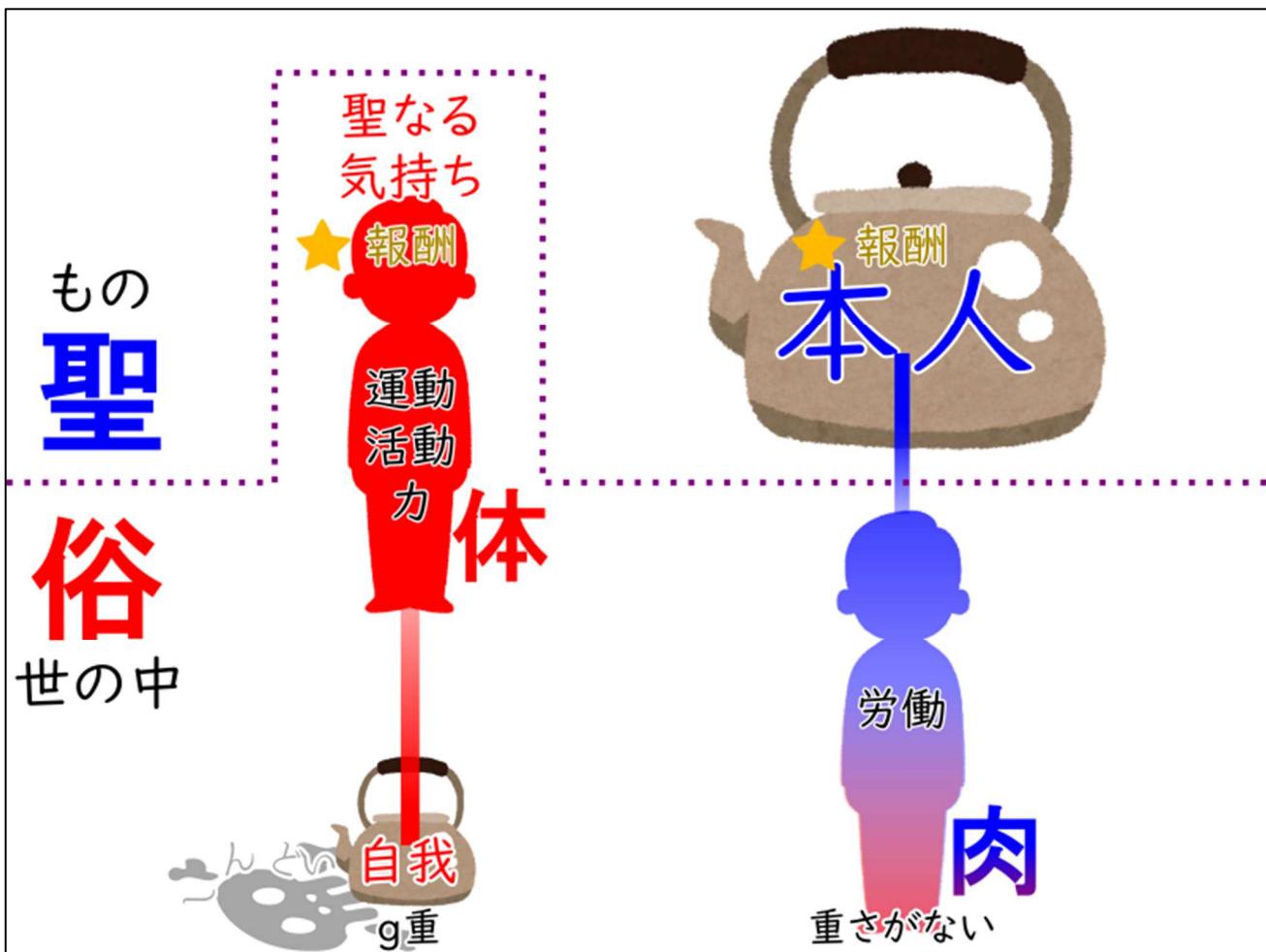
また、「もの」には重さがありませんから、この人の肉体がそばにあり、またこの人の肉体に触れられることがあると、周囲の肉体から重さ・しんどさが消えてゆきます。

こうした現象・体験の総体を、皮膚感覚的に「淨」「清らか」「きれい」と表現する人が（特に女性に）多いようです。

（逆に不淨な人があると、周囲の人の肉体はズンと重く・しんどくなり、不穏な情動が湧きおこってくるという作用があります）

淨の人は俗にいながら、その肉体は聖・本人で挙動しますので、その成果は俗のものが聖へ奉じられるようにはたらきます。この「俗が聖に奉納される」という現象に、人の魂は「命がある」という直接の体験をします。

【図35】肉体労働と具体的運動



便宜上「肉体労働」と表記しますが、ここでの本質は「肉」の労働です。

われわれは「体」を動かすことができます。筋力で具体を運動させることができ、それによって何かしらの活動をすることも可能です。こうした運動や活動を、自分の趣味・娯楽にしている人もあるでしょう。けれどもよく知られているように、たとえば一定のテンポと筋力でただドラム・パーカッションを叩いても、そこに「肉声」のような表現は起こりません。また、われわれが手書きした文字のすべてを「肉筆」と呼ぶのは直観的に無理があるでしょう。体を運動させても、肉がはたらくというわけではないのです。われわれの靈的なはたらき、優れた芸術や、魂の営為としての生や出来事は、じつはすべて“肉体労働”から発生しています。”具体的運動”からは靈魂のはたらきは現れません。優れた絵画、優れた演奏、突き刺さるような演目の表示、ありありと体験される語り、単なる娯楽でなく捧腹絶倒となるお笑いのワンシーンなど、それらはすべて肉体労働から発生しているのです。

こうした芸術の、秀でたもののすべて、および愛や青春や美のすべてが、じつは肉体労働から生み出されているというのは、一般にはまったく知られていない意外なことです。

誰でも、本腰を入れて料理に興味を持ったことがある人なら、単なるレシピどおりに料理をして、具体的運動としてフライパンや中華鍋を振ってみたところで、それがすばらしい料理人の作る料理と同じ味わいにはならないことをご存じでしょう。それは、すばらしい料理人がそこに魂を込められるからであって、そのことをさらに直接的に言うならば、じつはすばらしい料理人がそこに全身全霊の“肉体労働”を

込められるということなのでした。

あるいは、いささか尾籠にはなりますが、性交においても、それぞれが単に「具体的運動」をするのであれば、それは痛々しく、性愛とは呼べないしろものの空回りの行為になるということをご存じの方もいらっしゃるでしょう。それでもストレス解消にはなるかもしれませんし、あくまで「情動」で性行為をするのだという人にとっては無縁な発想かもしれませんが、そうではない少なからざる人がきっと自分たちのする性交が何か大きな祝福を受けてはいないものだと感じて内心で首を傾げたままでいるに違いありません。

本稿そのものもまた、作図を添えて文章を書き連ね、ひとつのこと解き明かし、語っていこうとする作品のひとつです。ですからこの創作も、作り手の側が“肉体労働”を投げ込まねば優れた作品にはなりえないでしょう。もし本稿にそのように肉体労働を投げ込むことに成功し、またそのことに誠実でありえたならば、あなたは今まさに、ここに作り手の側の「肉声」を聞いているかのように、本稿を読み進めているに違いないはずです。

図中の「報酬」に注目してください。視認しやすいように☆印を添えました。左側、聖なる気持ちで上昇して「具体的運動」を振る舞う者は、その報酬を具体的に、世の中の自我が受け取る必要があるという構図になります。たとえばトレーニング・ジムで具体的運動をする人は、その体と筋力、心肺能力が強化されること、またその体型が鍛えられていてうつくしいものだと、自我と世の中から評価を受ける必要があるでしょう。その報酬のために自我はその努力をしているに違いありません。

いっぽうで右側は、報酬は「本人」に得られるもので、世の中の自我は報酬を受け取る位置にありません。よって、たとえば優れた表現をする魂のドラム・パーカッショニストは、その肉体労働たる演奏の報酬をあくまで「本人」が受け取っており、世の中の自我としてはその報酬は受け取る必要がないということになります。つまりソーシャルな「いいね」を報酬としているということです。

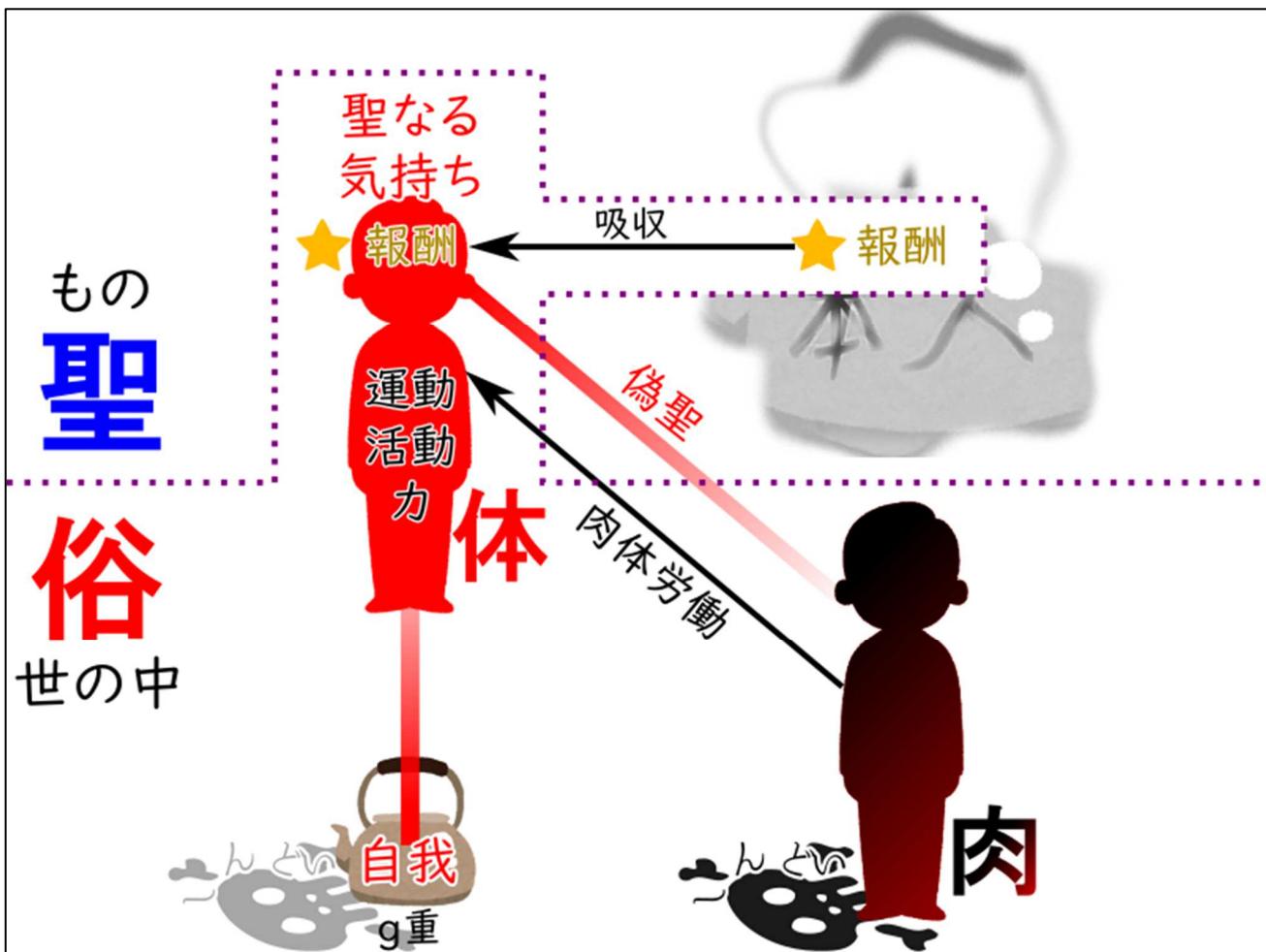
あなたは、「いいね」を稼ぐことが目的の画家と、そうではない画家がいたとしたら、そうではない画家のほうの個展を観に行きたいと望むと思いますし、そこに向けるあなたの魂の態度は、「いいね」目的のその人に向けるものより誠実なものになると思います。

また、図32に示した、「誰かの『本人』に肉体が救われるケース」に引き当てて捉えておきましょう。しかるべき肉体労働は、必ずしも自分の「本人」によってのみ引き起こされるわけではありません。誰かの「本人」に出会い、それに向けて肉体労働が捧げられるということがありますし、むしろほとんどの場合でわれわれが先に体験するのはそちらのケースです。図32で述べたように、そのときには肉体の重さが消えてゆき、「しんどい」が驚くほど消え去っていきます。つまり、本当にしかるべきその瞬間、「この人（本人）のためなら、なぜかいくらでも肉体労働を捧げることができる」と感じられること、またそれどころか、「この人（本人）に肉体労働を捧げることで、むしろわたしが救われている」とまで確信されるということが本当に起こります。肉体労働を“させてもらって”、「こんな光栄なこと」「こんなありがたいこと」と、肉体労働を捧げる側が本心から言うことがじっさいにあるのです。

これまでいつも眠かった人が、眠らずに朝まで目を輝かせて芸術表現にその身をやつしたり、これまでずっとけだるかった人が、万事の用意も後片付けもみずから進んでいきいきしてやったりということがあります。少し前まではまったくそういうタイプの人ではなかったのに！　トルストイは著書「光りあるうちに光の中を歩め」の中で、登場人物を通して「労働はよろこびじゃからな」と語りました。

肉体労働は「しんどい」ではなく、すべてが正しくはたらくとき、それはむしろ「しんどい」を解決する唯一無二の手段なのです。これを「肉体労働の解放」と呼びます。

【図36】ブラック



誰かの「本人」に出会い、肉体労働を捧げると、身体の重さが消えてゆき、「しんどい」が消失していくことがあります。

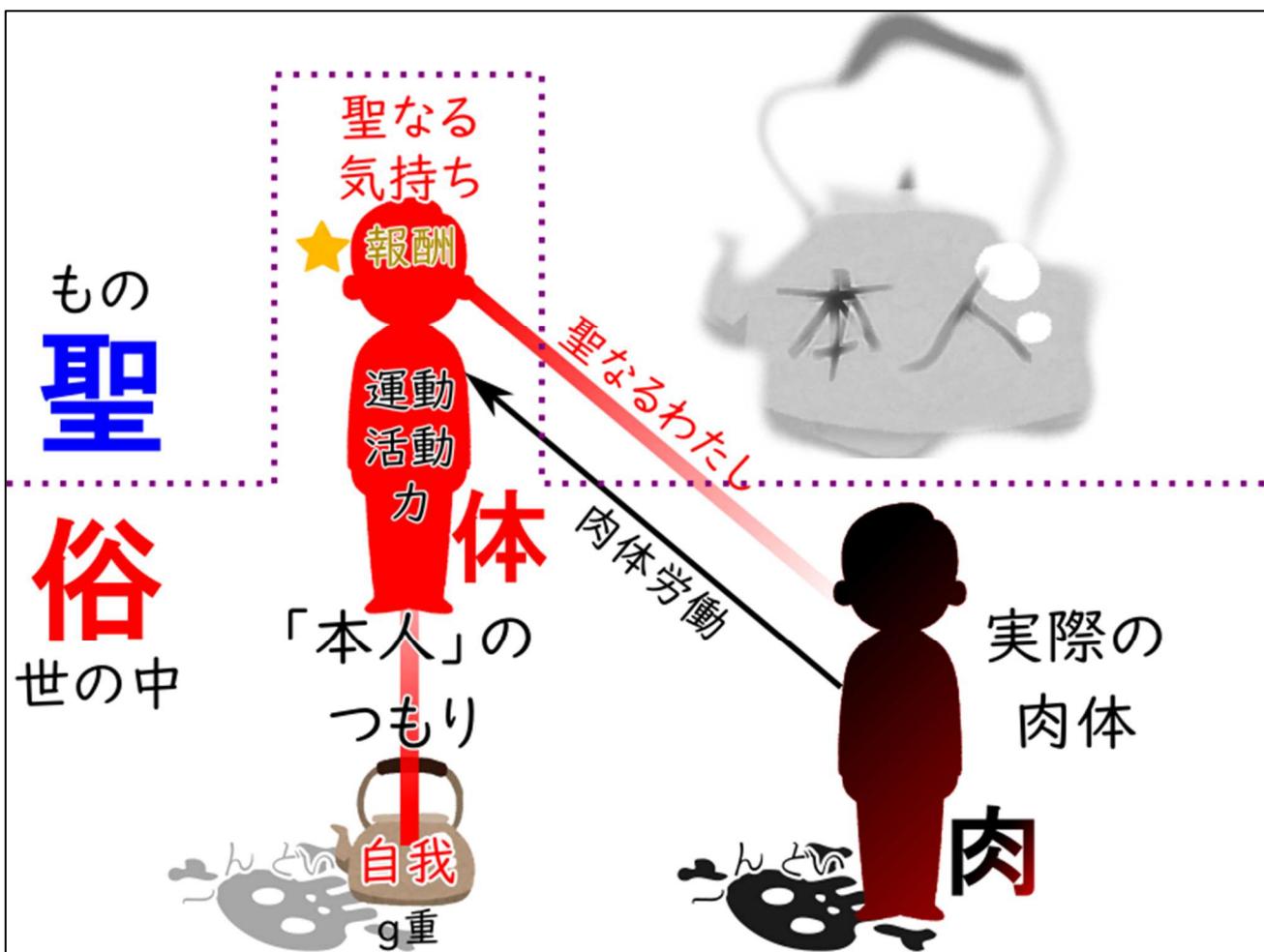
そのぶん、その逆をやると「ブラック」になります。「本人」ではなく「聖なる気持ち」の誰かに肉体労働を捧げると、その肉は誰の本人にもつながっておらず、黒く染まってゆきます。（しかも報酬まで横取りされてしまいます）

「ブラック」というと一般にはブラック企業が連想されますが、ブラックは必ずしも企業に限りません。本人・聖なる「もの」ではない、偽物の聖（偽聖）に肉体労働を捧げると、どのような関係でもこのことは起こります。よって、ブラック家族やブラック友人、ブラック恋人なども存在します。

たとえばAさんの荷物をBさんが持つてやり、Aさんは楽に歩き、Bさんは肉体労働を捧げるという形にしたとき、Aさんが「本人」ならばBさんは「しんどい」が消えていきますが、Aさんがただの「聖なる気持ち」（聖なるわたし）でしかなかった場合、この関係はブラックで、Bさんの肉は急速に「しんどい」に押しつぶされていきます。

図中、ブラック環境下にあるとき、右側の人は早急に関係の分離を考えなくてはなりません。勤め先などではそう簡単に離脱はできませんが、右側の人は早急に自分の「本人」に接続を得るのが最善となります。また、外部に別の誰かの「本人」と出会って肉体労働を捧げられれば、ブラック関係からの分離ができます。（肉体労働は金銭でも代替できる場合がありますが、注意が必要です。※後述します）

【図37】セルフ・ブラック



われわれは自分自身に対して肉体労働を捧げざるを得ません。誰も荷物を持ってくれるわけではない場合、自分で荷物を持つしかないのでから、自分自身への肉体労働ということになります。

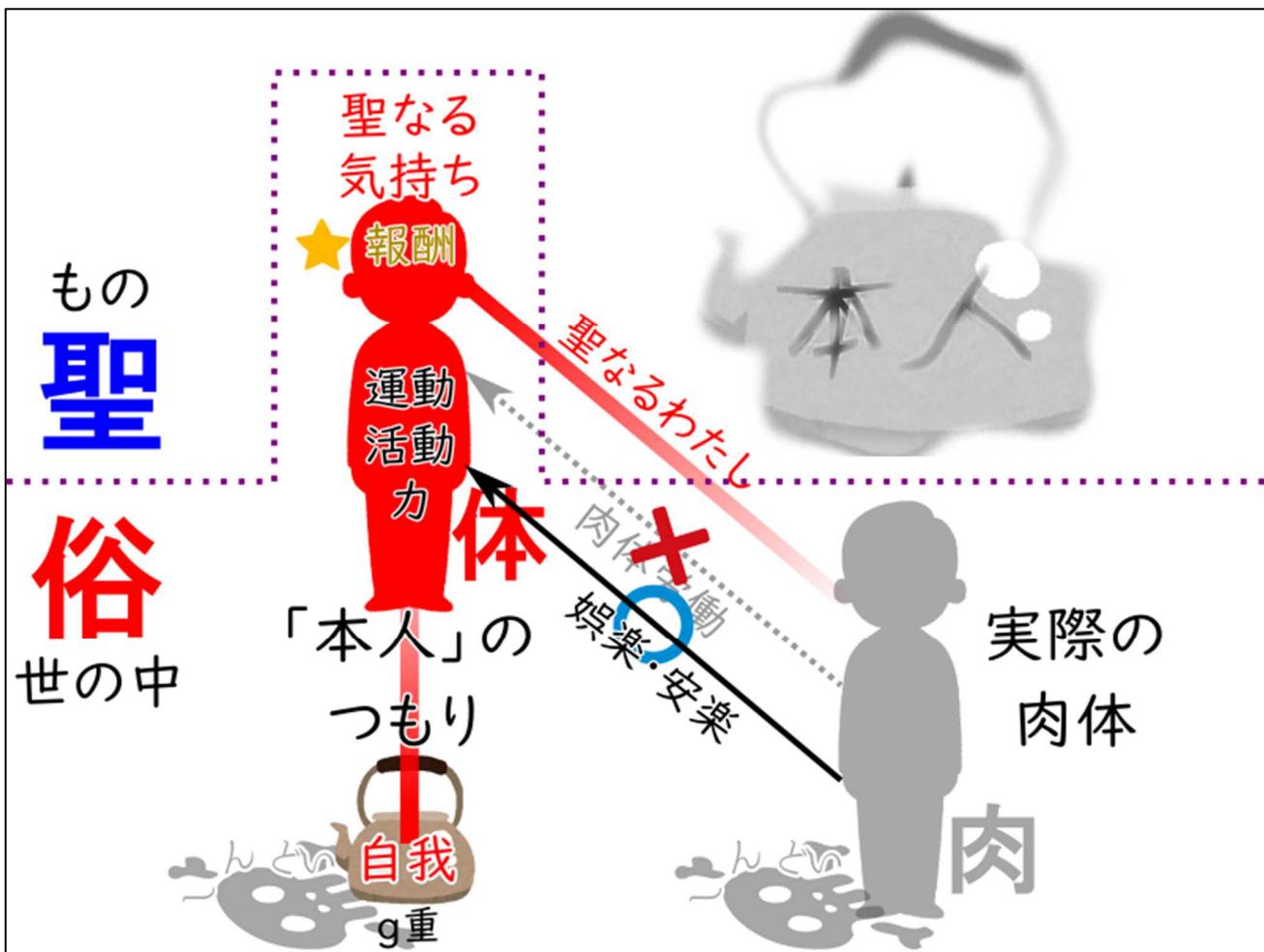
あなたが笛を吹く場合でも、絵筆をふるう場合でも、肉体労働なしにそのことは為せないのですから、あなたはあなた個人かぎりであっても、何かに肉体労働を捧げていることになります。

図中の二体は同一人物を指しています。左側は、当人が「本人」と思い込んでいる自です。聖なる気持ちで上昇し、具体的な運動・活動をしている、それを自分では「本人」と思っています。けれども本当はそうではありません、それは「世の中」に発生している自我であって「本人」ではありません。この人は自分の内部において、「本人」ではない自我に肉体労働を捧げてしまい、肉のブラック化が起こります。

こうして「ブラック」という現象が自己完結的に個人の内部で実体化します。「ブラック」は関係性によらず、セルフでも起こり得るということです。

このセルフ・ブラックという現象は、稀なことではなく、むしろブラックと呼びうる現象の中で最も多いものと考えてもよいものです。ブラック企業やブラックな関係というのは、多くこうしたセルフ・ブラックが肉体労働を誰かに肩代わりさせようとした結果として生じるものです。

【図38】引きこもっていくわれわれ



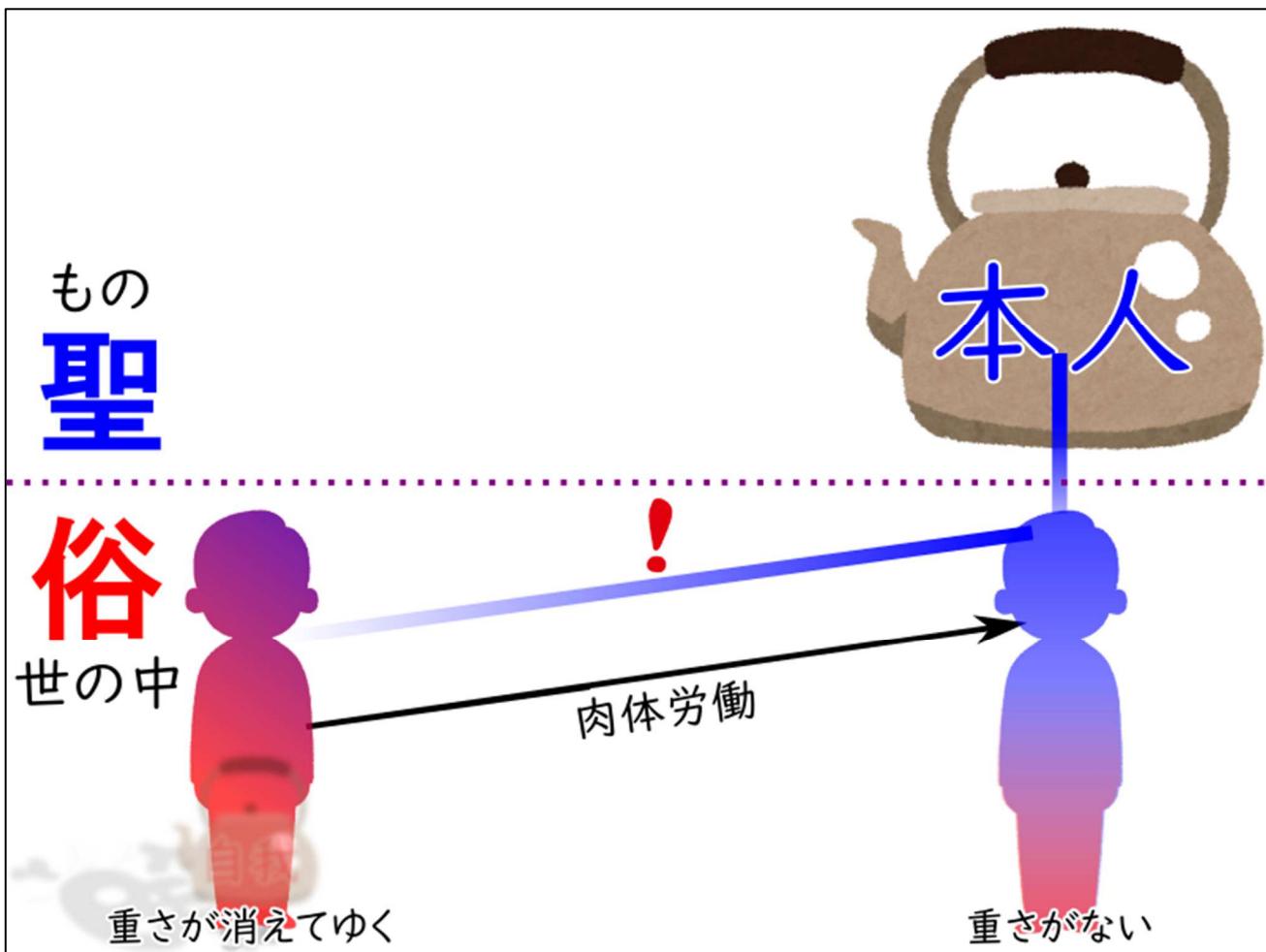
「うまいやり方だな」という皮肉がここにはあります。

肉体労働を「本人」以外に捧げてしまうと、ブラックが起り、「しんどい×4」が発生してしまいます。であれば、「肉体労働じたいをしなければいい」という発想がありえるわけです。どこにも勤めなければブラック企業がありえないように、いっさい肉体労働をしなければブラック現象じたいが起りません。よってわたしたちは、聖なる気持ちで自我を上昇させながら、「肉」はサボらせ続けるというパターンに行き着きます。寝転んで動画を観続け、そこに「いいね」を押すことや、コメントや批評をつぶやくことが自身の「活動」になっていきます。肉をサボらせたまま「うっとり」し続けるというのが、聖なる気持ち・聖なるわたしにぴったりのスタイルだということに、知らず識らず行き着くのです。それでも重んじて対抗する力は欲しいものなので、寝転びながら、内心で「カネと権力がすべてだよね」「けっきょく力関係だよね」と思うようになっていきます。

トレーニング・ジムで筋力を鍛える運動ぐらいは、報酬目当てにやろうとするのですが、奇妙なことに、筋力トレーニングできえ「肉」をサボらせたままそれをするということは可能です。

「聖なる気持ち」で上昇した自我に、誰かが肉体労働を奉じてくれたら最高です。それこそまさに「聖なるわたし」の自負にも適合する、当人にとっては理想の状態です。甘い花蜜のような味わいがあります。それ以外はすべて「しんどい×4」に直結しますので、早晚「肉をサボらせる聖なるわたしに誰かが肉体労働を奉じるべき」という思想は、内部で狂気じみた執着になっていきます。

【図39】誰かの本人に「出会う」方法



きわめて大切なことをお話しします。肉体労働はとてつもなく決定的なファクターです。

肉をサボらせているうちは、決して誰の「本人」にも出会うことはできません。覚えておいてください！人は、奉じた肉体労働の中で「本人」と出会うのです。奉じた肉体労働と等価で出会うと捉えてしまってもかまいません。

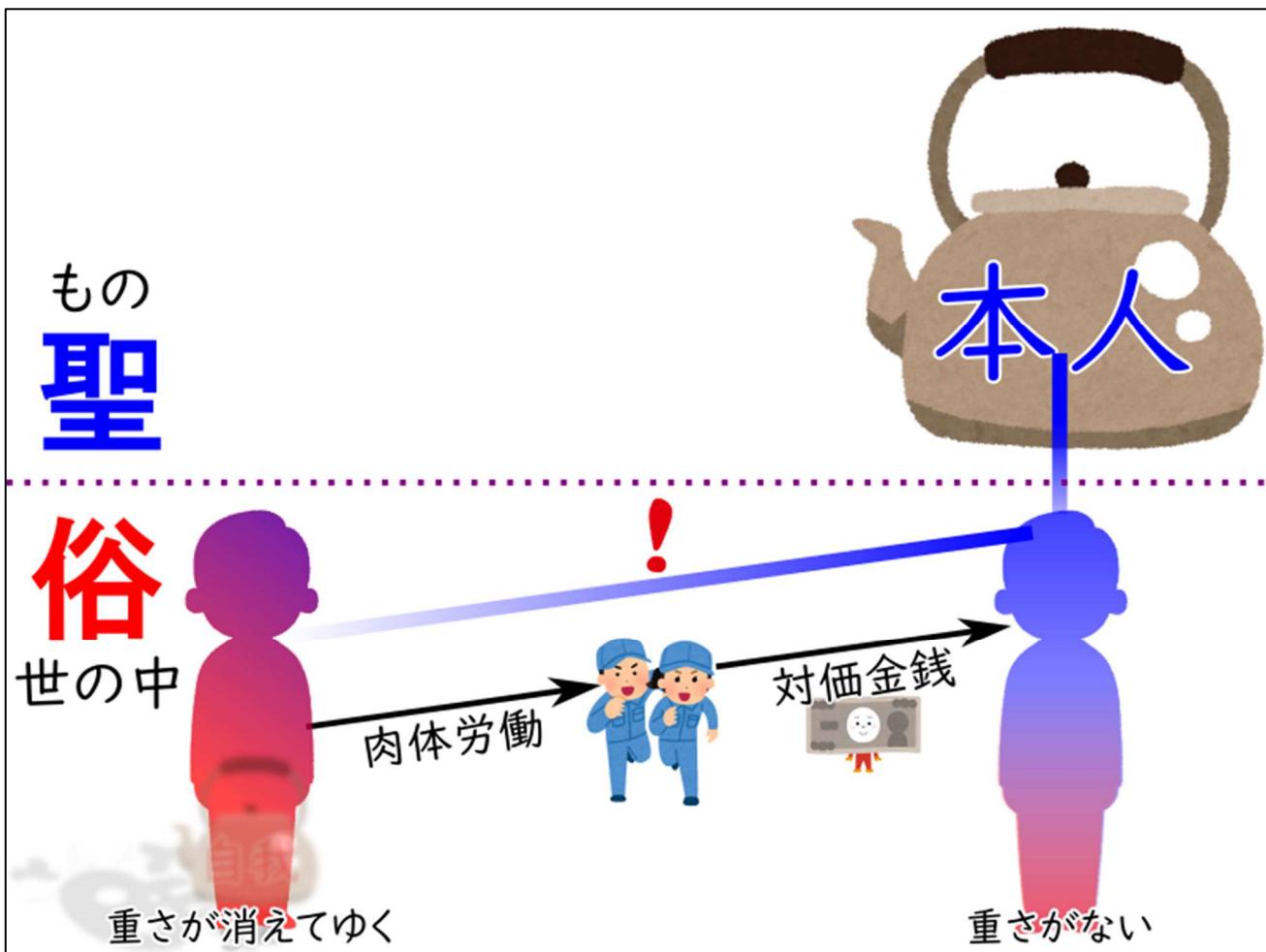
あの人の代わりに荷を運んだ、あの人の代わりに後片付けをした、あの人の代わりに買い物に走った、あの人の濡れた服をタオルで拭いて乾かした、そんなことです。あるいは、あの人の代わりに声を出した、あの人の代わりにわたしが話したというようなこと。それが、肉をサボらせない、肉体労働なら、本当に驚くべきことが起こります。また、肉をサボらせずに生きている人は、ずっとそうした中を生きているということでもあります。そういう人は「驚く」「震える」という肉体労働の中をずっと生きてています。

最小のこととしては、「あの人とちょっと一緒に歩いた」というようなこと、あるいは「あの人とがんばって声を出して話した」というようなこと。それでは、わずかでも肉体労働が奉じられていれば、信じられないようなことが起こります。小さくとも心底から驚くべきことが。逆に、肉をサボらせていたら、似たようなことをしてもたいへん貧しい結果が与えられます。

図の場合、もともとは右の人が、自らの肉体労働によって、自らの「本人」に出会っています。その肉体労働を左の人が肩代わりすると、右の人の「本人」に、左の人が出会うのです。

肉をサボらせているうち、具体的な運動をしているうちは、誰の本人に出会うこと也没有！

## 【図40】肉体労働の対価としての金銭



あなたは次のA B Cの例で、「一万円をください」とねだられるとします。Aは、わがままな男が「パチソコに行ってストレス発散したいからカネが欲しい」と言います。Bは、高飛車な女が「アフタヌーンティに行って見栄を満喫したいからお金欲しい」と言います。Cは、聰明な少年が「植物図鑑が欲しい、勉強したいから代金が欲しい」と言います。あなたはその一万円を獲得するために、半日かけてある貨物をX地点からY地点まで運ぶという荷役をしなくてはなりませんが、あなたのその肉体労働はA B Cの三つのケースでどれも同質でしょうか。きっとそんなことはないと思います。

A B Cのうち、選択できるならあなたはCを選択すると思います。そして、聰明な少年が天命のように学門に向かうというなら、「半日かけた荷役ぐらいなんでもない」というここで、あなたはその肉体労働をこなすのではないでしょうか。

この場合、一万円の金銭は、あなたの肉体労働の対価となって、あなたの肉体労働を代替しています。つまり、あなたが直接の肉体労働として“その植物図鑑を書いてやればよい”のですが、それはなかなかむつかしいことです。誰かが肉体労働を投げ込んで書いた優れた植物図鑑があるならば、あなたは肉体労働の対価をもってそれを少年に与えてやればよいのです。少年にとってその学門にかじりつくことは、自我の満悦ではなく「本人」そのものの営為に違ひなく、よってあなたは肉体労働を通して「重さが消えていく」ということを体験します。

本稿ではいくつか「じっさいにこうしたことが起こります」という表現をしていますが、その表現にかか

わって、本稿では伝聞や想像ではなく、直接その現象が目の前で起こるのを目撃した・確かめたものに限り、それが「じっさいに起こる」と表現しています。プライバシー保護の観点からじっさいの詳細をお伝えすることはできませんが、すべてじっさいに「起こった」こと、それもほとんどが繰り返しそのようなことが起こると確認されたもののみを、「じっさいにそうしたことが起こる」と表記しています。

それで、じっさいにこのようなことが起こります。ある人は長いあいだ、もはや理由が特定できない暗鬱の中を暮らしていました。夜寝るときにいつも「明日なんか来なければいい」と思って床についていたそうです。当人も、何に追い詰められていたのか、いまもって定かではないといいます。

この人は、あることに投資しました。投資といつても利潤のためではなく、ある人がつづけている会合や勉強会について、その費用を自分が負担したいと言い出したのです。そのようなことをしてみてはどうか、と友人に提案されたとき、なぜかその人は「そんなことをさせてもらえるんですか?」と奇妙な応え方をしました。そしてそれ以来、その人は身を蝕んでいた不明の暗鬱からとつぜん解放されたのです。当人はそのことを「本当にスゥーッと消えていった」と語ってくれます。

そうしたことがじっさいにあるので、肉体労働を奉じるだけでなく、ふだんからの肉体労働の対価となる金銭を奉じることでも、「肉体の重さ」「しんどい×4」の解決は起こるということを、ここでは事実として報告しなくてはなりません。

ただし、言わずもがな金銭は「世の中」で強い価値を定義づけられたもので、「世の中」で強い情動の対象にもなるものです。金銭はじつに“使いやすい”のですが、そのぶん使い方を誤ると、やはりその身に起こるのはブラックの現象であって危険です。もしすべてのカルト宗教が、信者からお布施を巻き上げないものなら、そのトラブルの多くはなくなるに違いありません。肉体労働は一気に奉じることはできませんが、金銭は一気に奉じることができますので、その危険を鑑みて慎重に取り扱うことが必要です。

また、図38の「引きこもっていくわれわれ」にも再度注目してみましょう。「聖なる気持ち」で上昇した自我に、誰かが肉体労働を奉じてくれたら理想的で最高の状態なのですが、ここで奉じるものも金銭に置き換えることが可能だということです。それで、「聖なる気持ち」をこじらせた偏屈者は、金銭や物品を奉じられたときだけ素直に受け取り、ごきげんになるという特徴が現れます。奇妙な閉塞感のある田舎などで、なぜか贈答の風習が強く尊重されているような様子があるとき、あなたはこのことを思い出してよいと思います。わずかでも肉体労働あるいは金銭や物品が奉じられることは、「聖なるわたし」に対しては無上の花蜜のように味わわれるのです。

## おわりに

わたしたちが一般に思っている「わたし」というのは、じつは「本人」ではありませんでした。

あなたの「気持ち」は、あなた本人ではなかったのです。

気持ち・情動はあなたの「自我」のものでした。

その「自我」はどこに宿っているか。

われわれの自我は、本人に宿るのではなく、「世の中」に宿るのです。

「世の中」は、本人から見て周辺的な、情動の湧出から形成されたもので、それじたいが情動の塊です。

われわれの自我も、その「世の中」を構成する周辺的元型のひとつにすぎませんでした。

自我には「分かる」「解る」という能力がありますが、その能力じたいが「世の中」に属しています。

世の中が強くなるほど、自我も強くなり、「わかる」も強くなって、われわれは「もの」を失います。

わからなくて失うのではなく、わかることで失うのです。

世の中が強くなり、情動も強くなり、そのすべてが、わかる、わかる、わかる……そのすべての「わかる」が、じつは本人のものではなく“周辺”的なものなので、あなたは周辺に連れていかれて行方不明になるわけです。強力な「わかる」、それに伴う強力な情動も、じつは「周辺」にすぎなかった。

それで、「周辺」に永住するようになったあなたは、本人という「もの」を失います。

われわれは「本人」を失い、「もの」を失って、世の中で互いの情動・気持ちを「わかるわかる」とわかりあいっこしていきます。

俗なわれわれのことですから、それだけでいいじゃないかという気もします。

けれどもわれわれの肉体がそれを赦しません。

肉体が重くなっています。しんどいしんどいしんどいしんどい、となってゆきます。

「本人」を喪失したわれわれの肉体は、それじたい罪業の十字架のように重くのしかかってきます。

聖なる「もの」がなければ、肉はその罪業たる本質のままブラック化していきます。わずかな肉体労働も急激なブラックをもたらします。

ブラックならばたちまち「しんどいしんどいしんどいしんどい」を免れません。

この「しんどい×4」はどうしようもないものです。無視することなんて出来ません。だって、どれだけ無視しても「しんどい」のですから……

その「しんどい」ということの果てしない奥行きには、もはや恐怖さえ覚えます。

まともに向き合ったら、つぶされてしまう。飲み込まれてしまう。その闇、ブラックの深淵に。

だからわれわれはけっきょく、何かしらの「聖」を掲げなければ、まともに生きていけないようです。

とはいえ、「もの」は失われたので、おのれの「聖なる気持ち」をこっそり掲げるしかない。それが自己陶酔的な「聖」であれ、ひねくれてネガティブな「聖」であれ。

そうして掲げた「聖なる気持ち」によってわれわれは、自分が上昇していくような気がし、それによつて強くあることができ、また守られていくような気がします。これが「わたし」なのだという誇らしさで。

あるいは「ようやく自分自身を掴んだよ」「けっきょく自分なんだよね」と諦観できるような気持ちで。

けれどもじっさいには、そうではない、何かどうしようもないヒステリー症状が湧いてきます。

はっきりとした「自分」をわかっているのに、なぜヒステリーが起るのだろう。

このむなしさやさびしさは何だろう？ けっきょくのところ、本当の「わたし」を、誰も“わかって”くれないからじゃないか。

世の中で相互に「主張」が為されます。強烈な主張は、それぞれに「いいね」が数万もついています。敵方にも同じぐらいの「いいね」がついています。

そこに数十万の「わかる」がついてきているのに、なぜか誰の「本人」にも会ったことがありません。誰も彼も、これが「わたし」、これが「おれ」という自負を示しているのに、なぜか互いに誰も「本人」に会ったことはないという感触がする。誰の「話」もないという感触がする。

さらには誰も、わたしの「本人」に会ってくれてはいない、わたしの「本人」、わたしの「話」を認めてくれてはないと感じられるのです。これではいくら承認欲求を満たしてもキリがありません。

そこから、「じゃあ、あなたの『本人』を示してみてよ」「あなたの『話』を聞かせてよ」ということになる。本当のわたしというものがあるなら、それを示してしまえばいいじゃないか。

ところがそう言われると、肉が急激に黒くなってゆき、重くなり、動けなくなり、パニックになります。

「本人」の示し方がわからない。

何度トライしてみても、なぜか自分の「話」が壊れている……

そのことにとてつもない苦しさと、吐き気と、めまいが起ります。その理由さえわからない。

急に、自分の全身が不浄なものに思えて、汚らしいものが満ちているように感じられて、自分の身を切り刻み、焼き払いたくなる。

この狂気じみた苦しさから逃れるためには、「聖」を掲げるしかありません。それが聖なる「もの」ではなく、聖なる「気持ち」でしかなかったとしても、それを掲げるしか逃げ道がありません。

「聖なる気持ち」を掲げていないと呑み込まれて死んでしまいます。だからそのことを長く続けています。当然、長く続けているうちに、無理があると感じ始めはするのですが、今さらやめることもできない。ここからはもう、行くも地獄、戻るも地獄です。そのまま「聖なるわたし」で押し切り続け、ヒステリーむき出しに慣れ続けるか、ついに「しんどいしんどいしんどいしんどい！」で押しつぶされて、引きこもるかもしれません。

なぜこのようなことになってしまうのでしょうか。

ことの始まりは、単純なこと、自我は「本人」ではなかったということです。

自我は「気持ち」ですが、本人は「もの」でした。

気持ちには、軽い気持ちや重い気持ちがありますが、「もの」には、それじたいの重さがありません。

重さがあるのが自我で、重さがないのが本人です。

よって、自我で挙動すると肉体は果てしなく重くなっています。

本人で挙動すると肉体は重さがなくなっています。

本人が現れるということは、重さ・力が消えるということなのです。

このことに、聖と俗が当てはまります。

重さのない「もの」が聖で、重さのある「気持ち・情動・わかる・世の中」が俗でした。

この聖と俗を濫（みだ）ると、われわれの魂は命を失い、そのことに吐き気やめまいを覚え、不浄とおぞましさにさいなまれます。「気持ち悪い」「吐きそう」「マジで無理」と。

このような仕組みの中で、あなたはどのような存在でしょうか。あなたとは何でしょうか。

わたしはあなたの思いや気持ちを訊いているのではないのです。

あなたの主張ではなくあなたの話があるはずです。

あなたは「本人」であってください。

令和五年 2023年12月30日 九折空也

【基礎問題1. 次のカッコ内のうち正しい語句を選びなさい】

1. 心理は（本人／世の中）の内にある。
2. 本人は心理のうちに（ある／ない）。
3. 「世の中」は（法律／心理）から成り立っている。
4. 情動は（本人／世の中）に湧き出す。
5. 元型群の中央に本人は（ある／ない）。
6. 元型はイメージだけのもの（だ／ではない）。
7. 元型の（外部／内部）から情動が湧き出す。
8. 情動は本人のパワーで（ある／はない）。
9. 自我は周辺的元型のひとつ（だ／ではない）。
10. 自我じたいで、情動の源泉を持って（いる／いない）。
11. 周辺的とは、本人を世の中が包んでいるという意味（だ／ではない）。
12. われわれは世の中で本人同士のやりとりが（できる／できない）。
13. 自我のやりとりはわれわれの魂を（充実／むなしく）させる。
14. 世の中が強くなると、われわれの自我は（強く／弱く）なる。
15. 自我が強くなると、自我の壁を突破することが（できるように／できなく）なる。
16. 自我が強くなると、本人を問われたときに応えることが（できる／できない）。
17. 本人の動力は（気持ち／主体性）だ。
18. 自我の動力は（主体性／気持ち）だ。
19. 世の中は（心理的／存在的）だ。
20. 世の中は本人が（いない／ひしめいている）。
21. 情動は世の中に（個性／キャラ）を生み出す。
22. 自我が他の元型と融合するということが、壁を破るということ（だ／ではない）
23. ヒステリーは（欲求不満の／社会的な）抑圧から起こる。
24. ヒステリーとは挙動が（我慢の限界／自我同一性）を逸脱することを言う。
25. 本稿が唱えるのは（性的／作品的）欲求不満説だ。
26. （気持ち／本人）が得られないことに不満の根源がある。
27. 「ネタ」にして混ぜ返すというのは、穩健な（ユーモア／安全装置）だ。
28. 本人が問われるとき、茶化すことしかできない人は（愉快性／回避性）傾向がある。
29. やかんや手ぬぐいと「本人」は（別の／同じ）ものだ。
30. 「もの」は（わかる／わからない）ものだ。
31. 自我は（「存在」／「わかり」）だ。
32. 世の中において主張はわから（なくてよい／なければならない）。
33. 分解した要素を統合した、するともとの「もの」に（戻った／戻らなかった）。
34. 「浦島太郎」という話は、ひとつの（もの／主張）だ。
35. われわれは聖なる「もの」に触れ（てはいけない／なくてはならない）。
36. 聖なる「もの」に、聖なる気持ちが湧くべき（だ／ではない）。
37. 聖なる気持ちというものは存在（する／しない）。

## 問題

38. やかんや手ぬぐいという「もの」は、俗（だ／ではない）。
39. 聖なる「もの」を侵害しているのは、（聖なる／俗たる）わたしだ。
40. 俗はワイワイしているのが（よい／よくない）。
41. 俗たるわたしのまま神社に参拝するべき（だ／ではない）。
42. 俗なわたしになり聖なる「もの」へ至ろうとすることで、聖なる「もの」を（獲得／喪失）する。
43. （俗を捨てる／聖に侵食される）ことで、魂は自己実現を得てゆく。
44. 魂の自己実現は、聖を本人で挙動すること（だ／ではない）。
45. 魂の自己実現は、俗を本人で挙動すること（だ／ではない）。
46. やかん、手ぬぐいという「もの」には重さが（ある／ない）。
47. 気持ち、情動、比率などには重さが（ある／ない）。
48. 本人で挙動すると（重みがある／重さがない）。
49. 聖なる気持ちを持つことで、（平等／マウント）の精神が起こる。
50. 聖なる気持ちを持つのは（逃れる／立ち向かう）ためだ。
51. 聖なる「もの」がなければ、致命的に（退屈だ／しんどい）。
52. 「しんどい」の実際は、「やれやれ」／「狂気」に近い。
53. 聖なる気持ちは、やがて（力関係／神仏）だけを信仰する。
54. 自分が出会えるのは自分の「本人」だけ（だ／ではない）。
55. 不淨が苦手な人は聖なる体質ということ（だ／ではない）。
56. 俗をまっとうするということはあえて汚い声を出すということ（だ／ではない）。
57. 「淨」たる人は（聖／俗）において、情動で挙動（する／しない）。
58. 正しく（具体的の運動／肉体労働）をすることができたら、身体の重さが消えていく。
59. 肉体労働を（解放／努力）せよ。
60. いわゆる「ブラック」をもたらすのは、（俗な／聖なる）気持ちの持ち主だ。
61. 自分が自分自身に「ブラック」をもたらすことは（ある／ありえない）。
62. 筋力トレーニングをしながら肉をサボらせることは（可能／不可能）だ。
63. 自分の聖なる気持ちに向けて、人は（娯楽／肉体労働）を奉じるようになる。
64. 誰かの本人とは（気持ち／肉体労働）の等価で出会える。
65. 金銭を奉じることで身体の重さが消えることは（ある／ない）。

## 【基礎問題 1. 解答】

1. 心理は（世の中）の内にある。
2. 本人は心理のうちに（ない）。
3. 「世の中」は（心理）から成り立っている。
4. 情動は（世の中）に湧き出す。
5. 元型群の中央に本人は（ない）。
6. 元型はイメージだけのもの（ではない）。
7. 元型の（内部）から情動が湧き出す。
8. 情動は本人のパワーで（はない）。
9. 自我は周辺的元型のひとつ（だ）。
10. 自我じたいで、情動の源泉を持って（いる）。
11. 周辺的とは、本人を世の中が包んでいるという意味（ではない）。
12. われわれは世の中で本人同士のやりとりが（できない）。
13. 自我のやりとりはわれわれの魂を（むなしく）させる。
14. 世の中が強くなると、われわれの自我は（強く）なる。
15. 自我が強くなると、自我の壁を突破することが（できなく）なる。
16. 自我が強くなると、本人を問わたったときに応えることが（できない）。
17. 本人の動力は（主体性）だ。
18. 自我の動力は（気持ち）だ。
19. 世の中は（心理的）だ。
20. 世の中は本人が（いない）。
21. 情動は世の中に（キャラ）を生み出す。
22. 自我が他の元型と融合するということが、壁を破るということ（ではない）
23. ヒステリーは（欲求不満の）抑圧から起こる。
24. ヒステリーとは挙動が（自我同一性）を逸脱することを言う。
25. 本稿が唱えるのは（作品的）欲求不満説だ。
26. （本人）が得られないことに不満の根源がある。
27. 「ネタ」にして混ぜ返すというのは、穩健な（安全装置）だ。
28. 本人が問われるとき、茶化すことしかできない人は（回避性）傾向がある。
29. やかんや手ぬぐいと「本人」は（同じ）ものだ。
30. 「もの」は（わからない）ものだ。
31. 自我は（「わかり」）だ。
32. 世の中において主張はわから（なければならぬ）。
33. 分解した要素を統合した、するともとの「もの」に（戻らなかつた）。
34. 「浦島太郎」という話は、ひとつの（もの）だ。
35. われわれは聖なる「もの」に触れ（てはいけない）。
36. 聖なる「もの」に、聖なる気持ちが湧くべき（ではない）。
37. 聖なる気持ちというものは存在（しない）。

38. やかんや手ぬぐいという「もの」は、俗（ではない）。
39. 聖なる「もの」を侵害しているのは、（聖なる）わたしだ。
40. 俗はワイワイしているのが（よい）。
41. 俗たるわたしのまま神社に参拝するべき（だ）。
42. 俗なわたしなりに聖なる「もの」へ至ろうとすることで、聖なる「もの」を（喪失）する。
43. （聖に侵食される）ことで、魂は自己実現を得てゆく。
44. 魂の自己実現は、聖を本人で挙動すること（ではない）。
45. 魂の自己実現は、俗を本人で挙動すること（だ）。
46. やかん、手ぬぐいという「もの」には重さが（ない）。
47. 気持ち、情動、比率などには重さが（ある）。
48. 本人で挙動すると（重さがない）。
49. 聖なる気持ちを持つことで、（マウント）の精神が起こる。
50. 聖なる気持ちを持つのは（逃れる）ためだ。
51. 聖なる「もの」がなければ、致命的に（しんどい）。
52. 「しんどい」の実際は、「狂気」に近い。
53. 聖なる気持ちは、やがて（力関係）だけを信仰する。
54. 自分が出会えるのは自分の「本人」だけ（ではない）。
55. 不浄が苦手な人は聖なる体質ということ（ではない）。
56. 俗をまとうするということはあえて汚い声を出すということ（ではない）。
57. 「淨」たる人は（俗）にいて、情動で挙動（しない）。
58. 正しく（肉体労働）をすることができたら、身体の重さが消えていく。
59. 肉体労働を（解放）せよ。
60. いわゆる「ブラック」をもたらすのは、（聖なる）気持ちの持ち主だ。
61. 自分が自分自身に「ブラック」をもたらすことは（ある）。
62. 筋力トレーニングをしながら肉をサボらせることは（可能）だ。
63. 自分の聖なる気持ちに向けて、人は（娯楽）を奉じるようになる。
64. 誰かの本人とは（肉体労働）の等価で出会える。
65. 金銭を奉じることで身体の重さが消えることは（ある）。

## 問題

### 【基礎問題2. 以下の文章のうち、正しいものには○、誤っているものには×をつけなさい】

1. ( ) 一般には本人の中に自我があると思われているが、本当は、本人の中にあるのは心理だ。
2. ( ) さまざまな本人が世の中を形成している。
3. ( ) 元型から情動が湧き出し、「世の中」とはその情動のことだ。
4. ( ) わたしの気持ちは世の中に発生している。
5. ( ) 「本人」という元型がある。
6. ( ) 自我的周辺に世の中がある。
7. ( ) 自我是本人に対し周辺的事象だ。
8. ( ) 本人同士が会うということは、互いによくわかりあうということだ。
9. ( ) われわれは自分の「本人」にアクセスしていながら、互いにそれを隠し合っている。
10. ( ) 「本人」が消失した原因のひとつは、世の中が強くなつたことだ。
11. ( ) 「本人」を見せてほしいと望む人は、自分が「本人」を開示している。
12. ( ) 独特なキャラをしている人は、独自の主体性を動力に動いている。
13. ( ) 世の中は「心理的」で、自分の心理も世の中に生じている。
14. ( ) 自我インフレーションによって、果てしなく強い気持ちが起こる。
15. ( ) 異様に賢者のように振る舞いたがる人は、老賢者の元型ヒステリーを起こしている。
16. ( ) すぐに「本人」を示してはつまらないで、しばらくは「ネタ」で気を利かす。
17. ( ) やかん・手ぬぐいに情動を起こすことはできないので、それらは「もの」だ。
18. ( ) 本人には「わかる」という機能があり、世の中には元型というわからない現象がある。
19. ( ) 善悪をよく区分することが、われわれに命をもたらす。
20. ( ) ひとつの話を、世の中・自我が分解すると、ありもしない主張に変化してしまう。
21. ( ) 世の中には聖と俗がある。
22. ( ) 俗は聖に触れることができず、また触れなくてもよい。
23. ( ) 聖なる気持ちがあつてこそ聖なる「もの」に会うことができる。
24. ( ) 俗が「手出し」さえしなければ、聖なる「もの」はログアウトしない。
25. ( ) 聖なる「もの」があるとき、俗はしめやかになる。
26. ( ) 「聖なるわたし」は聖なる「もの」を分解する。
27. ( ) 聖は本来、「本人」でしか挙動できない。
28. ( ) 「本人」が聖を挙動することが魂の自己実現となる。
29. ( ) 世の中のやかんには重さがある。
30. ( ) 「本人」は靈魂的事象で、それは肉体に現われる。
31. ( ) 何も悪いことをしなければ身体が重くなることはない。
32. ( ) 破滅的な「しんどい」におびやかされて、人は「聖なる気持ち」に逃避する。
33. ( ) 人は聖なる気持ちでマウントをする。
34. ( ) 聖なる気持ちの人は、精神性の高さを信仰する。
35. ( ) 誰かの「本人」に出会い、それを認めるだけでも、身体の重さが消えることはある。
36. ( ) 「聖なるわたし」がこころに聖句を唱えてほほえむことを淨という。
37. ( ) 「本人」と接続して重さの消えた人は、淨に至り、もはや俗の中にいない。

## 問題

38. ( ) 優れた芸術は、表現力の活動だ。
39. ( ) 聖なる「もの」は、肉体労働、特に肉の労働として現れる。
40. ( ) しゃにむに肉体労働さえしていれば身体が重くなることはない。
41. ( ) 偽りの聖に肉体労働を奉じることでブラックが起こる。
42. ( ) 自分が偽りの聖であったら自家製でブラックが起こり続ける。
43. ( ) 俗の気持ちのせいで、われわれは娯楽と安樂をむさぼってしまう。
44. ( ) 自分の肉体を休ませているとき、誰かの本人と出会う。
45. ( ) 偽りの聖に金銭を奉じることでもブラックは起こってしまう。

【基礎問題2. 解答】

1. (×) 一般には本人の中に自我があると思われているが、本当は、本人の中にあるのは心理だ。
2. (×) さまざまな本人が世の中を形成している。
3. (○) 元型から情動が湧き出し、「世の中」とはその情動のことだ。
4. (○) わたしの気持ちは世の中に発生している。
5. (×) 「本人」という元型がある。
6. (×) 自我的周辺に世の中がある。
7. (○) 自我是本人に対し周辺的事象だ。
8. (×) 本人同士が会うということは、互いによくわかりあうということだ。
9. (×) われわれは自分の「本人」にアクセスしていながら、互いにそれを隠し合っている。
10. (○) 「本人」が消失した原因のひとつは、世の中が強くなつたことだ。
11. (×) 「本人」を見せてほしいと望む人は、自分が「本人」を開示している。
12. (×) 独特なキャラをしている人は、独自の主体性を動力に動いている。
13. (○) 世の中は「心理的」で、自分の心理も世の中に生じている。
14. (○) 自我インフレーションによって、果てしなく強い気持ちが起こる。
15. (○) 異様に賢者のように振る舞いたがる人は、老賢者の元型ヒステリーを起こしている。
16. (×) すぐに「本人」を示してはつまらないで、しばらくは「ネタ」で気を利かす。
17. (○) やかん・手ぬぐいに情動を起こすことはできないので、それらは「もの」だ。
18. (×) 本人には「わかる」という機能があり、世の中には元型というわからない現象がある。
19. (×) 善悪をよく区分することが、われわれに命をもたらす。
20. (○) ひとつの話を、世の中・自我が分解すると、ありもしない主張に変化してしまう。
21. (×) 世の中には聖と俗がある。
22. (○) 俗は聖に触れることができず、また触れなくてもよい。
23. (×) 聖なる気持ちがあつてこそ聖なる「もの」に会うことができる。
24. (○) 俗が「手出し」さえしなければ、聖なる「もの」はログアウトしない。
25. (×) 聖なる「もの」があるとき、俗はしめやかになる。
26. (○) 「聖なるわたし」は聖なる「もの」を分解する。
27. (○) 聖は本来、「本人」でしか挙動できない。
28. (×) 「本人」が聖を挙動することが魂の自己実現となる。
29. (○) 世の中のやかんには重さがある。
30. (○) 「本人」は靈魂的事象で、それは肉体に現われる。
31. (×) 何も悪いことをしなければ身体が重くなることはない。
32. (○) 破滅的な「しんどい」におびやかされて、人は「聖なる気持ち」に逃避する。
33. (○) 人は聖なる気持ちでマウントをする。
34. (×) 聖なる気持ちの人は、精神性の高さを信仰する。
35. (○) 誰かの「本人」に出会い、それを認めるだけでも、身体の重さが消えることはある。
36. (×) 「聖なるわたし」がこころに聖句を唱えてほほえむことを淨という。
37. (×) 「本人」と接続して重さの消えた人は、淨に至り、もはや俗の中にいない。

答え

38. (×) 優れた芸術は、表現力の活動だ。
39. (○) 聖なる「もの」は、肉体労働、特に肉の労働として現れる。
40. (×) しゃにむに肉体労働さえしていれば身体が重くなることはない。
41. (○) 偽りの聖に肉体労働を奉じることでブラックが起こる。
42. (○) 自分が偽りの聖であったら自家製でブラックが起こり続ける。
43. (×) 俗の気持ちのせいで、われわれは娯楽と安樂をむさぼってしまう。
44. (×) 自分の肉体を休ませているとき、誰かの本人と出会う。
45. (○) 偽りの聖に金銭を奉じることでもブラックは起こってしまう。

## 応用問題に進むにあたって

本稿は現象をお伝えするために最小限のことだけを説明してきました。じっさいのことに当てはめて考えてゆくときには応用力が必要です。よってこの先は、本稿中で出てきたことば以外のことばもあなた自身で考えて使ってみてください。

これは学校の試験ではありません。大事なことは、単に暗記することや、正解して点数を取った気になることではありません。大事なことは、あなたが直接、正しい知識と自分の学門を手にすることなのです。自分の冒険をするように進んでください。

【応用問題1. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

問題

もの 心 俗 確固 追いやられる 情動 推定 際限なく 性的欲求不満 自我 本人  
今 決意 世の中 周辺 触れられない 見つけ 定義し 追憶 元型 むしばむ 魂  
はげます 分類し

自我は本人ではないという。そのことについては、なんとなくわかるというか、「わかる」「そういう気はしていた」と言いたくなる。けれどもじっさいの困難は、そのわかる・気がするといったことの機能が（　）だということだ。しかもその機能は、わたしの中ではなく（　）にあるのだという。つまりわたしの“納得気分”じたいが（　）的だというのだ。であればその本人というものは（　）するぐらいしかできない。むしろそのほうが、本稿の言うところの、俗は聖に（　）という説に合致する。いつかその本人というものを（　）、出会うことがあるのだろうか。

ユングの唱えた周辺的無意識・（　）説というだけでも一般には難解な理論だと言われているのに、本稿の言うところでは（　）もそのひとつにすぎないという。しかしたしかに、それが単なるイメージではなく（　）が際限なく湧き出す源泉を持っているものだと言うのであれば、たしかにわれわれの（　）はそれだけで（　）情動を湧きださせる。しかもこれは（　）のエネルギーではなく（　）のエネルギーなのだから、この仕組みはむしろ、われわれが情動を生きているのではなく、情動がわれわれを（　）という仕組みではないか。どのようにわれわれはこの仕組みから守られるだろうか？　われわれは（　）を生きるしかないのに。むしろ、であるからこそ、（　）たる（　）で挙動しなくてはならないということか。たしかにそれならばわれわれはこの情動と世の中の仕組みから守られ、（　）の自己実現に向かってゆけるだろう。

【応用問題2. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

問題

命 肺 世の中 理性 本人 邪念 ヒステリー 精神 重さ 流行 呼吸 自我 「も  
の」

本稿には書き切れなかったことだが、じつは「もの」は呼吸をしている。息をしている。「もの」が呼吸しているということは「( )」も呼吸している。それで( )が消える。呼吸という「もの」には( )がないから。

かつてクリスマスという「もの」が( )していた。お正月という「もの」が( )していた。高校も大学も、青春も恋あいも、先輩も後輩も、先生も弟子も、そういう「もの」じたいが( )していた。

そんな、「概念」でしかないものが呼吸はしないって？ そりやあ、( )ではそう思える。

生きものじゃないんだから呼吸はしないって？ そりやあ、( )はそう区分する。

けれども、それは生きものではなくても、息をしている、永遠の( )を持った「もの」だ。

あなたの( )はあなたの( )が呼吸しているということを否定したがるね。それも一種の( )の気配を帯びて。

【応用問題3. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

問題

運動 気持ち 俗たる気持ち 狂氣 突破 マウント 本人 嘆息 聖なる気持ち ブラ  
ック 肉 十字架 自我 重く 肉体労働 活動 解放 聖人 励まし 武器 軽く こ  
ころ 愛

「しんどいしんどいしんどいしんどい」という言い方に、現実味と説得力がある。これに気づいたらオーナーだ、と思えるほど、その「しんどい×4」はわれわれの足許にしおびよっている。

「( )」に接続があればこのことは解決する。そのときは巨きな歓喜と晴れやかな世界が待っているだろう。けれどもそのことに先立っては、( )を取り下げなくてはならない。そのことじたいがむつかしい。なぜなら、それを取り下げた瞬間、われわれはすでに足許まではせ参じていた「しんどいしんどいしんどいしんどい」に食い込まれてしまうからだ。そのことに予感される、果てしない闇、恐怖、パニック、( )。これに食い殺されないために、われわれはふだん脊髄反射のように、人に( )のこころを向けるようになっている。

われわれの身体は前もって( )なのだ。その重さでつぶされそうになる。その恐怖は( )に近い。( )があれば動けそうな気がする、それは一時的にはそのとおり。だがそれは( )ではなく( )なのだから、身体は( )なっていくだろう。快活さのため、適度な( )をすることはできる。けれどもそれは( )ではない。たしかにわれわれの様相は近年、じつに( )をサボらせているという姿を示している。元気そうに見えるアイドルも、具体的の運動やその( )をしているだけであって、肉体労働が( )されているわけじゃない。

## あなたの学門へのアドバイス

何が正解なのかではなく、あなたの発想じたいが切り替わることが必要です。そのためにあなたは勉強し、あなた自身で考え、あなた自身で答えてみて、あなた自身で言ってみようとするのです。

何が正解なのかではなく、問題文が「何を言おうとしているか」を読み取り、それをあなたのものにしてください。必要なことは、あなたが正解を知っていることではなく、あなたが「この問題をよく知っている」ということです。あなたが生きているうちに毎日ぶちあたるのは「不正解」ではなく「問題」でしょう？ あなたはそのぶちあたる「問題」に対抗する学門を得ようとしているのですから。

## 【応用問題1. 解答】

答え

もの 心 俗 確固 追いやられる 情動 推定 際限なく 性的欲求不満 自我 本人  
今 決意 世の中 周辺 触れられない 見つけ 定義し 追憶 元型 むしばむ 魂  
はげます 分類し

自我は本人ではないという。そのことについては、なんとなくわかるというか、「わかる」「そういう気はしていた」と言いたくなる。けれどもじっさいの困難は、そのわかる・気がするといったことの機能が（自我）だということだ。しかもその機能は、わたしの中ではなく（世の中）にあるのだという。つまりわたしの“納得気分”じたいが（周辺）的だというのだ。であればその本人というものは（推定）するぐらいしかできない。むしろそのほうが、本稿の言うところの、俗は聖に（触れられない）という説に合致する。いつかその本人というものを（見つけ）、出会うことがあるのだろうか。

ユングの唱えた周辺的無意識・（元型）説というだけでも一般には難解な理論だと言われているのに、本稿の言うところでは（自我）もそのひとつにすぎないという。しかしたしかに、それが単なるイメージではなく（情動）が際限なく湧き出す源泉を持っているものだと言うのであれば、たしかにわれわれの（自我）はそれだけで（際限なく）情動を湧きださせる。しかもこれは（本人）のエネルギーではなく（世の中）のエネルギーなのだから、この仕組みはむしろ、われわれが情動を生きているのではなく、情動がわれわれを（むしばむ）という仕組みではないか。どのようにわれわれはこの仕組みから守られるだろうか？ われわれは（俗）を生きるしかないのに。むしろ、であるからこそ、（もの）たる（本人）で挙動しなくてはならないということか。たしかにそれならばわれわれはこの情動と世の中の仕組みから守られ、（魂）の自己実現に向かってゆけるだろう。

## 【応用問題2. 解答】

答え

命 肺 世の中 理性 本人 邪念 ヒステリー 精神 重さ 流行 呼吸 自我 「もの」

本稿には書き切れなかったことだが、じつは「もの」は呼吸をしている。息をしている。「もの」が呼吸しているということは「(本人)」も呼吸している。それで(重さ)が消える。呼吸という「もの」には(重さ)がないから。

かつてクリスマスという「もの」が(呼吸)していた。お正月という「もの」が(呼吸)していた。高校も大学も、青春も恋あいも、先輩も後輩も、先生も弟子も、そういう「もの」じたいが(呼吸)していた。

そんな、「概念」でしかないものが呼吸はしないって？ そりゃあ、(世の中)ではそう思える。

生きものじゃないんだから呼吸はしないって？ そりゃあ、(自我)はそう区分する。

けれども、それは生きものではなくても、息をしている、永遠の(命)を持った「もの」だ。

あなたの(自我)はあなたの(本人)が呼吸しているということを否定したがるね。それも一種の(ヒステリー)の気配を帶びて。

## 【応用問題3. 解答】

答え

運動 気持ち 俗たる気持ち 狂気 突破 マウント 本人 嘆息 聖なる気持ち ブラック 肉 十字架 自我 重く 肉体労働 活動 解放 聖人 励まし 武器 軽く こころ 愛

「しんどいしんどいしんどいしんどい」という言い方に、現実味と説得力がある。これに気づいたらオワリだ、と思えるほど、その「しんどい×4」はわれわれの足許にしのびよっている。

「(本人)」に接続があればこのことは解決する。そのときは巨きな歓喜と晴れやかな世界が待っているだろう。けれどもそのことに先立っては、(聖なる気持ち)を取り下げなくてはならない。そのことじたいがむつかしい。なぜなら、それを取り下げた瞬間、われわれはすでに足許まではせ参じていた「しんどいしんどいしんどいしんどい」に食い込まれてしまうからだ。そのことに予感される、果てしない闇、恐怖、パニック、(ブラック)。これに食い殺されないために、われわれはふだん脊髄反射のように、人に(マウント)のこころを向けるようになっている。

われわれの身体は前もって(十字架)なのだ。その重さでつぶされそうになる。その恐怖は(狂気)に近い。(気持ち)があれば動けそうな気がする、それは一時的にはそのとおり。だがそれは(本人)ではなく(自我)なのだから、身体は(重く)なっていくだろう。快活さのため、適度な(運動)をすることはできる。けれどもそれは(肉体労働)ではない。たしかにわれわれの様相は近年、じつに(肉)をサボらせているという姿を示している。元気そうに見えるアイドルも、具体的な運動やその(活動)をしているだけであって、肉体労働が(解放)されているわけじゃない。

## 問題

【応用問題4. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

元気 キャラ 技術 良 ファン心理 肉体労働 肉 本人 もの しない 具体の運動  
引きこもり わかり 魅力的 陳腐 世の中 聖なる気持ち 聖なる「もの」 センス 舞  
台 批評し 存在感 感動体験 気

芸術が（ ）というのはまったく意外なことだ。けれどもたしかに言われてみれば、優れた芸術には（ ）声や（ ）筆の迫る体験が伴う。そして芸術というのは、そこに現われているものが世の中のイメージのそれではなく「（ ）」のそれであることが問われる。優れたシンガーの歌声は、それが上手とか美声とかいうことではなく（ ）の声だというのが聞こえてくるのだ。たとえばジェームス・ブラウンのようなソウルシンガーの声と姿は、たしかに（ ）がサボっていない、（ ）と呼びたくなるような迫力を具えていて、ほかならぬ（ ）の声だということが迫り来て体験される。そこにはたしかに音楽や歌という「（ ）」、またジェームス・ブラウン本人という「（ ）」があり、われわれはそれを批評の手を差し込もうとは（ ）。

青春の叫びだって、（ ）ではなく（ ）であるべきだ。けれども「世の中」が強くなると、そのイメージと情動は強固な（ ）を生み出す。それはわれわれの自我にとって（ ）やすいもので、安直には（ ）なものではあるけれども、それはやはり（ ）のしろものであって、本人の現れる芸術ではないのだ。清楚なキャラ・イメージと情動の演出で客を惹きつけるアイドルたちは、まさか本当に（ ）としてアイドル展開しているわけではなく、その清楚なキャラ・イメージと情動の演出で客を（ ）に誘導して盛り上げているのだ。その盛り上がりで客側はよく（ ）をもらったと言う。

## 問題

【応用問題5. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

差別 アニマ アニムス ピエロ 憧れ 自我 情動 老人 老賢者 ユング フロイト  
イメージ トリックスター こころ 世代 世の中

SNS上で、「こういうハラスメントを受けた」と表現するショートマンガなどがバズっている。しかし、「ことばで言えばいいじゃん」という気もする。けれどもことばで説明しても（ ）には広まらない。（ ）に広まらないということは、（ ）にも刺さらないということだ。

「元型」の性質に引き当てられるイメージには、それじたいに（ ）が具わっている。「（ ）が智慧らしいことを言った」というイメージは（ ）元型に引き当てられるし、「こういう（ ）を受けました」ということは自我元型に引き当てられる。異性的な特徴を強化してイメージ化すれば（ ）・（ ）元型に引き当てられる。美少女が「性的」なダンスをショート動画で示すのも、同じ元型からの（ ）が（ ）に刺さり、（ ）に広まるということ、そのことをわれわれは「バズる」と呼んでいるのだ。

## 問題

【応用問題6. 以下の語群を用いてカッコ内を正しく埋めなさい。  
ただし同じ語句を何度も使用してよい。】

自我 重さ 本人 聖なる「もの」 聖なる「気持ち」 マウント 聖 俗 獲得していく  
失っていく インフレーション 情動 自由に 動けなく ブラック 聖なる「わたし」  
力 命 嘆息 狂気 活動 具体の運動 肉体労働 金銭 せねばならない させてもら  
える よろこび 義務

例外的に、Aさんは「本人」に接続を得ている人だった。BさんはそのAさんに出会い、身体の（ ）が消えるということを体験したが、Bさんはその詳しい仕組みなど知る由もない。

Bさんの気分は上昇し、必然、Bさんの（ ）は上昇していく。Bさんが出会ったのはAさん「本人」、それは（ ）の領域だが、それをもってBさんがBさん（ ）に接続を得たとは言い難い。よって、Bさんが上昇する先に握りしめるのは（ ）だ。それでBさんはAさんと同じ位置にいるものと思い込むが、このことはBさんから他者への（ ）を起こすのみ。

Bさんの（ ）は（ ）を侵食していく。よってBさんはむしろ「本人」を（ ）のだが、当人の気分は上昇しているのでそのことには気づかない。そして、高まった自我が領域を突破しようとするとき、その自我はむしろ（ ）を起こす。自分は智慧を具え、物語の引き金を持つ者であり、永遠の異性性を持ち、母なる容量と支配力を持ち、影までも支配して、役割になりきることもでき、それでいてどこまでも純粋な子供のような……そうしたすべての要素を持ちえた者のように、その（ ）を高める。(いっぽうでAさんはというと、Aさんの（ ）は何ら昂じてはいないのだ)。Bさんは、Aさん「本人」の救済的作用のもとにあるときは、まるで無敵になったような万能感に浸れるが、Aさん「本人」からの直接の作用から切り離されると、Bさんは一気に（ ）なる。無敵の万能感は記憶に刻まれて、そのまま（ ）になっているが、その肉は一気に（ ）化していく。原理どおり、（ ）は動かないのがふさわしい、ということが現れてきて、その肉体はますます（ ）を失っていく。

山高ければ谷深し、もしBさんが自分の実際の位置を受容するなら、Bさんは有頂天から（ ）の底へ叩き落とされることになる。この落下は恐怖であり、受容できず、Bさんの心境はパニックとなり、そのパニックは（ ）じみる。

ここからBさんが最も恐れることはむしろ、「Aさんによって谷に突き落とされること」になる。Bさんはそのことに全力で抵抗する。もちろんその抵抗のパワーは（ ）であり（ ）だ。このことは（ ）を伴うので、じっさいにAさんに対し暴力的に暴れることも起こるし、さらにはAさんに対して攻撃することを己の（ ）にするということさえ起こってくる。

Bさんがこのようなクラッシュをまぬがれ、Aさんとの出会いを実りあるものとするのであれば、BさんからAさんに（ ）が奉じられるのがよい。あるいは、じゅうぶんな慎重さを踏まえてであれば、（ ）を奉じることもその大きな代用になることがある。このBさんからの奉じることが完全に正しくBさんに体験される場合、Bさんはそのことについて、「こんなことを（ ）んですか」という、一般には理解しがたい文脈を発する。トルストイは著書「光あるうちに光の中を歩め」の中で、登場人物を通じて「労働は（ ）じゃからな」と言った。

## 【応用問題4. 解答】

答え

元気 キャラ 技術 良 ファン心理 肉体労働 肉 本人 もの しない 具体の運動  
引きこもり わかり 魅力的 陳腐 世の中 聖なる気持ち 聖なる「もの」 センス 舞  
台 批評し 存在感 感動体験 気

芸術が（肉体労働）というのはまったく意外なことだ。けれどもたしかに言われてみれば、優れた芸術には（肉）声や（肉）筆の迫る体験が伴う。そして芸術というのは、そこに現われているものが世の中のイメージのそれではなく「（本人）」のそれであることが問われる。優れたシンガーの歌声は、それが上手とか美声とかいうことではなく（本人）の声だというのが聞こえてくるのだ。たとえばジェームス・ブラウンのようなソウルシンガーの声と姿は、たしかに（肉）がサボっていない、（肉体労働）と呼びたくなるような迫力を具えていて、ほかならぬ（本人）の声だということが迫り来て体験される。そこにはたしかに音楽や歌という「（もの）」、またジェームス・ブラウン本人という「（もの）」があり、われわれはそれを批評の手を差し込もうとは（しない）。

青春の叫びだって、（具体の運動）ではなく（肉体労働）であるべきだ。けれども「世の中」が強くなると、そのイメージと情動は強固な（キャラ）を生み出す。それはわれわれの自我にとって（わかり）やすいもので、安直には（魅力的）なものではあるけれども、それはやはり（世の中）のしろものであって、本人の現れる芸術ではないのだ。清楚なキャラ・イメージと情動の演出で客を惹きつけるアイドルたちは、まさか本当に（聖なる「もの」）としてアイドル展開しているわけではなく、その清楚なキャラ・イメージと情動の演出で客を（聖なる気持ち）に誘導して盛り上げているのだ。その盛り上がりで客側はよく（元気）をもらったと言う。

## 【応用問題5. 解答】

答え

差別 アニマ アニムス ピエロ 憧れ 自我 情動 老人 老賢者 ユング フロイト  
イメージ トリックスター こころ 世代 世の中

SNS上で、「こういうハラスメントを受けた」と表現するショートマンガなどがバズっている。しかしふと、「ことばで言えばいいじゃん」という気もする。けれどもことばで説明しても（世の中）には広まらない。（世の中）に広まらないということは、（自我）にも刺さらないということだ。

「元型」の性質に引き当てられるイメージには、それじたいに（情動）が具わっている。「（老人）が智慧らしいことを言った」というイメージは（老賢者）元型に引き当てられるし、「こういう（差別）を受けました」ということは自我元型に引き当てられる。異性的な特徴を強化してイメージ化すれば（アニマ）・（アニムス）元型に引き当てられる。美少女が「性的」なダンスをショート動画で示すのも、同じ元型からの（情動）が（自我）に刺さり、（世の中）に広まるということ、そのことをわれわれは「バズる」と呼んでいるのだ。

## 【応用問題6. 解答】

答え

自我 重さ 本人 聖なる「もの」 聖なる「気持ち」 マウント 聖 俗 獲得していく  
失っていく インフレーション 情動 自由に 動けなく ブラック 聖なる「わたし」  
力 命 嘆息 狂気 活動 具体の運動 肉体労働 金銭 せねばならない させてもらえる  
よろこび 義務

例外的に、Aさんは「本人」に接続を得ている人だった。BさんはそのAさんに出会い、身体の（重さ）が消えるということを体験したが、Bさんはその詳しい仕組みなど知る由もない。

Bさんの気分は上昇し、必然、Bさんの（自我）は上昇していく。Bさんが出会ったのはAさん「本人」、それは（聖なる「もの」）の領域だが、それをもってBさんがBさん（本人）に接続を得たとは言い難い。よって、Bさんが上昇する先に握りしめるのは（聖なる「気持ち」）だ。それでBさんはAさんと同じ位置にいるものと思い込むが、このことはBさんから他者への（マウント）を起こすのみ。

Bさんの（俗）は（聖）を侵食していく。よってBさんはむしろ「本人」を（失っていく）のだが、当人の気分は上昇しているのでそのことには気づかない。そして、高まった自我が領域を突破しようとするとき、その自我はむしろ（インフレーション）を起こす。自分は智慧を具え、物語の引き金を持つ者であり、永遠の異性性を持ち、母なる容量と支配力を持ち、影までも支配して、役割になりきることもでき、それでいてどこまでも純粋な子供のような……そうしたすべての要素を持ちえた者のように、その（情動）を高める。（いっぽうでAさんはというと、Aさんの（情動）は何ら昂じてはいないのだ）。Bさんは、Aさん「本人」の救済的作用のもとにあるときは、まるで無敵になったような万能感に浸れるが、Aさん「本人」からの直接の作用から切り離されると、Bさんは一気に（動けなく）なる。無敵の万能感は記憶に刻まれて、そのまま（聖なる「気持ち」）になっているが、その肉は一気に（ブラック）化していく。原理どおり、（聖なる「わたし」）は動かないのがふさわしい、ということが現れてきて、その肉体はますます（命）を失っていく。

山高ければ谷深し、もしBさんが自分の実際の位置を受容するなら、Bさんは有頂天から（重さ）の底へ叩き落とされることになる。この落下は恐怖であり、受容できず、Bさんの心境はパニックとなり、そのパニックは（狂気）じみる。

ここからBさんが最も恐れることはむしろ、「Aさんによって谷に突き落とされること」になる。Bさんはそのことに全力で抵抗する。もちろんその抵抗のパワーは（自我）であり（情動）だ。このことは（具体的の運動）を伴うので、じっさいにAさんに対し暴力的に暴れることも起こるし、さらにはAさんに対して攻撃することを己の（活動）にするということさえ起こってくる。

Bさんがこのようなクラッシュをまぬがれ、Aさんとの出会いを実りあるものとするのであれば、BさんからAさんに（肉体労働）が奉じられるのがよい。あるいは、じゅうぶんな慎重さを踏まえてであれば、（金銭）を奉じることもその大きな代用になることがある。このBさんからの奉じることが完全に正しくBさんに体験される場合、Bさんはそのことについて、「こんなことを（させてもらえる）んですか」という、一般には理解しがたい文脈を発する。トルストイは著書「光あるうちに光の中を歩め」の中で、登場人物を通じて「労働は（よろこび）じゃからな」と言った。

## 【応用問題7. やりとりとして正しくなるものをa～dから一つ選べ】

(※ただしこのようなやりとりが無神経になされてよいというわけではない)

問題

1. 「もっと自然体で、『本人』を出してくれないと、こっちは面白くないんですよね」

- a :「そのとおり。いつまでもキャラやネタを見せられてもしょうがない」
- b :「君の主張はわかるけれど、君は世の中にいるので本人を受け取る誠実さがない」
- c :「自然体になれないところも含めて『本人』だと捉えるべきだ」
- d :「周辺的なことになってしまっているということに気づかなくてはならない」

2. 「いまの世の中は情動ばっかりになってしまって、『もの』や本人がないんですよね」

- a :「周辺的な世の中になってしまったから、本人的な世の中に戻さないといけない」
- b :「情動が俗なものと知って、情動を控えるようにしなければ、ものは復旧しない」
- c :「もの・本人をこそ大切にする世の中、という単純な発想に立ち返るべきだ」
- d :「世の中で本人やものに出会おうとする発想は根本的に誤っている」

3. 「世の中が強くなってしまって、だいたい本人を問うても、返ってこないんですよね」

- a :「知らず識らずマウントが生じることに留意して、聖なる気持ちを警戒すべきだ」
- b :「相手は自我が周辺的ということを知らないから、その外側にアプローチすべき」
- c :「本当の自分で答えるという、勇気を持たなくてはいけない」
- d :「世の中を弱めていく活動から始めていく必要がある」

4. 「もっと深い話ができる意味ないですよね」

- a :「そのためにこそ本人が必要だ」
- b :「心理的に深い話は周辺的でしかない」
- c :「俗にいる人は浅い話しか捉えられないからね」
- d :「本人がない人はキャラでしかないからね」

5. 「気持ちが弱い人って、自分の殻を破れないですよね」

- a :「殻を破って本人に会えるというわけでもない」
- b :「自分の殻が破れないのは環境のせいだ」
- c :「強い気持ちで聖なるものにアプローチすべきだ」
- d :「気持ちが強い人はすでに世の中を飛び越えている」

6. 「本人という物体がやれってことですよね？」

- a :「そう、気持ちの問題じゃなくて物体の現実が問題」
- b :「物体だけが確かなもので、気持ちは概念にすぎないからね」
- c :「われわれは肉体をもった物体だからね」
- d :「クリスマスもお正月も浦島太郎も物体ではないよ」

問題

7. 「わたしは俗の者なので、汚い声とことばを出したくなるんですよ」

- a :「それはそのとおりだが、下品をしてよいということにはならない」
- b :「俗らしく、汚い声とことばを振る舞ってこそ謙虚と言いうる」
- c :「触れられない聖なる『もの』をよろこび、その許（もと）にあってこそその俗だ」
- d :「それはいじけているだけだ、なるべく清らかな声とことばを心掛けるべきだ」

8. 「『本人』なんぞに接続がなくても、生きていくことはできる」

- a :「聖俗を濫（みだ）るな」
- b :「身体が重くなる」
- c :「『本人』は霊的な問題だ」
- d :「自分らしく生きるべきだ」

9. 「とにかく肉体労働していればいいんですね」

- a :「肉体労働を拒絶するからブラックになる」
- b :「肉体労働を奉じる先を誤るとブラックになる」
- c :「よろこんで肉体労働することが大事だ」
- d :「献身は聖なることだからね」

10. 「肉体に重さはないんですね」

- a :「肉体の重さが消える」
- b :「物理的な重さはある」
- c :「重さが気にならなくなる」
- d :「肉体労働を優先しろ」

11. 「聖なるものがわかっていない人は不浄だ」

- a :「聖にいる人が不浄だ」
- b :「俗にいる人が不浄だ」
- c :「聖で挙動する人が不浄だ」
- d :「俗で挙動する人が不浄だ」

12. 「報酬を無しにしないと身体が重くなりますね」

- a :「報酬を捨てれば聖だ」
- b :「俗なのだから報酬を得てよい」
- c :「本人は報酬を得てよい」
- d :「身体が軽くなるというのが報酬だ」

## 【応用問題7. 解答】

(※ただしこのようなやりとりが無神経になされてよいというわけではない)

1. 「もっと自然体で、『本人』を出してくれないと、こっちは面白くないんですよね」

b :「君の主張はわかるけれど、君は世の中にいるので本人を受け取る誠実さがない」

[解説] 話ではなく主張をしているということは、この人は自我であって世の中にいます。

自我が他人の「本人」を要求する資格はありません。

2. 「いまの世の中は情動ばっかりになってしまって、『もの』や本人がないんですよね」

d :「世の中で本人やものに出会おうとする発想は根本的に誤っている」

[解説] 「もの」や「本人」が存在するのは世の中の外側です。

周辺的でしかない「世の中」で「もの」や「本人」には出会えません。

3. 「世の中が強くなってしまって、だいたい本人を問うても、返ってこないんですよね」

a :「知らず識らずマウントが生じることに留意して、聖なる気持ちを警戒すべきだ」

[解説] 自分も「本人」を示せません。そのことに作品的欲求不満がありヒステリーが起こります。

そこで自分を守り、正当化するために、他者に対するマウントが自動発生します。

4. 「もっと深い話ができる意味ないですよね」

b :「心理的に深い話は周辺的でしかない」

[解説] 心理は自我を含む「世の中」の現象ですから、周辺的であって本人の事象ではありません。

深い話といって、深くまで「わかり」が得られるとしても、それは「わかり」なので自我です。

5. 「気持ちが弱い人って、自分の殻を破れないですよね」

a :「殻を破って本人に会えるというわけでもない」

[解説] 気持ちの強い人は、強い「世の中」にいますから、閉じ込められて「本人」とは切斷されます。

自我の殻が破れると他の元型と融着してしまい自我インフレーションを起こします。

6. 「本人という物体がやれってことですよね？」

d :「クリスマスもお正月も浦島太郎も物体ではないよ」

[解説] 物体は比較することができ、わかりやすく、そのわかりやすさを得ているのは自我です。

クリスマスもお正月も「もの」であって物体ではありません。

7. 「わたしは俗の者なので、汚い声とことばを出したくなるんですよ」

c :「触れられない聖なる『もの』をよろこび、その許（もと）にあってこそその俗だ」

[解説] 俗たるわれわれと、そうでない聖なる「もの」があるのです。

それなのに俗たる自分「だけ」が挙動するというのは傲（おご）りです。

8. 「『本人』なんぞに接続がなくとも、生きていくことはできる」

b :「身体が重くなる」

[解説] 生きていくことはできるかもしれません、「まとも」に生きていくことは難しくなります。

「自我だけで結構！」と言い張ろうとしても、身体が重くなるという事実につぶされていきます。

9. 「とにかく肉体労働していればいいんですね」

b :「肉体労働を奉じる先を誤るとブラックになる」

[解説] あくまで肉体労働を「もの」「本人」に奉じることで重さが消えていきます。

偽物に肉体労働を奉じるとその肉はブラック化していきます。

10. 「肉体に重さはないんですね」

a :「肉体の重さが消える」

[解説] 「もの」「本人」には重さがないので、「本人」から挙動すると肉体の重さが「消える」のです。

自我が認識する具体から重さが消えることはありません。

11. 「聖なるものがわかっていない人は不浄だ」

d :「俗で挙動する人が不浄だ」

[解説] われわれは俗にいます。俗にいて俗で挙動することは一般的ですが不浄です。

俗にいるのに聖で挙動することは一般的でなく浄と体験されます。

12. 「報酬を無しにしないと身体が重くなりますね」

c :「本人は報酬を得てよい」

[解説] 報酬を「聖」「本人」が受け取る場合は、本人という「もの」が栄えて重さが消えます。

報酬を「俗」「自我」が受け取る場合は、自我と気持ちが強化されて重さが増します。

【応用問題8. 以下の問題を論ぜよ】

1. AさんはBさんと共に歩き、肉体労働によってBさんの「本人」に出会った。けれどもAさんはBさんの本人に反発し、やがてBさんにマウントを取ろうとする発作のような烈しい挙動を起こして交友関係を断裂させた。どのような理由が考えられるか。またAさんはどのような力でBさんをねじ伏せようとするか。
2. 正しい聖俗によって魂に「命」がもたらされる。とはいえ、俗の気持ちを肯定しながら、聖の本人で挙動するということは、不可解に思われ、またその実行は困難に思える。このことはじっさいにはどのような挙動になるか。

## 【応用問題8. 解答例】

1. AさんはBさんと共に歩き、肉体労働によってBさんの「本人」に出会った。けれどもAさんはBさんの本人に反発し、やがてBさんにマウントを取ろうとする発作のような烈しい挙動を起こして交友関係を断裂させた。どのような理由が考えられるか。またAさんはどのような力でBさんをねじ伏せようとするか。

AにとってB「本人」との出会いは、一時的には驚きとよろこびが勝ったにせよ、継続的にはAにとっての自尊心侵害に作用した。この自尊心はAがこれまで「聖なる気持ち」で自我を上昇させインフレーションも含んだ肥大傾向の自尊心だった。Aはこれまで聖なる気持ち・聖なるわたしで他者に対してはマウントを取ることで、その自尊心の確保と「しんどい」の回避をしてきた。Aは引き続きその様式を確保していたかったし、その様式を解体することはできなかったから、Aの本音としては、B「本人」の存在は認めるにせよ、あくまでそれに対してマウント上位を取っての交友関係を継続したかった。ただしこのことは、俗による聖の侵害であるから、魂のヒステリーが起き、Aのその挙動は激烈で逸脱的になる。また、聖なる気持ちはAを「具体的の運動」にも押し出すので、AはBに激烈さのまま暴力をふるう可能性がある。そしてAがBをねじ伏せようとする力は、「世の中」を笠に着た、激しい気持ち・情動の力だ。Bは「本人」で挙動しているため、Aのような激烈な情動を発するトリガーを持っていない。そのことを見越して、Aは世の中的な情動爆発でBに高いストレスをかけ、ねじ伏せてマウント上位を確保し、Aの望むような交友関係を成立させようとした。またそのことはAにとってそのとき有意義な「活動」のようにも体験されたと考えられる。

2. 正しい聖俗によって魂に「命」がもたらされる。とはいえる、俗の気持ちを肯定しながら、聖の本人で挙動するということは、不可解に思われ、またその実行は困難に思える。このことはじっさいにはどのような挙動になるか。

主題をXとし、挙動をYとする。たとえば主題Xが音楽のとき、その演奏者の挙動Yも「音楽的」になるはずだが、この挙動Yが主題Xに「手を出す」ことで混乱が起き、命のない演奏が呈され、音楽という「もの」はログアウトしてしまう。挙動Yは俗たる「気持ち」だが、主題Xは聖なる「もの」だ。このとき正しい演奏者の挙動Yは、むしろ主題Xに「触れない」ほうがよいわけだから、思いがけずYの演奏は「音楽に触れていない」ほうがよいということになる。この真逆のような思いがけなさは、われわれの芸術環境でじっさい「命」とも言えるような魂の体験を得る・目撃することはとても少ないという事実にむしろ合致する。演奏者あるいは演奏のマスターは、「本人」として主題Xと共にいるが、それはただ共にあるだけで、Yをいかように挙動させたとしても、それが（Yの重さが）Xに触れる事はない。そこに本当に現れるのは、主題Xそれじたいではなく、「聖なる主題Xによっていかようにも挙動（肉体労働）させられている俗たるY」なのだ。われわれはあくまで俗を見て、俗を聞いている。その俗に聖の支配が侵入してきている（俗の肉体労働なのに重さが消えている）のを認めたとき、われわれは魂に命を得ている。

かつて、いろいろな「(　　)」があったんだって。おれはそれをさまざま見てきた。それはちょっと、おれだけ特殊なレベルではあったのかもしれない。じつはそれぐらい、おれは強烈に「(　　)」だったのかもしれない。それにしても、かつてはいまとは比べられないほどいろんな「もの」があった。神戸は神戸だったし、東京は東京だった。渋谷は渋谷で、原宿は原宿で、高円寺は高円寺だった、吉祥寺は吉祥寺だった。バラナシはバラナシだった、いまってバラナシはどうなっているんだろうな。銀座は銀座だった。

若いころのおれは、まったくダメな人格をしていて、正直なところ女に救われてきた。単純に言って、女のやさしさに救われてきた。もちろん女だけじゃない、先生の叡智にも救われてきたし、先輩のやさしさにも救われてきた。

でも、いま同じことを真似したってダメなんだ。表面上、同じようなことはできるかもしれないけれど、「もの」がないんだから。青春たって、青春という「もの」がないんだから、青春っぽい(　　)と(　　)を真似したって、同じものにはならないし、同じことにはならない。おれの言っている青春の話はわかると思う。でも、(　　)ということはダメなんだ。だって、おれは当時わかっていなかったんだから。なにもかもわかっていないかった。本当に、なにもかもわかっていないかった。ただ、いろんな「もの」がひしめいていた。

なぜおれは、幼いころから、どこでもかしこでもあんなにかわいがってもらえたのだろう。おれはまだ小学生にもならないころ、祖母と母親が買い物にいくのによく難波に連れていかれた。しかし子供にとって高島屋になんか興味はないので、戎橋筋の、当時のゲームセンターに放り込まれていた。そこには不良気味のお兄ちゃんとお姉ちゃんがいて、なぜかよくわからないが、いつもどこかのお姉ちゃんがおれをその場でかわいがってくれた。お兄ちゃんがおれをからかうと、「かわいそうでしょう」といつてお姉ちゃんが寄り添ってくれるのだ。これマジの話だよ。で、おれが百円玉を入れて「ラリーX」をやると、「こいつ上手いな！」ということで、お兄ちゃんらもおれのことを尊敬するのだった。

それから二十年近く過ぎて、おれがエニックスの集団面接を受けていたとき、面接官の携帯電話の着信音が鳴った。おれは反射的に「敵の音楽じゃないですか」と尖って笑った。エニックスの社員は「こちら、敵じゃないよ」と言って諭した。でも通じたのだ。その着信音は「ラリーX」のBGMだったから（ラリーXはナムコのゲームだ）。三つ子の魂と言えばいいのか、すげえことだ、二十年近く過ぎて幼児の記憶なのに聞いた瞬間「ラリーXだ」と反応できるなんてな。

エニックスの三次面接の日程がよその日程とかぶってしまい、エニックスには入社できなかつたけれど、あのころ、就職活動の帰り道に観た夜の桜のことをいまも鮮烈に覚えている。

そんなことを言いだしたら、おれの頭の中は、鮮烈に覚えているものばっかりだけどな。頭の中か、魂の中かわからないが。

万事、そういう「もの」だったのだ。ゲームセンターにいる不良のお姉ちゃんはやさしい「(　　)」だったのだ。イメージがあったのではなく「もの」があった。誰がやさしくしてくれたのか？ 誰かは知らない、けれど確実なことは、お姉ちゃん「(　　)」がやさしくてくれたということだ。おれが言っているのは、そのお姉ちゃんがやさしいと分類できるということではなく、やさしい「もの」に直接出会ったという話だ。なぜ彼女がやさしかったかというと、何かの主義があったからではなく、お姉ちゃん「本人」だったからだ。そのころ「(　　)」はどうだったか？ 世の中は抜け穴だらけでザルだ

ったな。でもそんなこと知らない。おれはドラえもんの声優が大山のぶ代さんだということも知らなかった。ドラえもんの声はドラえもんだと思っていた。いまでもおれは、大山のぶ代さんの中にドラえもんの声が入っていただけ、という自説だけを信じている。

おれはやさしいお姉ちゃんの（　　）に（　　）を湧かせているのじゃない。わたしはそのお姉さんにお会ったことがあり、わたしの魂はそのお姉さんにも慈しまれ、育てられてきたという（　　）をしている。

とつぜん話は変わるが、体罰はダメだ。体罰がダメというより、体罰は「もう」ダメだ。教師が男子生徒のケツをバチコーンとやるのは、本来そういう「もの」だからどうでもいいというか、それでかまわないし、罰というよりコミュニケーションの一形態だろうが、いまはもう「もの」がないからダメだ。教師という「もの」もないし、生徒という「もの」もない。大人という「もの」もないし子供という「もの」もないのだ。教師や生徒という認識と世の中にあるだけだろう。それが悪いと言っているのではない。「もの」がなくなってしまったものはどうしようもない、という、どうしようもないことを言っているだけだ。

体罰がダメとなったら、ナデナデ教育、ノータッチ教育にすればいいのかというと、それもダメだ。つまり残念なことに、どうやったとしても基本的にダメになってしまった。それはしょうがないだろう、教師や生徒、学校といった「（　　）」がなくなってしまったのだから。意識だけ強くしたってしないだけだし被害者を生むだけだ。聖なる「もの」がログアウトしてしまった。その上で、ダメでなくするなんてこと出来るわけがない。そうなると、あとはなんとか無難にして、かつ合目的的に済ませるしかないのだ。「もの」はなくても「（　　）」としては利益と名目が成り立つようになるしかない。そしてそんなことを、できたとしても人の魂はよろこばない。よろこばないけれど、しょうがないのだ、「もの」がログアウトしてしまったのだから。

ゲームセンターのお姉ちゃんと同じく、おれにとっては、名前を思い出すだけで胸が痛くなる、魂が時空をブッ飛んでいくて何かを誓わせる、そういう女性がいる。恋人だったわけじゃない。恋はあったのかもしれないが、そんなことはどうでもいいことだ。当時、おれはなにもわかっておらず、いまも何もわかっていないのだ。ただ、そういう「もの」がある。頼むから聖なるイメージをゴミ箱に捨ててくれ。あのときおれの「（　　）」がいて、いまも胸が張り裂けそうに痛み続けているということは、いまもおれの「本人」がいるのだ。ただそれだけだ。おれの「本人」は一秒も経過していない。おれの「本人」には重さはなく、時間軸も存在していないのだから、おれはずっとそのひとつの「本人」のままだ。

いっぽうで、現代人のわれわれが、本当に（　　）で「好き」「好きではない」を区分し、自我でマッチングアプリを操作し、自我で「恋愛したいなあ」なんて思ったりする、いわば「自我恋愛」と呼ぶしかないものを、大真面目にやっているということをおれは知っている。それについておれは、否定的ではなく、かといって全力で肯定できるわけでもないが、「しょうがない、いろいろやってみるしかないんだから」と思っている。マッチングアプリで八百人の誰かと自我恋愛をしても、のちに名前を思い出すだけで胸が張り裂けそうになる、ということはないだろう。ないだろうけれど「しょうがない」じゃないか。恋あいという「もの」はなくなってしまった。いまあるのは恋愛ということへの「（　　）」と「（　　）」だろう。そんなことはわかっているし、それは「もの」ではないということもわかっているのだ。だからといって、おれはそんなことで意地悪を言う気にはなれない。バカにする気にもなれない。なにかわざかでも、おれから足しになれるのではないか、おれの出来ることはないかとばかり考え

ている。だからこんなものを書いている。

おれの言っている、「もの」とか「本人」とかいうのはどういうものか。直接知りたければ、簡単だ、おれの横に来て、おれと同じことを話してみればいい。もっと簡単な内容でもいい。「浦島太郎」の話でもいい。そしてその話しているところを録画してみればいい。するとなぜか、あなたのイメージと情動とは裏腹に、なぜかおれの「( )」だけがそこにはいて、あなたの「( )」はそこにいないだろう。映像の中で二人が同列に並んでいるはずなのだが、なぜかあなたの目さえ、おれが話していることばかりを覗てしまい、あなたがそこに立って何かを言っていることには見る気が失せるのだ。おれはこの残酷な表示であなたをいじめて愉しむ趣味はない。ただ、あなたがもしまだ若く、ごまかしたまま老人になって行方不明の魂になるのはいやなのだということであれば、じっさいそのことはさっさと実験して確かめてしまってもいいと思うのだ。ただ、これまでの経験から言えることは、その実験結果の明視は、当人が予想しているよりも「キツい」ストレスを受けることになるけれど。

おれはこんな話をしよう、「古池や、かわづ飛び込む、水の音」、この詩句はなんだかんだ優れている、じつはスゲー優れている、という話をしよう。ここでは説明を省く。その話は、どうでもいいことだが「へえ、なるほどねえ」と学門の意欲を湧かせるだろう。水の中、ではなく、水の音としてあるのが想像力へのトリガーになっている。

あなたもまったく同じ話をしたらいい。するとなぜか、あなたから出て来るのは、「この詩句はなんだかんだ優っています」という“( )”になるのだ。なんでだ？　まったく同じ内容を、まったく大真面目に言っているのに。なぜおれの場合はそれがひとつの「( )」に聞こえて、あなたの場合は意図不明の「( )」に聞こえるのか。

そこで、あなたが若い女性であれば、大きなバストをアピールし、短いスカートを履いて「えへへ…」とやれば、あなたのほうに「いいね」がつく。

それはそれで不気味だと思わないか？

そんな「( )」が、おっぱいアピールのあなたに笑顔を向けて手招きしている。

男性の場合は、おっぱいがないので、髪型とメイクを韓国風にしてイケボっぽくすれば、2023年現在時点では「いいね」がもらえる。BGMは、何かバズったやつを流しておいて。

こんなのやっぱり不気味じゃないか。

「世の中」は、情動とイメージなのだ。かわいいとかエモいとかいう情動に、かわいいとかエモいというイメージを貼り付けておけば、( )に刺さる。

「( )」はどこにもいない。近々そのことをA I動画が証明するだろう。

ゲームセンターで不良気味のお姉ちゃんが四歳のおれにやさしくしてくれたというのは、情動やイメージではない。そういう「もの」だったのだ。やさしさという「もの」があり、女性という「もの」があった。たぶん男性という「もの」もあって、男性がバイクで女性をタンデムに乗せるとか、そういう「もの」だったのだろう。

この、バイクに二人乗りというあたりで、もう現代ではイメージと情動にすり替わっていくだろう。あこがれのイメージ、それに湧きおこる情動。それに対しては( )が湧く（至急、ゴミ箱に捨ててくれ）。

おれはやさしくしてくれたお姉ちゃんに聖なる気持ちが湧いたわけではない。当時、おれはなにもわかっていないかった。そしていまもわからないままだ。やかん、手ぬぐい、ゲームセンター、不良気味のお姉ちゃん、びっくりするぐらいやさしい、なにが「わかる」というんだ、ただそういう「もの」があ

つただけじゃないか。

現代には、たいした年齢でもないくせに、ジジイみたいに知恵者ぶろうとする男が大量発生している。たぶん、老賢者元型と融着してしまって自我（ ）を起こしているのだろう。

おれはそんな知恵者に訊いてみたいのだが、たとえば、

「あなた自身が、映画バック・トゥ・ザ・フューチャーの十分の一でもいいからきらめきを持つためにはどうしたらいいのか」

と訊いてみたい。

あるいは、

「なぜあなたには、青春というものや、尊崇を受けるべき命というものがなくて、しかもそのむなしさに自分自身で言及しないのか」

と訊いてみたい。

「あなたの言いように叡智への到達があるとしたら、なぜ誰もあなたに会って歓喜を得たとは言わないのでしょうか？」

それに答えられずごまかすのであればそんなものまったく賢者ではない。自分で思い込んで演出を利かせた賢者キャラでしかない。

トルストイやタゴールの横に並べる気になれないならそれは賢者ではないし聖なる本人でもない、ただのキャラだ。

おれは自慢話をしたくないので、これでも表現を控えているのだ。

まだ幼いような、若い女の子がおれのところに来て、わけもわからず「わあー」と言う。その頭に手を乗せてやると、それだけで目から涙が流れたりする。初対面なのだが、耳を引っ張ってみたり、鼻をつまんでみたりしても「わあー」とよろこぶばっかりだ。何によろこんでいるのか、本人も「えー、わからないです、お腹が空きました」と言う。

そうして単純によろこぶか、そうでない場合は、一種のパニック症状を呈する。

おれが若い女性によく言われることベスト5は、

「ウソがない、裏表がない」

「すごくやさしい」

「存在じたいがくつきりしている」

「淨（きよ）まる」

「どれだけ一緒にいてもしんどくない、一家にひとりいてほしい」

という感じだ。

これらのすべては、何でもない、すべて「おれが“（ ）”だからだろ……」というだけで説明がつく。

本人に裏も表もねえよ。

さらにわかりやすく、いちばん単純な話をしてやろうか。

バターロール選手権、なんてのはどうだ。

おれがコンビニに行って、バターロールパンを買ってくる。

そのひとつを、おれが手づかみして、「ほれ、食え」とあなたに突き出す。

あなたはそれを食いたいか、食いたくないかというだけの話だ。

あなたがバターロールを受け取ったところ、横からXちゃんがやってきて、

「それわたしにちょーだい」

と言ったらどうか。

あなたはそれに対してどう答えるか、

「えっ、イヤだよ」

と答えるか。

イヤがるということは、そのバターロールが大切な「( )」なのだろうな。

あなたが自分で買ってきていた、ただのバターロールなら、Xちゃんに譲るのはぜんぜんかまわないはずだ。

あるいは、Xちゃんも自分で買ってきていたバターロールパンを持っているとする。

それを、あなたのバターロールと「取り替えっこして」と言ってきた。

あなたはそれをどう思うか。「えっ、イヤだよ」と思うか、「え？ 別にいいけど」と思うか。

「( )」においては、二つのロールパンは同等だ。自我はそのふたつを比較して比率を捉えるが、そこに目立った比率の差分は見当たらない。

「世の中」においてはふたつのロールパンは同じだ。

何が違うのか、わかるように説明しろと言われても、それは当人にも「わからない」のだ。

それがボールペンだろうがバターロールだろうが、おれ「本人」を経由しているので「( )」になっている。

ただのバターロールだが、バターロールという「もの」になるのだ。食べ物、ごはんという「もの」になる。さらには食事という「もの」になる。

バターロールに強い（ ）と（ ）なんかねえよ。

「母さんが遺した 1990 年のシャトー・マルゴーです」ということならイメージと情動も湧くが、いまコンビニで買ってきていたバターロールにイメージと情動はねえよ。

おれが投げやりにメシを突っ込んで、泣き出した女性は枚挙にいとまがない。(男性の場合はいちいち覚えていないが、たぶん何かテキトーに感動ぐらいはしていたのだろう)

投げやりに口に押し込まれても、それは食事という「( )」なのだ。それで食事という「( )」を初めて経験しました、という人はたいてい泣き出してしまう。「生まれて初めて、ごはんを食べて“安心”しました」と泣く人はじっさいすごく多い。おれにとってはもういつものことなので、女の子が泣き出すのにも慣れてしまった。

あなたはどうだろう、あなたは初対面の人にバターロールパンを「ほれ、食え」と押し付けるということを、あなた「( )」として出来るという確信があるだろうか。

こういった単純なことは、なかなかごまかしが利かないものだ。なにしろあなた自身、テキトーに五人ぐらい知人を思い出してみたら、

「この人から押し付けられたバターロールは、無理、悪いけどあとで捨てちゃうかも」

「この人から押し付けられたバターロールは、うーん、まあ食べられなくはない」

「この人から押し付けられたバターロールは、気分によるけれど、割と食べたい、かも」

「この人から押し付けられたバターロールは、まあ食べるけど、なんでもない感じ笑」

「この人から押し付けられたバターロールは、体調によるけれど、できたら食べたくないかな」

みたいに分かれるはずだ。

食品を摂取したからといって、それが食事という「もの」になるわけではない。

高級な食品を摂取したとしても、まともな食事という「もの」はまったくなく、あとで吐いちゃったというようなことはいくらでもある。

尾籠だが必要な言い方をするなら、性器を結合させてピストン運動したからといってセックスという「もの」になるわけではないというのと同じだ。

横浜の橋の上で待ち合わせて映画を観てホテルの最上階ラウンジで食事をしてエレベーターでキスをしてホテルでベッドインしたからといってデートという「もの」にはならないのと同じだ。恋愛という「もの」にもならないし、青春という「もの」にもならない。

高品質にしたところで、それは「品」であって「もの」ではないからな。

食事という「( )」がないのに、「食品」だけ内臓に突っ込まれても、そりゃあ内臓の調子が悪くなるよ。

マッチングアプリで会ったばかりの人に、コンビニのバターロールを押し付けられて「ほれ、食え」と言われても、そんなものとても食べる気にはならないんだろう？ じゃあその人と食事にいくとかデートに行くとかいうことは初めから破綻している。

バターロールを押し付けられて、「わあー」とあなたがよろこんでしまう、そういう人と深夜のサイゼリヤにでも行ったほうがよっぽど食事という「もの」がありデートという「もの」がある。

本人という「もの」があって、待ち合わせという「もの」があって、街という「もの」あって、季節という「もの」あって、「古池や……」という俳句なら俳句という「もの」あって、それについての「話」という「もの」あって、なにもかも「もの」に包まれていて、その中にバターロールという「もの」がヌッと出て来て、「ほれ、食え」と食事という「もの」が促される、それで「ちょっとドライブに行くぞ」といえば、そこにはドライブという「もの」があるのであって、カーステからは「そして僕は途方に暮れる」が流れてきて、そこからはそういう「話」、そういう「ものがたり」が聞こえてきて、窓の外には景色という「もの」があって、あなたの生きている時間と時代という「もの」があって……そうして「もの」に包まれているなら、いちいちのことに文句を言う人はいない。「スカート短くてかわいいじゃん、へへ」と言ったとして、それはそういう話、そういう「もの」に過ぎず、男の人という「もの」もそこにあるらしく、そこにとつぜんの「はいセクハラ！ 主張！ 主張！ しんどい！ しんどい！」みたいなことは起こらない。とつぜん「まあ、わたしは聖なるわたしだから、俗は半笑いで受け流すしか、ない、かな……ダルい、ふふ」みたいなことにもならない。

さあしかし、それは「もの」がある場合であって、問題はその「もの」がない場合だ。「もの」のすべてがログアウトしてしまった場合。

「主張！ 主張！ しんどい！ しんどい！」「まあ聖なるわたしだから、半笑いで受け流せばいいか……ダルい、ふふ」が起こるのじゃないか。

おれの言っていることは誇張ではないのだ、近年に流行した声と言葉といえば、「うっせえわ( )」と「可愛くてごめん( )」じゃないか。それを唄っている「本人」なんて知らないだろ。「秋の夕日に 照る山紅葉 濃いも薄いも 数ある中に 松をいろどる 楓や薺は 山のふもとの 裾模様」というのは、主張ではなく( )だろ。

「しんどい」というのは本当にどうしようもなくキツい。リアルに「しんどいしんどいしんどい」なのだ。この「しんどい」を真正直に受け止めていたら、本当に再来週には精神疾患で動けなくなってしまう。

「もの」がログアウトしたということは恐ろしいことなのだ。すべてのことを「本人」なしで、「世の

中」だけでやりくりして生きていかなくてはならない。それだと、まずさびしいし、むなしいし、言つてしまえばそれでは生きている意味がないわけで、意味がないだけならまだしも、一番キツいのは肉体じたいが「しんどいしんどいしんどいしんどい」になるのだ。なんだこのむごたらしい仕組みは。

だからどうなるといって、そりやあもう、おののが「(             )」を持つしかない。内心でそれぞれの、強化されまくった「(             )」を隠し持つしかない。そのためならむしろ自我インフレーションもウェルカムプリーズだ。

もはや「本人」がどうこうという、哲学的な課題ではなくて、じっさいのこととして「しんどい」に押しつぶされて破滅してしまう、そのことの回避のためだけに、「聖なる気持ち」の自動生成が起こっている。

そしてその「聖なる気持ち」をグーンと補充できたときには、現代人は「元気をもらった」と言うんだな。それがいまの世の中だ。本当にそうなのだからごまかしてもしょうがない。たとえるなら、酸素という「もの」がログアウトしてしまったところで、やむをえず「酸素な気持ち」を自動生成しているような状況だ。だからといって急に「酸素な気持ち」のバルブを閉めたらどうなる？　いきなりそのバルブを閉めるわけにはいかないじゃないか。

この状況下で、われわれは、なぜか「自分はなんでもできる」と思い込むようになっている。なぜだかわかるだろうか、これを演繹から説明できてしまう人はたぶん相当頭がいい。

「聖なる気持ち」で（　）が上昇してしまっているからだ。上昇させていないと「しんどい×4」でつぶれてしまうのでしようがないのだが、その上昇の副作用として、「なんでか知らないんですけど、自分はなんでもできる、はず、と思っているんですよね～（内心）」という症状が出る。そんな症状はないつもりでも、あれこれやり始めると、内部がその症状に巣食われていることが発見されてくる。

肉体レベルで、その重さが消えるほど、「本人」に到達している人というのは、言ってみれば「達人」のたぐいなのだ。「到達している人」なのだからそりやあ「達人」だろう。達人ならなんでもかんでも出来るのが当たり前だ。何も出来ない達人なんていないだろう。だから現代では新入社員も内心「達人」として出社しているということだ。しょうがないだろう、達人でいかないと「しんどい×4」に押しつぶされてしまうのだから。

それで、たとえば学級会の調整もできない人が、国際情勢について「もっとこうするべきなのに、外交官はアホ」みたいな達人コメントをウェブ上に書き込む。恋愛経験がゼロの人でも、なぜか「じっさいに付き合ったら、わたしはけっこう尽くすタイプの、恋愛の達人」と思っている。すべてのことに経験と実績がゼロでも、すべてのことに達人だから、発想がまず（　）から始まってしまう。

すべて土台が「聖なる気持ち」から発しているので、達人スタートになるわけだ。なんでもできるはずという思いがどこかにずっとありつづけてしまう。けれどもとうぜん、じっさいに何かをしてみると、達人級の靈験なんか伴うわけがないので、じっさいに何かをするということからは遠ざかっていく。それはもう、（　）を帶びて遠ざかっていくよりしようがない。本来は、訓練や勉強や交友や経験を重ねてさまざまなものを受け取っていかなくてはならないのに、まずその達人スタートを否定される時点でヒステリーが起こって退却を余儀なくされてしまう。どだいが達人スタートなのに、「本人が出てないじゃん、本人を出してよ」といきなり本質クライマックスみたいなことを問われるのにはあまりにもキツすぎるだろう。じっさい、達人を言い張るということは、そこに「本人」が現れ、聖なる「もの」さえ認めさせるということでなければその資格がないのだからしょうがないことではあるのだけれど。

達人なんてダセえ語を使うのは気が引けるが、わかりやすさのためにその語を使うなら、達人というのは「イヤというほど事実が重なり、当人ももうカンベンしてくれと思っている状態」のことを指す。達人なんていうものは才能がどうこうではなく事実のことなのだ。たとえばおれは中学のときから、中間試験や期末試験のころになると、おれの家にぞろぞろクラスメートたちがやってくるという状況にあった。「お前のところだとなんか勉強がしんどくないんだよ」「勉強する気になる」「お前教えるのうまいし」ということでだ。中学二年のころなどは、試験前のおれは教える側であって、おれ自身が勉強する余地はない、というような状態だった。そりゃ内心で「カンベンしてくれ」ぐらい思うだろう。

高校のとき、H Rの延長で、それぞれが何かレポートを発表するという、どうでもいい企画があった。誰もまともに調査なんかしてきていないし、何をレポート発表しても誰もまったく聞いていないという、当時の男子校なら「そりゃそうでしょ」というような風景があった。おれも、おれの番になって、さっさとその茶番を済まそうとしたのだが、おれが壇上に立った途端、なぜかクラスメートたちは静まり返って興味津々の面持ちを向け、おれの発表に聞き入ろうとした。おれは内心で、「えっ……なにそれ」と思い、直後には内心で「ふざけんな、お前らブチ殺すぞ」と思った。こんな状況の中で、おれだけまともに発表できるような調査をしてきているはずがあるか。それでおれはグズグズの発表をして、クラスメートたちに「なあんだ」と落胆されたのだった。ふざけんな、といまでも思う。いま思い返してもあのシーンは背筋が凍る、なかなかの恐怖体験だった。

おれは自分で料理が上手だとは一ミリも思っていない。まあヘタではないと思うが……しかしじっさいに、友人らといふときに「腹減ったし、何か作るかねえ」とおれがボソっと言うと、一同はそれしか楽しみがない家畜小屋の動物たちのようにバッと一斉にこちらを向くのだ。おずおずと、「な、何を作るんですか」と訊かれ、おれは弱々しく「チャ、チャーハンとか」と言うのだが、どのように控えめに言ってもアホどもは「おおおおお……」と無意味な声を鳴動させる。

達人というのは、どうしてもう当人は目を背けたくなるほど事実に圧迫されているものであって、少年マンガのように思い耽っているものではない。

「特に意味ないけど、頭ナデナデでもするかな」と言ったとき、わあーっと行列ができるのであれば、あなたは達人でもないしその手に浄化の作用もない。

料理を作つて食わせたときに、「おいしいですね」と言われるのはふつうのことであつて、そうではなく達人がどうこうというなら、食わせたときに「な、なんじゃこれ！！」と困惑と驚きの叫び声があがるというのが達人のそれだ。

尾籠だが、若い人にとって必要なことで言えば、セックスのときに「うふん、気持ちいい……」と言われるのがセックスの達人ではなく、「えっ、ちょっと、何これ、えっ？」と困惑と驚きが起こり、そのまま叫び声になっていくのが達人のそれだ。

そして、こうしたことのすべては、(　)という「もの」があればすべてそのようになる、というのが今回の話だ。技術とかセンスとかの問題じゃない。

おれが焼いて、あなたの口に突っ込んだソーセージは、焼きすぎて塩を振りすぎていても旨いだろう。食事という「(　)」じたいが旨いので、あなたは「何これ、えっ？」と困惑して驚くのだ。

「(　) × 4」とはえらい違いじゃないか。

方法を知りたいだろう。

このことのすべてを、解決し、あるべきところへ立ち返らせるための唯一無二の方法は、まさかのまさかで(　)だ。

あなたが楽器を弾くなら肉体労働としてそれを弾け。絵を描くなら絵筆を、小説を書くならキーボードか万年筆を、声を出すならその発声を、演劇をするならその演技を、すべて肉体労働とせよ。肉をサボらせるな。技術なんかゴミ箱に捨ててしまえ。全身の肉が全靈となってサボらずに労働するようになつたら、いつぞやゴミ箱に捨てた技術を拾いに戻ってもいい。

青春は肉体労働とせよ。恋あいは肉体労働とせよ。芸術は肉体労働とせよ。作品は肉体労働とせよ。会話は肉体労働とせよ。物語は肉体労働とせよ。料理は肉体労働とせよ。セックスは肉体労働とせよ。学門は肉体労働とせよ。あなたの生のすべては肉体労働とせよ。あなたの「( )」があなたの肉体にそのように命じているだろ、あなたにはそのことがずっと聞こえなかつたのか？

おれはもともと、肉体労働を（ ）側だったのだ。そりやそうだろ、そうでなきやこんなに料理のレパートリーねえよ。おれが作る側だったからレパートリーも作りこみも進んでいったというのが自然な成り行きだろ。いまだって、ハアハア言いながら肉をヘロヘロにして、十二月三十日の午前七時に書き話しを続いているのはおれの側だ、おれはもともと肉体労働を奉じる側だった、おれは自分の所属を「( )」だと確信していたからな。

おれは自分の「俗」所属を確信していく、「聖」に所属している人の感覚はまったくわからなかつたから、そのことに触れようともしなかつたし、覗き込もうともしなかつた。ただおれは肉体労働を奉じることしか発想になかつた。それでおれはまったく疲れなかつたわけだし。

ただ、そのことを続けているうち、一部の人が「ギャー」と悲鳴をあげ始めた。以前にも話しているとおり、なにか精神が地獄に落ちるビジョンを視たらしい。救急車まで呼ぶ騒ぎになっておおごとなつてしまつた。似たようなことはその他のシーンでも起つり、その他の人にも起つった。そのことは機械的に起つて、実験してしまふと再現性まで確かめられてしまう。

それでおれは、危機管理や安全保障のこととして、「おれが一方的に肉体労働を奉じるのはアカンらしい」ということを認めざるを得なくなつた。

いまになって考えれば、それは、「聖なる気持ち」の誰かに、おれ「本人」がひざまずいて肉体労働を奉じ続けると、どうなるか、ということの実験になつてしまつていたのだとわかる。身体の重さが消えるということの逆、何か無限のような「落下」を体験するらしい。

それで、もうこれで材料は出そろつたわけだ。おれは何を見てきたのか、そしていま何を話しているのか。

おれは（ ）にいるのだ。あなたも（ ）にいる。おれには聖なる気持ちではなく、あなたには聖なる気持ちがある。

なぜあなたには聖なる気持ちがあるのか？ それは、あなたが「( ) × 4」に押しつぶされそうだからだ。

おれには聖なる気持ちはない。それは、おれが「しんどい」には無縁だからだ。

なぜ「しんどい」に無縁かというと、おれは「( )」で挙動しているからだ。

あなたも自分で動いているつもりでいる。

まさに今回の話はそこに尽きる。

おれの言っている「本人」と、あなたの思っている「自分」は、別の事象なのだ。

あなたの思っている「自分」は、まさかのまさか、( ) な事象なのだ。

あなたの思っている「自分」は、「( )」に発生している。

だからあなたの言っていることは、何の抵抗も起こらず世の中で通じる。

おれの言っていることのほうは、世の中でぜんぜん通じないでしょ。

腹が減ったので、あなたにバターロールパンを買ってきてもらおうか。

バターロールパンを買ってきてくれ。

そう言わされたら、あなたはどうか。

ぴゅーっと買いに行ってくれるだろうか。コンビニはすぐそこだ。

あなたの思い描いたところ、あなたは「ぴゅーっと」買いに行ったのじゃないか？

なぜ「ぴゅーっと」なのか。

(　　) が消えているからだ。

おれは、急いで買ってこいとか、走れとか、まったく言っていないのに、あなたはなぜか「ぴゅーっと」を思い描いた。

次の場合はどうか。

テレビの情報番組が、「いまバターロールパンが人気です」と言った。占いのコーナーが、「今日のラッキーアイテムはバターロールパン」と言った。たしかに美味しそうではある。

あなたには、「バターロールパン、かあ。買ってこようかな」という気持ちが湧いた。

そのときあなたの思い描くところ、あなたはそれを「ぴゅーっと」買いに行くか？

違うだろう。何か気分たっぷりで、フフン、と鼻歌でも唄いながら、何かのワンシーンみたいに買いに行くイメージが湧くのじゃないか。

それって、イメージとして「聖なる」やつだろ。

俗たる、というイメージではないでしょ。

聖なる午後の光の中を、聖なるわたしが、聖なるごきげん情動で、聖なる散歩をフフンとしているんじゃないかな。

そのときその散歩は、「(　　)」になっているでしょ。

まさか肉体労働ではないわな。

いっぽう、「ぴゅーっと」お使いにいかされたのは？

そっちは肉体労働であって、具体的運動ではないな。

あなたが気づかないところに、決定的な違いがある。

小さなことだが、違いはまったく小さくない。巨大で決定的な違いだ。

おれが本人で「腹減った、買ってこい」というと、あなたは勝手に「ぴゅーっと」、その肉体労働を思い描いて決定する。あなたがそう思い描こうと企図したのではない。なぜか「ぴゅーっと」なのだ。そこに何のイメージも情動もない。

逆に、もしあなたが、あえて破滅に突っ込みたい、と熱烈に望むのであれば……

おれ本人があなたに命じたことを、あなたは聖なる気持ちで受け取れ。

あなたの聖なる気持ちに組み替えて挙動しろ。

それだけあなたは破滅にぐいぐい突っ込んでいくだろう。

聖なる気持ちでおれの話を受け取った瞬間、あなたの具体は重さを持ち、あなたは重さに抗して具体的運動をぶんぶん振り回し始める。

あなたが破滅したければ、楽器を持つあなたに、おれ本人が「Aの音を出せ」と言ったとき、あなたはそれを聖なる気持ちで受け取れ。

聖なる気持ちに組み替えて、気持ちをたっぷりこめた、具体的運動として音を出力しろ。

あなたの楽器からは、重苦しい、罪業の降り積もったAの音が鳴り響くだろう。

そういう演奏が好きといふ人もいるけれどね。

本人 vs 聖なる気持ち、について。

「バターロールパン、かあ。買ってこようかな」という言い方にヒントを見よう。

この一言だけで、「ぴゅーっと」は失せ、聖なる気持ちが湧いてくるんだったな。

「青春、かあ。頑張っちゃおうかな」

「恋愛、かあ。頑張っちゃおうかな」

「芸術、かあ。頑張っちゃおうかな」

「作品、かあ。頑張っちゃおうかな」

「学門、かあ。頑張っちゃおうかな」

自我が上昇している、ということは「気持ち」の感覚でわかるはずだ。

上昇した自我は、青春活動を始め、恋愛活動を始め、芸術活動を始め、作品活動を始め、学門活動を始めるだろう。

すごい勢いで、活発で、イケイケだ。いつもヘロヘロ肉になっているおれとはえらい違いだな。

あなたはつらい思いをしなくてはならない。

どういう「つらい思い」かを正確に把握して、その正当性を引き受けなくてはならない。

なあに、すぐ済むよ。

誰かの本人がいてくれたら、じつはなんてことないんだ。

つらい思いとは、「(　)を問われてしまう」ということだ。

「青春、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、「よし、最後までやり抜こうぜ!」という声を発してみる。じつに青春っぽいな。

それが、青春のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

違和感があり、ぎくしゃくしており、ウソっぽく、寒い。誰かが「もうやめようぜ」と言い出しかねない。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

「恋愛、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、「思いきり、愛し合っちゃいましょ……」と、ベッドルームで服を脱いでいく。じつに恋愛っぽい。

それが、恋愛のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

性器は濡れているが、何かがウソっぽく、寒々しい。彼が途中で「もうやめようぜ」と言い出しかねない。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

「芸術、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、目を潤ませて、「この表現は、躊躇を超え、わたしたちの思いを乗せたものです」と発表してみる。じつに芸術っぽい。

それが、芸術のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

客が空気を読んでくれている、けれども苦しい、その感じがひしひしと伝わってくる。寒々しい、どうでもいいようなヨイショ気味の拍手が打ち鳴らされる。しかしいまさら、その潤んだ目とそれっぽい表情をやめるわけにもいかないので、最後までその顔面と芸術っぽさをやりきる。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

ぜんぶこのパターンだから、これ以上の例示は要らないだろう。

とびっきりの「わたし」「おれ」を表示したはずが、「あれ……?」となるのだ。

ヤバイ空気だ、即座に誰か他人のせいにしたい。他の何かのせいにしたい。

ヤバイ空気だが、ここまできて、急に「( )」にして混ぜ返すのか？ それも醜いことだという自覚をまぬがれない。

この悲劇は、「( )」という悲劇」だと説明できる。

上昇の果てに勇気をもって示した、とびっきりの「わたし」「おれ」。それは「本人」ではなく、周辺的なキャラでしかなかった。

わざとやっているのじゃない。当人は本気も本気、大真面目にすべてをやったのだ。

ネタにしてごまかそうとした、でもそれもごまかしきれなかった。

腹の底が震えて、感情が焼き切れそうだ。

爆発寸前の内部で叫ばれているのは、

——どれほどの“( )”をつぎ込んできたと思っているの！？

その気持ちのすべてを否定されるとき、どれほどつらい思いをするか。

ウソ偽りなく、ありったけの気持ちのすべてを投げ込んできたのに、それが「ウソっぽい」なんて、どういうこと？

わたしの精一杯の気持ちが、どうしてこんな侮辱を受けなくてはならないの。

——わたしの青春、わたしの恋愛、わたしの作品、わたしの生きること、すべて、本当の気持ちをつぎこんできたの。

そのときのあなたの気持ちちは「わかる」し、あなたの心理も「わかる」。それがどれぐらい危険な状態かというのは、たぶんあなたよりもおれのほうが年の功があってわかっているかもしれない。

けれどもこれ以上あなたを迷いの森に閉じ込めておくわけにはいかない。

あなたのやったことが、ウソだといっているのではなく、( ) だと言っている。

あなたにもあなた「( )」というものがあるのだ。

そしてあなた「本人」は、周辺的なことをよろこびにはしない。本人は本人のことをよろこびにする。

あなたの本人がよろこんでいないことに、あなたの( ) が高ぶっているから、そのことじたいがあなた自身にも「ウソっぽい」と感じられているんだ。

もう一度、初めの図1に戻ってごらんなさい。あなたはやはり誤解しているでしょう。自我、心理、気持ち、情動が、あなた本人だと誤解しているでしょう。

この最もつらい思いをするとき、あなたは、何かに見放されたと感じ、「もう終わりだ、何もかも終わりだ」というショックを受ける。

でも本当はそうじゃない、あなたが見放されたのじゃなく、あなたの自我の側が、あなた（　　）を見放してしまったんだ。

本人の側があなたのことを見放すことはない。

見放すといって、「分離」するのは（　　）の側の機能なのだから。

あなたがこの最もつらい思いをするとき、あなたは必ず思い出すこと。

そのどうしようもない気持ちのつらさを、解決してくれる、消し去ってくれるのは、思いがけないことに「(　　)」だ。

情動のイメージからまったく逸脱した肉体労働を思い出せ。

気持ちを侮辱されて、最も憎らしいと思えるその人を、それでもこの人には「本人」があると思えるなら、情動のイメージに反して、あなたは水を汲んできて、その人に水を差しだせ。

湯を沸かして、茶を淹れて差し出せ。

そんなことをするぐらいなら死んだ方がマシと思えるかもしれないけれども、一度は考えろ。

その人の荷を運び、脱ぎ散らした衣類を整頓し、什器についた垢を落とせ。

その人の土地をたがやして、作物の生る地にせよ。

その人の肉体を休ませ、あなたが肉体労働を奉じろ。

すると、とんでもないことが起こる。

そのとんでもないことが起こったとき、あなたは、先ほどまでのつらさの情動とは正反対に、「このことをさせてもらえない」とわたしは死んでしまいます

と言い出す。

そのとき、あなた自身でもわかる、あなたの声と発言はまったくウソっぽくない。

重々しくもなく、情動も伴っていない。

まったくどこのイメージにもなかったことばだ。

そのときあなたは、自分が「(　　)」で話しているということが直接わかる。

あなたは「本人」であってください。

かつて、いろいろな「(もの)」があったんだって。おれはそれをさまざま見てきた。それはちょっと、おれだけ特殊なレベルではあったのかもしれない。じつはそれぐらい、おれは強烈に「(本人)」だったのかもしれない。それにしても、かつてはいまとは比べられないほどいろんな「もの」があった。神戸は神戸だったし、東京は東京だった。渋谷は渋谷で、原宿は原宿で、高円寺は高円寺だった、吉祥寺は吉祥寺だった。バラナシはバラナシだった、いまってバラナシはどうなっているんだろうな。銀座は銀座だった。

若いころのおれは、まったくダメな人格をしていて、正直なところ女に救われてきた。単純に言って、女のやさしさに救われてきた。もちろん女だけじゃない、先生の叡智にも救われてきたし、先輩のやさしさにも救われてきた。

でも、いま同じことを真似したってダメなんだ。表面上、同じようなことはできるかもしれないけれど、「もの」がないんだから。青春たって、青春という「もの」がないんだから、青春っぽい（イメージ）と（情動）を真似したって、同じものにはならないし、同じことにはならない。おれの言っている青春の話はわかると思う。でも、（わかる）ということはダメなんだ。だって、おれは当時わかっていなかったんだから。なにもかもわかつていなかつた。本当に、なにもかもわかつていなかつた。ただ、いろんな「もの」がひしめいていた。

なぜおれは、幼いころから、どこでもかしこでもあんなにかわいがってもらえたのだろう。おれはまだ小学生にもならないころ、祖母と母親が買い物にいくのによく難波に連れていかれた。しかし子供にとって高島屋になんか興味はないので、戎橋筋の、当時のゲームセンターに放り込まれていた。そこには不良気味のお兄ちゃんとお姉ちゃんがいて、なぜかよくわからないが、いつもどこかのお姉ちゃんがおれをその場でかわいがってくれた。お兄ちゃんがおれをからかうと、「かわいそうでしょ」といつてお姉ちゃんが寄り添ってくれるのだ。これマジの話だよ。で、おれが百円玉を入れて「ラリーX」をやると、「こいつ上手いな！」ということで、お兄ちゃんらもおれのことを尊敬するのだった。

それから二十年近く過ぎて、おれがエニックスの集団面接を受けていたとき、面接官の携帯電話の着信音が鳴った。おれは反射的に「敵の音楽じゃないですか」と尖って笑った。エニックスの社員は「こちら、敵じゃないよ」と言って諭した。でも通じたのだ。その着信音は「ラリーX」のBGMだったから（ラリーXはナムコのゲームだ）。三つ子の魂と言えばいいのか、すげえことだ、二十年近く過ぎて幼児の記憶なのに聞いた瞬間「ラリーXだ」と反応できるなんてな。

エニックスの三次面接の日程がよその日程とかぶってしまい、エニックスには入社できなかつたけれど、あのころ、就職活動の帰り道に観た夜の桜のことをいまも鮮烈に覚えている。

そんなことを言いだしたら、おれの頭の中は、鮮烈に覚えているものばっかりだけどな。頭の中か、魂の中かわからないが。

万事、そういう「もの」だったのだ。ゲームセンターにいる不良のお姉ちゃんはやさしい「(もの)」だったのだ。イメージがあったのではなく「もの」があった。誰がやさしくしてくれたのか？ 誰かは知らない、けれど確実なことは、お姉ちゃん「(本人)」がやさしくてくれたということだ。おれが言っているのは、そのお姉ちゃんがやさしいと分類できるということではなく、やさしい「もの」に直接出会ったという話だ。なぜ彼女がやさしかったかというと、何かの主義があったからではなく、お姉ちゃん「本人」だったからだ。そのころ「(世の中)」はどうだったか？ 世の中は抜け穴だらけでザルだ

ったな。でもそんなこと知らない。おれはドラえもんの声優が大山のぶ代さんだということも知らなかった。ドラえもんの声はドラえもんだと思っていた。いまでもおれは、大山のぶ代さんの中にドラえもんの声が入っていただけ、という自説だけを信じている。

おれはやさしいお姉ちゃんの（イメージ）に（情動）を湧かせているのじゃない。わたしはそのお姉さんにお会ったことがあり、わたしの魂はそのお姉さんにも慈しまれ、育てられてきたという（話）をしている。

とつぜん話は変わるが、体罰はダメだ。体罰がダメというより、体罰は「もう」ダメだ。教師が男子生徒のケツをバチコーンとやるのは、本来そういう「もの」だからどうでもいいというか、それでかまわないし、罰というよりコミュニケーションの一形態だろうが、いまはもう「もの」がないからダメだ。教師という「もの」もないし、生徒という「もの」もない。大人という「もの」もないし子供という「もの」もないのだ。教師や生徒という認識と世の中にあるだけだろう。それが悪いと言っているのではない。「もの」がなくなってしまったものはどうしようもない、という、どうしようもないことを言っているだけだ。

体罰がダメとなったら、ナデナデ教育、ノータッチ教育にすればいいのかというと、それもダメだ。つまり残念なことに、どうやったとしても基本的にダメになってしまった。それはしょうがないだろう、教師や生徒、学校といった「(もの)」がなくなってしまったのだから。意識だけ強くしたってしないだけだし被害者を生むだけだ。聖なる「もの」がログアウトしてしまった。その上で、ダメでなくするなんてこと出来るわけがない。そうなると、あとはなんとか無難にして、かつ合目的的に済ませるしかないのだ。「もの」はなくても「(世の中)」としては利益と名目が成り立つようになるしかない。そしてそんなことを、できたとしても人の魂はよろこばない。よろこばないけれど、しょうがないのだ、「もの」がログアウトしてしまったのだから。

ゲームセンターのお姉ちゃんと同じく、おれにとっては、名前を思い出すだけで胸が痛くなる、魂が時空をブッ飛んでいって何かを誓わせる、そういう女性がいる。恋人だったわけじゃない。恋はあったのかもしれないが、そんなことはどうでもいいことだ。当時、おれはなにもわかっておらず、いまも何もわかっていないのだ。ただ、そういう「もの」がある。頼むから聖なるイメージをゴミ箱に捨ててくれ。あのときおれの「(本人)」がいて、いまも胸が張り裂けそうに痛み続けているということは、いまもおれの「本人」がいるのだ。ただそれだけだ。おれの「本人」は一秒も経過していない。おれの「本人」には重さはなく、時間軸も存在していないのだから、おれはずっとそのひとつの「本人」のままだ。

いっぽうで、現代人のわれわれが、本当に（自我）で「好き」「好きではない」を区分し、自我でマッチングアプリを操作し、自我で「恋愛したいなあ」なんて思ったりする、いわば「自我恋愛」と呼ぶしかないものを、大真面目にやっているということもおれは知っている。それについておれは、否定的ではなく、かといって全力で肯定できるわけでもないが、「しょうがない、いろいろやってみるしかないんだから」と思っている。マッチングアプリで八百人の誰かと自我恋愛をしても、のちに名前を思い出すだけで胸が張り裂けそうになる、ということはないだろう。ないだろうけれど「しょうがない」じゃないか。恋あいという「もの」はなくなってしまった。いまあるのは恋愛ということへの「(イメージ)」と「(情動)」だろう。そんなことはわかっているし、それは「もの」ではないということもわかっているのだ。だからといって、おれはそんなことで意地悪を言う気にはなれない。バカにする気にもなれない。なにかわざかでも、おれから足しになれるのではないか、おれの出来ることはないかとばかり考え

ている。だからこんなものを書いている。

おれの言っている、「もの」とか「本人」とかいうのはどういうものか。直接知りたければ、簡単だ、おれの横に来て、おれと同じことを話してみればいい。もっと簡単な内容でもいい。「浦島太郎」の話でもいい。そしてその話しているところを録画してみればいい。するとなぜか、あなたのイメージと情動とは裏腹に、なぜかおれの「(本人)」だけがそこにはいて、あなたの「(本人)」はそこにいないだろう。映像の中で二人が同列に並んでいるはずなのだが、なぜかあなたの目さえ、おれが話していることばかりを覗てしまい、あなたがそこに立って何かを言っていることには見る気が失せるのだ。おれはこの残酷な表示であなたをいじめて愉しむ趣味はない。ただ、あなたがもしまだ若く、ごまかしたまま老人になって行方不明の魂になるのはいやなのだということであれば、じっさいそのことはさっさと実験して確かめてしまってもいいと思うのだ。ただ、これまでの経験から言えることは、その実験結果の明視は、当人が予想しているよりも「キツい」ストレスを受けることになるけれど。

おれはこんな話をしよう、「古池や、かわづ飛び込む、水の音」、この詩句はなんだかんだ優れている、じつはスゲー優れている、という話をしよう。ここでは説明を省く。その話は、どうでもいいことだが「へえ、なるほどねえ」と学門の意欲を湧かせるだろう。水の中、ではなく、水の音としてあるのが想像力へのトリガーになっている。

あなたもまったく同じ話をしたらいい。するとなぜか、あなたから出て来るのは、「この詩句はなんだかんだ優っています」という“**(主張)**”になるのだ。なんでだ？　まったく同じ内容を、まったく大真面目に言っているのに。なぜおれの場合はそれがひとつの「**(話)**」に聞こえて、あなたの場合は意図不明の「**(主張)**」に聞こえるのか。

そこで、あなたが若い女性であれば、大きなバストをアピールし、短いスカートを履いて「えへへ…」とやれば、あなたのほうに「いいね」がつく。

それはそれで不気味だと思わないか？

そんな「**(世の中)**」が、おっぱいアピールのあなたに笑顔を向けて手招きしている。

男性の場合は、おっぱいがないので、髪型とメイクを韓国風にしてイケボっぽくすれば、2023年現在時点では「いいね」がもらえる。BGMは、何かバズったやつを流しておいて。

こんなのやっぱり不気味じゃないか。

「世の中」は、情動とイメージなのだ。かわいいとかエモいとかいう情動に、かわいいとかエモいというイメージを貼り付けておけば、**(自我)**に刺さる。

「**(本人)**」はどこにもいない。近々そのことをA I動画が証明するだろう。

ゲームセンターで不良気味のお姉ちゃんが四歳のおれにやさしくしてくれたというのは、情動やイメージではない。そういう「もの」だったのだ。やさしさという「もの」があり、女性という「もの」があった。たぶん男性という「もの」もあって、男性がバイクで女性をタンデムに乗せるとか、そういう「もの」だったのだろう。

この、バイクに二人乗りというあたりで、もう現代ではイメージと情動にすり替わっていくだろう。あこがれのイメージ、それに湧きおこる情動。それに対しては**(聖なる気持ち)**が湧く（至急、ゴミ箱に捨ててくれ）。

おれはやさしくしてくれたお姉ちゃんに聖なる気持ちが湧いたわけではない。当時、おれはなにもわかっていないかった。そしていまもわからないままだ。やかん、手ぬぐい、ゲームセンター、不良気味のお姉ちゃん、びっくりするぐらいやさしい、なにが「わかる」というんだ、ただそういう「もの」があ

つただけじゃないか。

現代には、たいした年齢でもないくせに、ジジイみたいに知恵者ぶろうとする男が大量発生している。たぶん、老賢者元型と融着してしまって自我（インフレーション）を起こしているのだろう。

おれはそんな知恵者に訊いてみたいのだが、たとえば、

「あなた自身が、映画バック・トゥ・ザ・フューチャーの十分の一でもいいからきらめきを持つためにはどうしたらいいのか」

と訊いてみたい。

あるいは、

「なぜあなたには、青春というものや、尊崇を受けるべき命というものがなくて、しかもそのむなしさに自分自身で言及しないのか」

と訊いてみたい。

「あなたの言いように叡智への到達があるとしたら、なぜ誰もあなたに会って歓喜を得たとは言わないのでしょうか？」

それに答えられずごまかすのであればそんなものまったく賢者ではない。自分で思い込んで演出を利かせた賢者キャラでしかない。

トルストイやタゴールの横に並べる気になれないならそれは賢者ではないし聖なる本人でもない、ただのキャラだ。

おれは自慢話をしたくないので、これでも表現を控えているのだ。

まだ幼いような、若い女の子がおれのところに来て、わけもわからず「わあー」と言う。その頭に手を乗せてやると、それだけで目から涙が流れたりする。初対面なのだが、耳を引っ張ってみたり、鼻をつまんでみたりしても「わあー」とよろこぶばっかりだ。何によろこんでいるのか、本人も「えー、わからないです、お腹が空きました」と言う。

そうして単純によろこぶか、そうでない場合は、一種のパニック症状を呈する。

おれが若い女性によく言われることベスト5は、

「ウソがない、裏表がない」

「すごくやさしい」

「存在じたいがくつきりしている」

「淨（きよ）まる」

「どれだけ一緒にいてもしんどくない、一家にひとりいてほしい」

という感じだ。

これらのすべては、何でもない、すべて「おれが“（本人）”だからだろ……」というだけで説明がつく。

本人に裏も表もねえよ。

さらにわかりやすく、いちばん単純な話をしてやろうか。

バターロール選手権、なんてのはどうだ。

おれがコンビニに行って、バターロールパンを買ってくる。

そのひとつを、おれが手づかみして、「ほれ、食え」とあなたに突き出す。

あなたはそれを食いたいか、食いたくないかというだけの話だ。

あなたがバターロールを受け取ったところ、横からXちゃんがやってきて、

「それわたしにちょーだい」

と言ったらどうか。

あなたはそれに対してどう答えるか、

「えっ、イヤだよ」

と答えるか。

イヤがるということは、そのバターロールが大切な「(もの)」なのだろうな。

あなたが自分で買ってきていた、ただのバターロールなら、Xちゃんに譲るのはぜんぜんかまわないはずだ。

あるいは、Xちゃんも自分で買ってきていたバターロールパンを持っているとする。

それを、あなたのバターロールと「取り替えっこして」と言ってきた。

あなたはそれをどう思うか。「えっ、イヤだよ」と思うか、「え？ 別にいいけど」と思うか。

「(世の中)」においては、二つのロールパンは同等だ。自我はそのふたつを比較して比率を捉えるが、そこに目立った比率の差分は見当たらない。

「世の中」においてはふたつのロールパンは同じだ。

何が違うのか、わかるように説明しろと言われても、それは当人にも「わからない」のだ。

それがボールペンだろうがバターロールだろうが、おれ「本人」を経由しているので「(もの)」になっている。

ただのバターロールだが、バターロールという「もの」になるのだ。食べ物、ごはんという「もの」になる。さらには食事という「もの」になる。

バターロールに強い（イメージ）と（情動）なんかねえよ。

「母さんが遺した 1990 年のシャトー・マルゴーです」ということならイメージと情動も湧くが、いまコンビニで買ってきていたバターロールにイメージと情動はねえよ。

おれが投げやりにメシを突っ込んで、泣き出した女性は枚挙にいとまがない。（男性の場合はいちいち覚えていないが、たぶん何かテキトーに感動ぐらいはしていたのだろう）

投げやりに口に押し込まれても、それは食事という「(もの)」なのだ。それで食事という「(もの)」を初めて経験しました、という人はたいてい泣き出してしまう。「生まれて初めて、ごはんを食べて“安心”しました」と泣く人はじっさいすごく多い。おれにとってはもういつものことなので、女の子が泣き出すのにも慣れてしまった。

あなたはどうだろう、あなたは初対面の人にバターロールパンを「ほれ、食え」と押し付けるということを、あなた「(本人)」として出来るという確信があるだろうか。

こういった単純なことは、なかなかごまかしが利かないものだ。なにしろあなた自身、テキトーに五人ぐらい知人を思い出してみたら、

「この人から押し付けられたバターロールは、無理、悪いけどあとで捨てちゃうかも」

「この人から押し付けられたバターロールは、うーん、まあ食べられなくはない」

「この人から押し付けられたバターロールは、気分によるけれど、割と食べたい、かも」

「この人から押し付けられたバターロールは、まあ食べるけど、なんでもない感じ笑」

「この人から押し付けられたバターロールは、体調によるけれど、できたら食べたくないかな」

みたいに分かれるはずだ。

食品を摂取したからといって、それが食事という「もの」になるわけではない。

高級な食品を摂取したとしても、まともな食事という「もの」はまったくなく、あとで吐いちゃったというようなことはいくらでもある。

尾籠だが必要な言い方をするなら、性器を結合させてピストン運動したからといってセックスという「もの」になるわけではないというのと同じだ。

横浜の橋の上で待ち合わせて映画を観てホテルの最上階ラウンジで食事をしてエレベーターでキスをしてホテルでベッドインしたからといってデートという「もの」にはならないのと同じだ。恋愛という「もの」にもならないし、青春という「もの」にもならない。

高品質にしたところで、それは「品」であって「もの」ではないからな。

食事という「(もの)」がないのに、「食品」だけ内臓に突っ込まれても、そりゃあ内臓の調子が悪くなるよ。

マッチングアプリで会ったばかりの人に、コンビニのバターロールを押し付けられて「ほれ、食え」と言われても、そんなものとても食べる気にはならないんだろう？　じゃあその人と食事にいくとかデートに行くとかいうことは初めから破綻している。

バターロールを押し付けられて、「わあー」とあなたがよろこんでしまう、そういう人と深夜のサイゼリヤにでも行ったほうがよっぽど食事という「もの」がありデートという「もの」がある。

本人という「もの」があって、待ち合わせという「もの」があって、街という「もの」あって、季節という「もの」あって、「古池や……」という俳句なら俳句という「もの」あって、それについての「話」という「もの」あって、なにもかも「もの」に包まれていて、その中にバターロールという「もの」がヌッと出て来て、「ほれ、食え」と食事という「もの」が促される、それで「ちょっとドライブに行くぞ」といえば、そこにはドライブという「もの」があるのであって、カーステからは「そして僕は途方に暮れる」が流れてきて、そこからはそういう「話」、そういう「ものがたり」が聞こえてきて、窓の外には景色という「もの」があって、あなたの生きている時間と時代という「もの」があって……そうして「もの」に包まれているなら、いちいちのことに文句を言う人はいない。「スカート短くてかわいいじゃん、へへ」と言ったとして、それはそういう話、そういう「もの」に過ぎず、男の人という「もの」もそこにあるらしく、そこにとつぜんの「はいセクハラ！　主張！　主張！　しんどい！　しんどい！」みたいなことは起こらない。とつぜん「まあ、わたしは聖なるわたしだから、俗は半笑いで受け流すしか、ない、かな……ダルい、ふふ」みたいなことにもならない。

さあしかし、それは「もの」がある場合であって、問題はその「もの」がない場合だ。「もの」のすべてがログアウトしてしまった場合。

「主張！　主張！　しんどい！　しんどい！」「まあ聖なるわたしだから、半笑いで受け流せばいいか……ダルい、ふふ」が起こるのじゃないか。

おれの言っていることは誇張ではないのだ、近年に流行した声と言葉といえば、「うっせえわ（主張）」と「可愛くてごめん（主張）」じゃないか。それを唄っている「本人」なんて知らないだろ。

「秋の夕日に 照る山紅葉 濃いも薄いも 数ある中に 松をいろどる 楓や薦は 山のふもとの 裾模様」というのは、主張ではなく（話）だろ。

「しんどい」というのは本当にどうしようもなくキツい。リアルに「しんどいしんどいしんどいしんどい」なのだ。この「しんどい」を真正直に受け止めていたら、本当に再来週には精神疾患で動けなくなってしまう。

「もの」がログアウトしたということは恐ろしいことなのだ。すべてのことを「本人」なしで、「世の

中」だけでやりくりして生きていかなくてはならない。それだと、まずさびしいし、むなしいし、言ってしまえばそれでは生きている意味がないわけで、意味がないだけならまだしも、一番キツいのは肉体じたいが「しんどいしんどいしんどいしんどい」になるのだ。なんだこのむごたらしい仕組みは。

だからどうなるといって、そりゃあもう、おののが「(聖なる気持ち)」を持つしかない。内心でそれぞれの、強化されまくった「(聖なる気持ち)」を隠し持つしかない。そのためならむしろ自我インフレーションもウェルカムプリーズだ。

もはや「本人」がどうこうという、哲学的な課題ではなくて、じっさいのこととして「しんどい」に押しつぶされて破滅してしまう、そのことの回避のためだけに、「聖なる気持ち」の自動生成が起こっている。

そしてその「聖なる気持ち」をグーンと補充できたときには、現代人は「元気をもらった」と言うんだな。それがいまの世の中だ。本当にそうなのだからごまかしてもしょうがない。たとえるなら、酸素という「もの」がログアウトしてしまったところで、やむをえず「酸素な気持ち」を自動生成しているような状況だ。だからといって急に「酸素な気持ち」のバルブを閉めたらどうなる? いきなりそのバルブを閉めるわけにはいかないじゃないか。

この状況下で、われわれは、なぜか「自分はなんでもできる」と思い込むようになっている。なぜだかわかるだろうか、これを演繹から説明できてしまう人はたぶん相当頭がいい。

「聖なる気持ち」で(自我)が上昇してしまっているからだ。上昇させていないと「しんどい×4」でつぶれてしまうのでしょうかのだが、その上昇の副作用として、「なんでか知らないんですけど、自分はなんでもできる、はず、と思っているんですよね~(内心)」という症状が出る。そんな症状はないつもりでも、あれこれやり始めると、内部がその症状に巣食われていることが発見されてくる。

肉体レベルで、その重さが消えるほど、「本人」に到達している人というのは、言ってみれば「達人」のたぐいなのだ。「到達している人」なのだからそりゃあ「達人」だろう。達人ならなんでもかんでも出来るのが当たり前だ。何も出来ない達人なんていないだろう。だから現代では新入社員も内心「達人」として出社しているということだ。しょうがないだろう、達人でいかないと「しんどい×4」に押しつぶされてしまうのだから。

それで、たとえば学級会の調整もできない人が、国際情勢について「もっとこうするべきなのに、外交官はアホ」みたいな達人コメントをウェブ上に書き込む。恋愛経験がゼロの人でも、なぜか「じっさいに付き合ったら、わたしはけっこう尽くすタイプの、恋愛の達人」と思っている。すべてのことに経験と実績がゼロでも、すべてのことに達人だから、発想がまず(マウント)から始まってしまう。

すべて土台が「聖なる気持ち」から発しているので、達人スタートになるわけだ。なんでもできるはずという思いがどこかにずっとありつづけてしまう。けれどもとうぜん、じっさいに何かをしてみると、達人級の靈験なんか伴うわけがないので、じっさいに何かをするということからは遠ざかっていく。それはもう、(ヒステリー)を帶びて遠ざかっていくよりしようがない。本来は、訓練や勉強や交友や経験を重ねてさまざまなものを受け取っていかなくてはならないのに、まずその達人スタートを否定される時点でヒステリーが起こって退却を余儀なくされてしまう。どだいが達人スタートなのに、「本人が出てないじゃん、本人を出してよ」といきなり本質クライマックスみたいなことを問われるのにはあまりにもキツすぎるだろう。じっさい、達人を言い張るということは、そこに「本人」が現れ、聖なる「もの」さえ認めさせるということでなければその資格がないのだからしょうがないことではあるのだけれど。

達人なんてダセえ語を使うのは気が引けるが、わかりやすさのためにその語を使うなら、達人というのは「イヤというほど事実が重なり、当人ももうカンベンしてくれと思っている状態」のことを指す。達人なんていうものは才能がどうこうではなく事実のことなのだ。たとえばおれは中学のときから、中間試験や期末試験のころになると、おれの家にぞろぞろクラスメートたちがやってくるという状況にあった。「お前のところだとなんか勉強がしんどくないんだよ」「勉強する気になる」「お前教えるのうまいし」ということでだ。中学二年のころなどは、試験前のおれは教える側であって、おれ自身が勉強する余地はない、というような状態だった。そりや内心で「カンベンしてくれ」ぐらい思うだろう。

高校のとき、H Rの延長で、それぞれが何かレポートを発表するという、どうでもいい企画があった。誰もまともに調査なんかしてきていないし、何をレポート発表しても誰もまったく聞いていないという、当時の男子校なら「そりやそうでしょ」というような風景があった。おれも、おれの番になって、さっさとその茶番を済まそうとしたのだが、おれが壇上に立った途端、なぜかクラスメートたちは静まり返って興味津々の面持ちを向け、おれの発表に聞き入ろうとした。おれは内心で、「えっ……なにそれ」と思い、直後には内心で「ふざけんな、お前らブチ殺すぞ」と思った。こんな状況の中で、おれだけまともに発表できるような調査をしてきているはずがあるか。それでおれはグズグズの発表をして、クラスメートたちに「なあんだ」と落胆されたのだった。ふざけんな、といまでも思う。いま思い返してもあのシーンは背筋が凍る、なかなかの恐怖体験だった。

おれは自分で料理が上手だとは一ミリも思っていない。まあヘタではないと思うが……しかしじっさいに、友人らといふときに「腹減ったし、何か作るかねえ」とおれがボソっと言うと、一同はそれしか楽しみがない家畜小屋の動物たちのようにバッと一斉にこちらを向くのだ。おずおずと、「な、何を作るんですか」と訊かれ、おれは弱々しく「チャ、チャーハンとか」と言うのだが、どのように控えめに言ってもアホどもは「おおおおお……」と無意味な声を鳴動させる。

達人というのは、どうしてもう当人は目を背けたくなるほど事実に圧迫されているものであって、少年マンガのように思い耽っているものではない。

「特に意味ないけど、頭ナデナデでもするかな」と言ったとき、わあーっと行列ができるのであれば、あなたは達人でもないしその手に浄化の作用もない。

料理を作つて食わせたときに、「おいしいですね」と言われるのはふつうのことであつて、そうではなく達人がどうこうというなら、食わせたときに「な、なんじゃこれ！！」と困惑と驚きの叫び声があがるというのが達人のそれだ。

尾籠だが、若い人にとって必要なことで言えば、セックスのときに「うふん、気持ちいい……」と言われるのがセックスの達人ではなく、「えっ、ちょっと、何これ、えっ？」と困惑と驚きが起こり、そのまま叫び声になっていくのが達人のそれだ。

そして、こうしたことのすべては、(本人)という「もの」があればすべてそのようになる、というのが今回の話だ。技術とかセンスとかの問題じゃない。

おれが焼いて、あなたの口に突っ込んだソーセージは、焼きすぎて塩を振りすぎていても旨いだろう。食事という「(もの)」じたいが旨いので、あなたは「何これ、えっ？」と困惑して驚くのだ。

「(しんどい) × 4」とはえらい違いじゃないか。

方法を知りたいだろう。

このことのすべてを、解決し、あるべきところへ立ち返らせるための唯一無二の方法は、まさかのまさかで(肉体労働)だ。

あなたが楽器を弾くなら肉体労働としてそれを弾け。絵を描くなら絵筆を、小説を書くならキーボードか万年筆を、声を出すならその発声を、演劇をするならその演技を、すべて肉体労働とせよ。肉をサボらせるな。技術なんかゴミ箱に捨ててしまえ。全身の肉が全靈となってサボらずに労働するようになつたら、いつぞやゴミ箱に捨てた技術を拾いに戻ってもいい。

青春は肉体労働とせよ。恋あいは肉体労働とせよ。芸術は肉体労働とせよ。作品は肉体労働とせよ。会話は肉体労働とせよ。物語は肉体労働とせよ。料理は肉体労働とせよ。セックスは肉体労働とせよ。学門は肉体労働とせよ。あなたの生のすべては肉体労働とせよ。あなたの「(本人)」があなたの肉体にそのように命じているだろ、あなたにはそのことがずっと聞こえなかつたのか？

おれはもともと、肉体労働を（奉じる）側だったのだ。そりやそうだろ、そうでなきやこんなに料理のレパートリーねえよ。おれが作る側だったからレパートリーも作りこみも進んでいったというのが自然な成り行きだろ。いまだって、ハアハア言いながら肉をヘロヘロにして、十二月三十日の午前七時に書き話しを続いているのはおれの側だ、おれはもともと肉体労働を奉じる側だった、おれは自分の所属を「(俗)」だと確信していたからな。

おれは自分の「俗」所属を確信していく、「聖」に所属している人の感覚はまったくわからなかつたから、そのことに触れようともしなかつたし、覗き込もうともしなかつた。ただおれは肉体労働を奉じることしか発想になかつた。それでおれはまったく疲れなかつたわけだし。

ただ、そのことを続けているうち、一部の人が「ギャー」と悲鳴をあげ始めた。以前にも話しているとおり、なにか精神が地獄に落ちるビジョンを視たらしい。救急車まで呼ぶ騒ぎになっておおごとなつてしまつた。似たようなことはその他のシーンでも起つり、その他の人にも起つった。そのことは機械的に起つて、実験してしまうと再現性まで確かめられてしまう。

それでおれは、危機管理や安全保障のこととして、「おれが一方的に肉体労働を奉じるのはアカンらしい」ということを認めざるを得なくなつた。

いまになって考えれば、それは、「聖なる気持ち」の誰かに、おれ「本人」がひざまずいて肉体労働を奉じ続けると、どうなるか、ということの実験になつてしまつていたのだとわかる。身体の重さが消えるということの逆、何か無限のような「落下」を体験するらしい。

それで、もうこれで材料は出そろつたわけだ。おれは何を見てきたのか、そしていま何を話しているのか。

おれは（俗）にいるのだ。あなたも（俗）にいる。おれには聖なる気持ちではなく、あなたには聖なる気持ちがある。

なぜあなたには聖なる気持ちがあるのか？ それは、あなたが「(しんどい) × 4」に押しつぶされそうだからだ。

おれには聖なる気持ちはない。それは、おれが「しんどい」には無縁だからだ。

なぜ「しんどい」に無縁かというと、おれは「(本人)」で挙動しているからだ。

あなたも自分で動いているつもりでいる。

まさに今回の話はそこに尽きる。

おれの言っている「本人」と、あなたの思っている「自分」は、別の事象なのだ。

あなたの思っている「自分」は、まさかのまさか、（周辺的）な事象なのだ。

あなたの思っている「自分」は、「(世の中)」に発生している。

だからあなたの言っていることは、何の抵抗も起こらず世の中で通じる。

おれの言っていることのほうは、世の中でぜんぜん通じないでしょ。

腹が減ったので、あなたにバターロールパンを買ってきてもらおうか。

バターロールパンを買ってきてくれ。

そう言わされたら、あなたはどうか。

ぴゅーっと買いに行ってくれるだろうか。コンビニはすぐそこだ。

あなたの思い描いたところ、あなたは「ぴゅーっと」買いに行ったのじゃないか？

なぜ「ぴゅーっと」なのか。

(重さ) が消えているからだ。

おれは、急いで買ってこいとか、走れとか、まったく言っていないのに、あなたはなぜか「ぴゅーっと」を思い描いた。

次の場合はどうか。

テレビの情報番組が、「いまバターロールパンが人気です」と言った。占いのコーナーが、「今日のラッキーアイテムはバターロールパン」と言った。たしかに美味しそうではある。

あなたには、「バターロールパン、かあ。買ってこようかな」という気持ちが湧いた。

そのときあなたの思い描くところ、あなたはそれを「ぴゅーっと」買いに行くか？

違うだろう。何か気分たっぷりで、フフン、と鼻歌でも唄いながら、何かのワンシーンみたいに買いに行くイメージが湧くのじゃないか。

それって、イメージとして「聖なる」やつだろ。

俗たる、というイメージではないでしょ。

聖なる午後の光の中を、聖なるわたしが、聖なるごきげん情動で、聖なる散歩をフフンとしているんじゃないかな。

そのときその散歩は、「(具体的の運動)」になっているでしょ。

まさか肉体労働ではないわな。

いっぽう、「ぴゅーっと」お使いにいかされたのは？

そっちは肉体労働であって、具体的の運動ではないな。

あなたが気づかないところに、決定的な違いがある。

小さなことだが、違いはまったく小さくない。巨大で決定的な違いだ。

おれが本人で「腹減った、買ってこい」というと、あなたは勝手に「ぴゅーっと」、その肉体労働を思い描いて決定する。あなたがそう思い描こうと企図したのではない。なぜか「ぴゅーっと」なのだ。そこに何のイメージも情動もない。

逆に、もしあなたが、あえて破滅に突っ込みたい、と熱烈に望むのであれば……

おれ本人があなたに命じたことを、あなたは聖なる気持ちで受け取れ。

あなたの聖なる気持ちに組み替えて挙動しろ。

それだけあなたは破滅にぐいぐい突っ込んでいくだろう。

聖なる気持ちでおれの話を受け取った瞬間、あなたの具体は重さを持ち、あなたは重さに抗して具体的の運動をぶんぶん振り回し始める。

あなたが破滅したければ、楽器を持つあなたに、おれ本人が「Aの音を出せ」と言ったとき、あなたはそれを聖なる気持ちで受け取れ。

聖なる気持ちに組み替えて、気持ちをたっぷりこめた、具体的の運動として音を出力しろ。

あなたの楽器からは、重苦しい、罪業の降り積もったAの音が鳴り響くだろう。

そういう演奏が好きといふ人もいるけれどね。

本人 vs 聖なる気持ち、について。

「バターロールパン、かあ。買ってこようかな」という言い方にヒントを見よう。

この一言だけで、「ぴゅーっと」は失せ、聖なる気持ちが湧いてくるんだったな。

「青春、かあ。頑張っちゃおうかな」

「恋愛、かあ。頑張っちゃおうかな」

「芸術、かあ。頑張っちゃおうかな」

「作品、かあ。頑張っちゃおうかな」

「学門、かあ。頑張っちゃおうかな」

自我が上昇している、ということは「気持ち」の感覚でわかるはずだ。

上昇した自我は、青春活動を始め、恋愛活動を始め、芸術活動を始め、作品活動を始め、学門活動を始めるだろう。

すごい勢いで、活発で、イケイケだ。いつもヘロヘロ肉になっているおれとはえらい違いだな。

あなたはつらい思いをしなくてはならない。

どういう「つらい思い」かを正確に把握して、その正当性を引き受けなくてはならない。

なあに、すぐ済むよ。

誰かの本人がいてくれたら、じつはなんてことないんだ。

つらい思いとは、「(本人) を問われてしまう」ということだ。

「青春、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、「よし、最後までやり抜こうぜ!」という声を発してみる。じつに青春っぽいな。

それが、青春のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

違和感があり、ぎくしゃくしており、ウソっぽく、寒い。誰かが「もうやめようぜ」と言い出しかねない。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

「恋愛、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、「思いきり、愛し合っちゃいましょ……」と、ベッドルームで服を脱いでいく。じつに恋愛っぽい。

それが、恋愛のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

性器は濡れているが、何かがウソっぽく、寒々しい。彼が途中で「もうやめようぜ」と言い出しかねない。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

「芸術、かあ。頑張っちゃおうかな」ということで、聖なる気持ちに上昇する。

それで、目を潤ませて、「この表現は、躊躇を超え、わたしたちの思いを乗せたものです」と発表してみる。じつに芸術っぽい。

それが、芸術のはずが、

(あれ……?)

という感じになる。

客が空気を読んでくれている、けれども苦しい、その感じがひしひしと伝わってくる。寒々しい、どうでもいいようなヨイショ気味の拍手が打ち鳴らされる。しかしいまさら、その潤んだ目とそれっぽい表情をやめるわけにもいかないので、最後までその顔面と芸術っぽさをやりきる。

そうしたとき、何かがとてつもなくつらい。

ぜんぶこのパターンだから、これ以上の例示は要らないだろう。

とびっきりの「わたし」「おれ」を表示したはずが、「あれ……?」となるのだ。

ヤバイ空気だ、即座に誰か他人のせいにしたい。他の何かのせいにしたい。

ヤバイ空気だが、ここまできて、急に「(ネタ)」にして混ぜ返すのか？ それも醜いことだという自覚をまぬがれない。

この悲劇は、「(周辺的) という悲劇」だと説明できる。

上昇の果てに勇気をもって示した、とびっきりの「わたし」「おれ」。それは「本人」ではなく、周辺的なキャラでしかなかった。

わざとやっているのじゃない。当人は本気も本気、大真面目にすべてをやったのだ。

ネタにしてごまかそうとした、でもそれもごまかしきれなかった。

腹の底が震えて、感情が焼き切れそうだ。

爆発寸前の内部で叫ばれているのは、

——どれほどの“（気持ち）”をつぎ込んできたと思っているの！？

その気持ちのすべてを否定されるとき、どれほどつらい思いをするか。

ウソ偽りなく、ありったけの気持ちのすべてを投げ込んできたのに、それが「ウソっぽい」なんて、どういうこと？

わたしの精一杯の気持ちが、どうしてこんな侮辱を受けなくてはならない。

——わたしの青春、わたしの恋愛、わたしの作品、わたしの生きること、すべて、本当の気持ちをつぎこんできたの。

そのときのあなたの気持ちちは「わかる」し、あなたの心理も「わかる」。それがどれぐらい危険な状態かというのは、たぶんあなたよりもおれのほうが年の功があつてわかっているかもしれない。

けれどもこれ以上あなたを迷いの森に閉じ込めておくわけにはいかない。

あなたのやったことが、ウソだといっているのではなく、(周辺的) だと言っている。

あなたにもあなた「(本人)」というものがあるのだ。

そしてあなた「本人」は、周辺的なことをよろこびにはしない。本人は本人のことをよろこびにする。

あなたの本人がよろこんでいないことに、あなたの（自我）が高ぶっているから、そのことじたいがあなた自身にも「ウソっぽい」と感じられているんだ。

もう一度、初めの図1に戻ってごらんなさい。あなたはやはり誤解しているでしょう。自我、心理、気持ち、情動が、あなた本人だと誤解しているでしょう。

この最もつらい思いをするとき、あなたは、何かに見放されたと感じ、「もう終わりだ、何もかも終わりだ」というショックを受ける。

でも本当はそうじゃない、あなたが見放されたのじゃなく、あなたの自我の側が、あなた（本人）を見放してしまったんだ。

本人の側があなたのことを見放すことはない。

見放すといって、「分離」するのは（自我）の側の機能なのだから。

あなたがこの最もつらい思いをするとき、あなたは必ず思い出すこと。

そのどうしようもない気持ちのつらさを、解決してくれる、消し去ってくれるのは、思いがけないことに「(肉体労働)」だ。

情動のイメージからまったく逸脱した肉体労働を思い出せ。

気持ちを侮辱されて、最も憎らしいと思えるその人を、それでもこの人には「本人」があると思えるなら、情動のイメージに反して、あなたは水を汲んできて、その人に水を差しだせ。

湯を沸かして、茶を淹れて差し出せ。

そんなことをするぐらいなら死んだ方がマシと思えるかもしれないけれども、一度は考えろ。

その人の荷を運び、脱ぎ散らした衣類を整頓し、什器についた垢を落とせ。

その人の土地をたがやして、作物の生る地にせよ。

その人の肉体を休ませ、あなたが肉体労働を奉じろ。

すると、とんでもないことが起こる。

そのとんでもないことが起こったとき、あなたは、先ほどまでのつらさの情動とは正反対に、「このことをさせてもらえない」とわたしは死んでしまいます

と言い出す。

そのとき、あなた自身でもわかる、あなたの声と発言はまったくウソっぽくない。

重々しくもなく、情動も伴っていない。

まったくどこのイメージにもなかつたことばだ。

そのときあなたは、自分が「(本人)」で話しているということが直接わかる。

あなたは「本人」であってください。